

ゴブリンマスクを被ってみれば、文明開化の音がする！

ゴブリンライター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、エオルゼアのゴ布林族「アルデニクス」は、大きな大きな「ヤーンの大穴」を覗き込んでいると、うっかりすっかり落っこちて、気付けば見知らぬ異世界にいた！

そこで出会ったのは、やっぱりといつかなんといつか、同じゴ布林族！

それから始まる異世界ゴ布林ストーリー！ ゴ布林冒険者アルデニクスの明日はどっちだ!?

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

目次

ゴブリン異世界へ	1
名付けと芸術と爆発と魔法と、そしてゴブリン	14
ファースト・ゴブリン・コンタクト 1 / 2	26
ファースト・ゴブリン・コンタクト 2 / 2	42
秩序の中の混沌（ゴブリン）	63
喋るサカナと喋るゴブリン	79
人間のようなゴブリン	102
ゴブリン・アイデンティティ	122
ゴブリンのような人間	143
行きて帰りしゴブリン	164

ゴブリン異世界へ

若きゴブリン族の冒険者アルデニクスは、ガスマスクに防護服、中には大きな荷物を背負った、一般的なゴブリン族の青年だ。

今日も今日とて興味深いものや面白そうなものを求めて、北へ南へ東へ西へ……本日やって来ましたのは、ギラバニア辺境地帯にある「ヤーンの大穴」——巷で噂の冒険者が、世界の命運を懸けて戦った、大きな大きな大穴だそう。

今じやなんの変哲もない大穴だけれど、ほんのちよつと前までは、奇妙に変色したエーテルに包まれていた。その不思議な不思議な大穴の奥底で、「光の戦士」と呼ばれる冒険者が、「オメガ」という名の古代兵器と、切った張ったの大激闘！

見事勝利を収めたは、ココロを持った光の戦士。ココロを持たざるオメガの方は、小さく細かく成り果てて、「始まり」と共に旅立った。そんなこんなお話だ。

アルデニクスはとてとて興味深げに、大穴のなか覗き込んだ。1マラムもありそうな大穴が、ゴオオオオという音を立てて口を開いている。あまりにもあまりにも深すぎて、底は真っ暗で見えることはできない。まるで「七獄」の底まで、続いているかのよう。

それでも恐れ知らずのアルデニクスは、もつともーつと身を乗り出して、大穴の底覗こうとした。噂じや大穴の奥底は、「七獄」ではなく「次元の狭間」という、これまた摩訶不思議なところに続いているらしい。

そこがどんなところか知らないけれど、ゴブリン一倍好奇心旺盛なアルデニクスは、そこがどんなところか知りたかった。

だからもつともつともーつと身を乗り出して、大穴を覗こうとした。そしたらこしたら突然突風が吹き荒れて、アルデニクスの背中をブウウウウつと押した。

普段ならなんてことない突風だけれども、とてとて身を乗り出していたアルデニクスは、うっかりすつかりバランスを崩してしまった。

ゴブゴブ踏ん張って我慢したけれど、トドメとばかりにフワツと吹

いて、あくれくつとアルデニクスは大穴の中に落っこちた。
それからこれから、アルデニクスをエオルゼアで見たものはいない。

*

*

ヤーンの大穴に落っこちたアルデニクスは、気付けば見知らぬ森にいた。「黒衣森」でも「夜の森」でもない、不思議な不思議な大森林――まあ、長いゴブ生そんなこともあるさゴブ、とあんまり気にしないアルデニクス。いつでもどこでも楽観的なのは、どのゴブリンでも変わらない様子。

そんなこんなで不思議な森を彷徨い歩いて幾星霜、運良く同族であるゴブリン族と出会ったとき。どうにもこうにも話を聞けば、古ぼけたボロボロの遺跡なかで、身を寄せ合って暮らしているらしい。

それならこれならよくある話だけれども、しかしてしかしておかしな様子。なんとビツクリこのゴブリンたち、「ゴブリンマスク」を被ってない。一体全体どうしたことか？ アルデニクスは尋ねました。

「シュココオ……シュココオ……」

どうした　どうした　オマエたち

どうして　こうして　マスクを被らぬ？

それじゃあ　これじゃあ　とととて苦しい　息はゼイゼイ　汗はダラダラ　これこれみつともないゴブ――

ゴブリン族にとってマスクは、とととて重要なものである。彼らは一生涯マスクですごし、無理に外そうとすれば、たちまちドカンと爆発する。

どうしてこうして、そこまで頑なのかは知らないけれど、ある学者の話によれば、ゴブリンたちには外の空気は猛毒だとか、なんんだとか。嘘か真か色々あって、どれがホントかゴブリンにも分からない。兎にも角にも、ゴブリン族、とととてマスクは欠かせない。それを外して暮らすなど、全く考えられないことである。

「ウツセー！　不気味なゴブリンめッ！　マスクなんてモン、シラ

ネーヨ」

ところがどっこい、びつくらこいた。アルデニクスが出会ったゴ布林たち、とてとて汚いゴ布林語で、そう罵るように言ってきた。なんとも野蛮な言い草です。みれば彼らの服装も、とてとてみすぼらしく不衛生。まるで原始ゴ布林のよう。文化的で文明的な、栄えあるゴ布林族とは、とてとてーつても思えない。

それでもアルデニクスは落ち着き払って、なだめるように答えます。

「これはビックリ　なんとビックリ

こんなに　そんなに　イカしたマスク　被らなければ分からない
「美男美女」が分からない」

ゴ布林族には独特な美的感覚があり、ヒトのそれとはそこそこ違う。生まれて死ぬまでマスクを被り、それでも彼らにや「i x」(美男)と「o x」(美女)の概念がある。もしかするとひよつとすると、彼らは「マスク」で「美男美女」を見分けてるのかもしれない。

「へエアッ!?　「美男美女」ってなんだゴブ?

それはヒトのメスよりイイものかゴブ?」

アルデニクスの言葉に興味を示したゴ布林たち。知性の欠片もなさそうな彼らだけれど、そこはここはゴ布林族。知的好奇心に忠実で——もしかすると「性欲」に忠実だったのかもしれないけど——アルデニクスの話に耳を傾けた。

「シユココオ……シユココオ……」

もちろん　もちろん　そうだゴブ

ヒトの娘は　プヨプヨ　フヨフヨ　柔らかく　うっかり押すと潰れそう

ゴ布林族の女の子　カリカリ　トロトロ　イイ感じ!・

たとえば　そらえて　言うなれば　まるでプーンつと臭うチーズのよう!」

「へエエエエ、そうだったのか、そうなのか!　どうでこうりで、ヒトのメスは壊れやすい。ちよつと乱暴に扱えば、すぐさま泣いておかしくなる。そうだったのか、そうだったのか!」

アルデニクスは知らなかったが、このゴ布林たちは「ハイデリン」のゴ布林ではなく、「四方世界」というまた別の世界のゴ布林だった。

なのでアルデニクスの常識が通用するわけがないのだけれど、この世界のゴ布林は知能が低いわりに学習能力はやたらと高かったため、何やら常識外れなアルデニクスの言葉も、すんなりきっちり受け入れてしまったとき。

新たな「美男美女」という概念の伝来に、ゴ布林族は沸き立ちました。

「それならこれならオレたちも、今日から「マスク」を被るゴブ！」「美男美女」になるんだゴブ！

だからだからお願いゴブ。どんなこんな「マスク」が良いか、教えて話して欲しいゴブ！」

「シユコオ……シユコオ……」

それなら これなら 教えよう

我らが 彼らが ゴ布林族 マスクを被って幾星霜 色々色々 試したけれど みんな違ってみんなイイ！

思い思いのゴ布林マスク 作って集めて被るといいゴブ！」

アルデニクスの言葉に、ゴ布林たちは「オオオオ」つと喝采をあげた。しかし、中には冷静なゴ布林もいるようで、オドオド、ワアワア不安そうに訊いてくる。

「ただどだけどオレたちは、マスクの作り方知りません」

思い思いと言うけれど、知らなければ作れない、作れないなら奪うしかない」

あれまそれま由々しき事態！ けどもけれどもアルデニクス、すかさず素早く言いました。

「シユコオ……シユコオ……」

心配するな 心配ない オマエたち知らなくても アルデニクスが知っている 作り方を知っている いろんなことを知っている

今日からこれからオマエたち 「奪う」じゃなくて「創る」ゴブ！
奪うゴ布林 野蛮人 みんなに嫌われ 迫害者 みんなにみんな

なにイジメられる

創るゴ布林 文明人 みんなに好かれて 歡迎者 みんなにみんなに喜ばれる！」

ゴ布林たちはアルデニクスの言葉に、より一層「オオオオ!!」つと沸き立ちました。そうか、そうか、そうだったのか！ オレたちみんなに嫌われていたのは、襲って奪っていたからなのか！ そうかそうか知らなかった。ワイワイ、ガヤガヤ、ホグホグ、ゴブゴブ。ゴ布林たちはこれまで本能で生き、本能だけが全てでした。本能で犯し、本能で襲っていたのです。どうしてそうなったのかと言えば、そう産み落とされたからとしか言えませんが、兎にも角にもそういう生物だったのです。

しかし、そんな本能に忠実なゴ布林族でしたが、どういう訳か学習能力も旺盛でした。それ故アルデニクスという異物の登場により、本来あるはずのない「知性」にも、うっかりすっかり目覚めてしまったのです。

「今日からこれから オマエたち マスクを被ったイカしたゴ布林！ 今日からこれから オイラたち マスクを被ったステキなゴ布林！」

ゴ布林マスクを被ってみれば 文明開化の音がするゴブ！
アルデニクスに合わせて、他のゴ布林たちも唱和する。

「ゴ布林マスクを被って見れば、文明開化の音がするゴブ！
ゴ布林マスクを被ってみれば、文明開化の音がするゴブ！」

文明開化の音がする、文明開化の音がする！
割れんばかりの大合唱、森の中に響いていく。

文明開化の音がする、文明開化の音がする！
「二文明開化の音がするゴブ！ 文明開化の音がするゴブ！ 文明開化の音がするゴブウウウーッ!!」

斯くして……「四方世界」のどこかの森で、ゴ布林族の文明開化が、人知れず始まったのでした。

*

*

アルデニクスが異世界のゴ布林と出会って、それなりの季節が流れた。正確な日数は良く分からない。ゴ布林族はそういったことを気にしない。アルデニクスも気にしない。

「シユココオ……シユココオ……」

気付けば気付けば　そこそこの時間　流れたゴブ

ゴブたちみんな　イカしたゴ布林　なったゴブ

これもそれも　アルデニクスのおかげゴブ！」

さながら原始ゴ布林のようだったゴ布林たちは、今ではアルデニクスの指導の下、思い思いの「ゴ布林マスク」を作っていた。まだまだ拙く下手つぴなマスクだったけれども、自分たちの手で創り上げた、生まれて初めてのステキな「贈りもの」だった。

「シユココオ……シユココオ……」

そんなこと言われると　とてとてとーっても照れるゴブ

アルデニクス　ちよちよいちよちよいと　手伝っただけ

ロツクニニクスたち　とてとてとーっても頑張った！」

マスクを被ったゴ布林たちは、アルデニクスがもたらした風習に従い、これまたそれまた思い思いの「名」を名乗っていた。「固有名詞」という概念がなかったゴ布林に、初めて「名前」というものがもたらされた瞬間である。

ゴ布林族の命名規則に則って、あるゴ布林は「i-x」（美男）を、あるゴ布林は「o-x」（美女）を名乗っていく。名付けはゴ布林たちにとって初めてのことであり、誰も彼もが夢中になった。

「昔々のそのまた昔　あるある賢人　こう言ったゴブ

『名は心を形作り　心は体を形付ける　命名は精神を作り上げることであり　命名は肉体を決定づけることである』

ようするにこうするにこういうこと　名前はとてとて大事です

“　よくよく考えて決めるゴブー！”

アルデニクスの言葉に、ゴ布林族に稲妻が走った。なにそれなにこれスゴくない？ 「名前」ってちよースゴくない？　なんかとて

もスゴくない？ それぞれ名乗れワレの「名」を！ やれやれ名乗れキミの「名」を！

実際はそんなにスゴくもない話だったが、原始ゴブリンにとっては、天啓とも言える閃きだった。我先に我先にと名乗りをあげるゴブリンたち。

食事が好きなゴブリン、木陰がお気に入りのゴブリン、岩のように固くなりたいゴブリン、俊敏なゴブリン、ノロマなゴブリン、女好きなゴブリン、男好きなゴブリンなどなど、みんなみんな思い思いの「名」を名乗っていく。

そしたらどうということか、まさかまさかの事態が起こる。ゴブリンたちが「名前」を名乗ると、なんとなんとゴブリンたちに、「個性」と「性別」が生まれたのである。

イトトミニクスは食事好き、ツリードナロクスは木陰で休む、ロツクニニクスは岩よりも固いかもしれない、ソニツクソツクスはとっても素早い、ノローピニクスはのんびり屋、オクスニクスは女好き、ニクスオクスは男好き、みんな違ってみんなイイ！

「i x」を名乗ったゴブリンは、オスオス雄らしいオスゴブリン。「o x」を名乗ったゴブリンは、メスメス雌らしいメスゴブリン。二つの違いもそれまたイイ！

オスとメスでキャツハウフフ、美男と美女でウツフキャハハ。くんずほぐれつ色々して、産めよ増やせよゴブリン族。ヒトのムスメを襲わずとも、増やせるもんだゴブリン族！

そんなこんなで「個性」と「性別」を得たゴブリン族。あれこれそれこれ能力別に、「個性」にあつた仕事を決めた、「性別」にあつた役割を決めた。

「狩りが得意なゴブリンは みんなのために 狩りをする」
料理が得意なゴブリンは みんなのために 料理する」
採るのが得意なゴブリンは みんなのために モノを採る」
作るの得意なゴブリンは みんなのために モノ作る」
育てる得意なゴブリンは みんなのために 子育てする」
みんなみんなやることあつて みんなみんな意味がある」

みんなで力合わせれば みんな幸せ ちょうハッピー！」

そういったわけで色々あって、「四方世界」のどこかの森の、奇妙な奇妙なゴ布林たちは、見事な見事な発展を遂げていく。

「狩りとか採集する時は 槍とか弓とか便利ゴブ 斧とかハンマー便利ゴブ

どんどんじゃんじゃん作るゴブ どんじゃんどんじゃん使うゴブ」
まずはアルデニクスはそこら辺に転がっている木や石や蔓で、そこそこ立派な石器を作ってみせた。それはとっても原始的な道具だったけれども、そこは知識の民ゴ布林族のアルデニクス、デキはそれなりだったとき。

モノを作るの得意なゴ布林たち、それを見よう見まねで真似てみる。始めはお世辞にも上手くはなかったが、次第にそれなりのモノできた。

「最初は簡単単純でも そのうちこのうち 複雑にできる

剣や銃も言わずもがな ドリルやノコギリ作れるようになる
ビームやミサイル撃てるようになる！」

アルデニクスの言ったことは、たいそう物騒な目標だったけれども、ゴ布林たちにはビームとかミサイルとか “なんじゃそりや” だったので、取り敢えず「オオオオ」とか言って盛り上がっておいた。そうやって作られた「道具」を使い、ゴ布林たちは原始的な狩猟生活を始めた。これまで略奪や強奪でしか食料を入手出来なかったゴ布林たちにとって、これは画期的な手法だった。

「手に入れたブツは 「火」で調理すると とてとて美味しいゴブ！
煮ても焼いてもよろしいゴブ！ 蒸しても炙っても美味しいゴブ
！

火はとてとてイイものだゴブ とてとてとーっても便利ゴブ！」
そう言ってアルデニクスは、手に入れた肉を持って、「火の魔法」を使って見せた。メラメラボウボウ炎が燃える。それに肉を近づけて、ジュージュージュー焼いてみた。

こんがり焼けたお肉の匂いが、たちまち辺りに広がっていく。ゴ布林たちは歓声をあげた。こんなにそんなに美味そうない、嗅いだ

ことはありやしない！

「スゴいぞ スゴいぞ アルデニクス！」

しかして しかして どうしたらいい？ 「火」を生み出すには
どうしたらいい？」

「それは とてとて簡単だゴブ

この「火の魔法」 ごくごく初歩的な魔法ゴブ

囁き 唱えて 念じれば 誰でも彼でも 使えるゴブ」

実際にはそう簡単にはいかなかったが、そこはベテラン冒険者のアルデニクス。どうにかこうにか指導をして、何人かのゴブリンが「魔法」を操れるようになった。

彼らの使う魔法は、「原始魔法」という至極単純な魔法で、威力も範囲もそれなりでしかなかったが、生活を向上するには十分すぎるくらいに効果があった。

「火は とてとて素晴らしいモノだゴブ

暖かくて 明るくて 優しくて 良いモノだゴブ

ときたま アツアツ メラメラ だけど ちゃんときちんと扱えば こんなにステキなモノはない」

アルデニクスの言うとおり、ゴブリンたちは時に失敗して火傷をしたり、火事を起こしたりしたが、その度に学習し、「火」を思うがまま扱えるようになった。「火」は色々なことに使えた。調理だけでなく、暗闇を照らしたり、寒さを和らげたり、モノを焼いたり加工したり、モンスターから身を守ることにうってつけだった。

こうして「火」を手にしたゴブリンたちは ますます活動範囲を広げていくことになる。

遠くの湖まで探検してみたり、切り立つ崖まで行ってみたい、ある洞窟の奥まで冒険してみたり、こっそり、ヒトの集落に忍び込んでモノを盗んで、みたり……それが見つかった若者ゴブリンは、後でこつぴどく怒られた。

「ヒトのもの盗むと怒られる とてとてスゴく怒られる

それこれ ヒトの「法律」で ゴブたちも破ると怒られる なんて
か知らんが怒られる とてとてとーつても怒られる だからダメダ

メダメ絶対！」

それは、アルデニクスがかつてもつと若かりし頃に経験した、重要な教訓の一つであった。

つい出来心でちよいとやらかすと、あれよあれよと「モルデイオン監獄」へ。そこでとてとて恐ろしい看守から、こつてりごつてり怒られた。今じゃそこそこ大人しくなったアルデニクスも、昔は結構やんちゃだったのだ。

「ゴブたちいっぱいいるけれど ヒトもいっぱいいるんだゴブ

とてとてとーつてもいるんだゴブ ゴブたちよりもいるんだゴブ

だから仲良く暮らすには 「尊重」 し合う大事ゴブ 「相互理解」が大事ゴブ」

アルデニクスの説法は、まだまだゴ布林たちには難しすぎて、よくよく理解できなかつたけれど、*「取り敢えずヒトを襲うはダメなのか」と、なんとなくだが理解した。*

「うんうん わかつたゴブ わかつたゴブ

ヤングシユリクス もうしないゴブ

だから あのオシオキだけは！ あの恐ろしいオシオキだけは勘弁して！」

アルデニクスの「オシオキ」は、小鬼も黙る恐ろしいモノ。曰く、*「父親譲りのオシオキ」*らしい。これによってゴ布林たちに「秩序」が生まれ、「罪」と「罰」という概念が生まれた。原始的な「法」の誕生である。

こんなことがあつた結果、「森外れの農村」では、ゴブリンの被害が格段に減つたけど、農村のヒトたちは*「ラッキーなこともあるもんだ」*と、あんまり疑問にも思わなかつた。もちろん、アルデニクスもゴ布林たちも、元々能天気なこともあつて、別にあんまり気にしなかつた。

狩猟生活を始めたゴ布林族の獲物は、森に住むシカやヤギ、リス、イノシシ、クマ、トリ、ムシ、サカナ、木の実などで、兎に角なんでもよく食べた。時には手痛い反撃を受けることもあつたが、そこは「数」と「道具」、そしてなによりも「知恵」に勝るゴ布林たち、ア

ルデニクスを中心として、幾度となく危機を乗り越える。

アルデニクスを始めとするゴ布林たちは、もはや「森の王者」と言っても過言ではなかった。今日も我が物顔で、ゴ布林たちが森をゆく。

「とはいえそはいえ 取り過ぎは いくない良くない ご法度ゴブ」
「どうしてこうして ナゼなのゴブ？ ゴブはお腹いっぱい食べたいゴブ！ とてとていっぱい食べたいゴブ！」

アルデニクスの言葉に、珍しくも食いしん坊の「イートミニクス」が猛反発した。

彼は食することが何よりも好きなゴ布林で、何でも食べちゃう悪食としても有名だったが、それ故に新たな「食材」を発見することもあり、ゴ布林たちの台所事情に、かなりの貢献をしていた。もちろん、その分食べてもいたが、そこはそれはご愛嬌である。

そんなわけだからイートミニクスの発言は、ゴ布林族の中でも一定の支持を得ていた。あるものあるだけ取って食べて、何がいけないというの？ ということだ。

「やれ取れ やれ食え 好き放題 いずれ取るもの尽きるゴブ いずれ食うもの尽きるゴブ」

ゴブの友達シルフ族 森の恵みで生きている おんなじおんなじモーグリ族 森の恵みで暮らしている

シルフもモーグリも言っていた 森を大切にするんだゴブ そうすりや森は恵みをくれる でもでもしなきゃ いつか森から追い出される〜」

それは実に原始的な精霊信仰の類であったが、元々原始的なゴ布林たちにとって、そこそこ受け入れやすい話だった。「祈らぬ者」から祈る者へ……初歩的なゴ布林信仰の始まりである。

「なるほどなるへそ わかったゴブ」

でもでも それでもイートミニクスは お腹いっぱい食べたいゴブ 森も大切にしたいけれど お腹もいっぱいしたいゴブ」

そうだーそうだーつとゴ布林族。それは困ったクマった大変だ。アルデニクスは考える。ナイスアイデア考える。

ゴブリン族は流浪の民で、旅をしながら生きている。冒険者であるアルデニクスも、旅をしながら生きていた。その日暮らしのその又暮らし。中々良いアイディアは浮かばない。

それでもこれでもアルデニクス。伊達に世界を渡る冒険者じゃない。ゴブリン族の知識になくても、旅した土地の知識から、なんとかかアイディア絞り出した。

「食べたい取りたい素敵な獲物 殺さず死なさず 捕らえるゴブ

食べたい取りたい素敵な植物 殺さず枯らさず 植えるでゴブ

そうすりやそのうち ドンドン増えて お腹もいっぱい食べれる
ゴブ

そうすりやそのうち いっぱい増えて 森の恵みもドンドン増えるゴブ」

こうしてアルデニクスの提案で、ゴブリンの間で原始的な農耕が始まり、野生動物の家畜化が始まった。産めよ増やせよ大地に満ちよ、我らに恵みを与え給え！ 原始的な狩猟生活からの脱却である。

*

*

静かな静かな森の中で、アルデニクスはひとり夜空を見上げていた。お空には大きな大きなお月様が “二つ”。赤と緑の丸いお月様。見たこともないお月様。

「シユココオ……シユココオ……」

どうやらこうやら ここ エオルゼアじゃないっぽいゴブ?」

かつてエオルゼアでも「二つの月」があつた時があつたけど、それはとてとて恐ろしい「過去」のもので、今じゃ一つだけのはず。今更ながらにそのことに気づいたアルデニクス。けれども “まあいいか” と、そんなにあんまし気にしない。細かいことは気にしない。

「異世界 異次元 異なるところ 別世界 別次元 別なるところ

とてとて滅多に行けないけど 行けないこともないらしい」

それなりに長いこと冒険者をしていれば、そんな話も聞くものさ。「闇の世界」に行つたとか、「異邦の誰かさん」がやって来たとか、無

いこともない。

あるゴ布林神学者が泥酔した末に言い放った言葉に拠れば、アルデニクスがいた世界は14番目に創造された世界らしい。それなら別世界の一つや二つ、珍しいことでもないだろう。

「それだけ「世界」があるのならば 他の世界に行くことあるさゴブ」
二つのまんまるお月様を眺めながら、アルデニクスはそう思った。
アルデニクス主導により始まった異世界ゴブリンの文明化は、驚くべき速度で急ピッチに進められている。

原始ゴ布林さながらだったゴ布林たちは、今では道具を持ち、家畜を飼育し、作物を育て、料理を楽しんでいる。

より暮らしやすくするために、住処の「修繕」も始まった。より効率よくモノを育てるために、「用水路」も引かれ始めた。より多くを恵みを得るために、「創意工夫」もし始めた。

それでもまだまだ足りない。「理想郷」にはまだほど遠い。

ゴ布林族は「放浪の民」だ。だが、理由もなしにただ放浪しているというわけではない。彼らは求めているのだ。彼らが望む、彼らの「理想郷」の在り処を。

「シユコオ……シユコオ……」

きつとここが ゴブの「理想郷」だゴブ

ここを アルデニクスの「理想郷」にするんだゴブ

クイックシンクスみたいに スローフィクスみたいに ここをオイラの「理想郷」にするんだゴブ！

そんな熱い想いを胸に秘め、アルデニクスはそう決意した。ゴブリン族の夜明けは近い！

名付けと芸術と爆発と魔法と、そしてゴブリン

アルデニクスの登場によって「命名」を知ったゴブリンたち。名付けに喜びを見いだしたのか、手当たりしだいに「名前」を付け始めた。世は正に「大名付け時代」である！

まずゴブリンたちは自分たちの住む「森」を、「ゴルダナル大森林」と名付けた。それ自体に意味などなかったが、そう名付けたことにより、「ゴルダナル」は「偉大なる」とか「大いなる」とか、そんな意味を持つようになった。こんなノリで、ゴブリン新語は作られていった。

ゴルダナル大森林の、北の東の遠くの方には、大きな大きなお山があつて、そのお山をゴブリンたちは、バカ正直に「ゴルダナル山脈」と名付けた。ゴルダナル大森林にあるお山だから、ゴルダナル山脈というわけだ。

大森林にはゴルダナル山脈を水源とする川が流れていて、ゴブリンたちはそれを「フィツシユチュクスリバー」と呼んでいた。最初は「ゴルダナルリバー」にしようと思っていたが、「フィツシユチュクス」がいつもいつも釣りをする「川」だから、そう呼ばれるようになったのである。

ワンパターンだった「名付け」にも、ヴァリエーションが生まれ始めた。創意工夫は文化ゴブリンの十八番なのだ。なんで18番というのかは、よく知らなかったが……。

フィツシユチュクスリバーは、ゴブリンたちの住処から程なくしたところにあつて、彼らはそこから生活水を得ていた。やがて「わざわざ川まで行くのが面倒ゴブ！」ということになり、「用水路」が引かれることになる。出来上がった用水路は、その経緯もあつて「メンドウ用水路」と名付けられたが、その名とは裏腹に、多大な労力をかけて作られることになった。

「前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪

前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩

進む♪」

今日も今日とて、奇妙な「唄」を歌いながら、ゴブリンたちは作業する。リズムもテンポもいまいちだった「歌詞」はアルデニクスが教えてくれたので、それなりの「仕事唄」になっていた。意味はあんまり分からないけど、まあいいじゃないか、いいじゃないか。ゴブリンたちはそこそこルーズなのだ。

「前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪

前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪

指数 崩 壊！」

時にはちよつとヤバめな歌詞が飛び出すこともあったけど、まあええじゃないか、ええじゃないか。ゴブリンたちはリズムに合わせ、ゴブゴブゴブゴブ体を動かす。みんなでヨイショと力を合わせ、単調だけど、楽しい作業。「井戸」でいいじゃないかと気づいたのは、「用水路」ができた後だった。

「クルクル回る「車輪」が回る クルクル廻る「滑車」が廻る クルクル回る「歯車」周る

クルクル回して 荷物を運んで 荷物を乗せたら 荷物を降ろして 持って帰りやあドッコイショ！」

「車輪」や「歯車」「滑車」といったカラクリも開発され、ゴブリンたちの作業効率は格段に改善された。荷車といった「キャリアッジ」が発明されたのである。

荷を引いたのはゴブリンではなく家畜たちで、家畜は「食料」としてだけでなく重要な「労働力」にもなっていた。特に重宝されたのは、二本足の肉食トカゲ「ラプトル」で、ゴブリンにとってこの動物は、乗ってよし引いて良しの素晴らしい家畜だった。

そんな風に色々あって、それなりの時間も掛かったけれど、「メンドウ用水路」は無事出来上がった。

メンドウ用水路が完成したことによって、ゴブリンたちは「水の力」を利用するようになる。

「シユコオ……シユコオ……」

水の力 スゴいゴブ とてとてとーってもスゴいゴブ
重いモノ たくさんのモノ いっぱいのモノ 運ぶ動かす 便利
ゴブ

アツアツ冷やすの便利ゴブ 家畜飼うの便利ゴブ 作物育てるの
便利ゴブ 水はいろんなコトに使えるゴブ！」

そんなわけで、用水路が出来たことにより、「船」や「水車」なども
作られた。物資の運搬は言うに及ばず、家畜や作物の世話も格段に効
率よくなった。特に喜んだのがフィツシユチッククスで、彼は釣ったサ
カナをこっそり用水路で飼うようになって、こっそりまた釣るようにな
った。ゴ布林による「養殖」の始まりである。

ゴ布林たちの活動範囲が広がるにつれ、「道」というモノも生まれ
始めた。アソコやココやソッチやアッチ。トテトテ安全にするため
に、とてとてキレイに整備され、同時に「名前」も付けられた。「アン
テロープロード」「バードロード」「リバーロード」「フレツシユロード」
「ハニーロード」「ラプトルロード」「マウンテンロード」など……
その道に困んだ名称で、自然とそう呼ばれるようになったのだ。

けれどもそれでも手当たりしだい、「名」を名付けたことにより、新
たな問題も生じることになる。

「うくん うくん どうしよう どうしようか 困ったゴブ」

困った様子のゴ布林族が、困った様子で困っていた！ これは大
変、あれま大変！

「なんだ どうした ナニゴトか？ 言ってみるみる 話してみる
みる」

「それが これが 困ったのだ アルデニクス

やたたと やららと 名前を付けて 名付けてみたりはイイけれど

あまりもあまりも多すぎて たくさん過ぎて覚えきれぬ 「名」が
多すぎて覚えきれぬ」

ただでさえ、仲間の名前を覚えるので精一杯だというのに……そう
困ったゴ布林訴える。

「それは困った くまった 大変だ

それなら これなら こうすると良い

オマエが「名」を書き留めて 残しておくの良いんだゴブ 「文字」で残して取つとくゴブ！」

困っていたゴ布林族、言われて飛び出て再び問いかける。

「文字」つて「アレ」か？

アルデニクス トキトキ書いてる のたくったミミズのような
「アレ」か？

「シユコオ……シユコオ……」

そうゴブ そうゴブ そうだゴブ のたくったミミズのような
「アレ」だゴブ」

アルデニクスは「文字」のスゴさについて、さらに語ってみせる。

「文字」は とととて便利ゴブ

誰かに伝える 誰かに教える 誰かに残す 誰かに記す

文字なら わざわざ「ソコ」に居なくても 伝えることができる

ゴブ 教えることができるゴブ

過去を記し 今を伝え 未来を描く！ 「文字」はとととて便利ゴブ！

「おお！ そうなのか そうなのか！ ならオレは「文字」を使おう

文字を使って「名前」を残そう 文字を使って「過去」を記そう

文字を使って「今」を伝えよう！」

こうして「文字」によって「名前」を残し、「過去」を記し、「今」を伝えるようになったゴ布林族は、名を「ヒストリクス」と改め、「ヒストリー」を綴るようになる。ゴ布林族に「歴史」が始まった瞬間であった。

ゴ布林たちはこのように、「役割」や「仕事」や「見た目」などが変わると、自らの名も改名するようになっていった。

新たな仕事唄を生み出すのに熱心な「シングソングス」。仕事唄に合わせ踊ることで快樂を感じる「ステップドクス」。ステップドクスのダンス合わせて、手当たりしだい音を撒き散らす「ドンジャラニクス」。アルデニクスが書く「図面」を真似て、いたる所に「絵」を描くようになった「アートシリクス」。

ゴブリン生活が安定の兆しを見せてくると、こんな不思議な行為に熱中するゴブリンも現れ初めた。いわゆる「芸術」や「美術」が花開いたのだ。

「シユココオ……シユココオ……」

イイぞ イイぞ その調子だゴブ！

みんなみんな 自分の好きなコトするゴブ！ 自分の好きなモノ創るゴブ！

歌って 踊って 鳴らして 弾いて 描いて 刻んで 彫って 写して

最初はそれなりダメダメでも そのうちこのうちイイことあるさ！ それなりことあるさゴブ！

アルデニクスはこういったゴブリン創作活動を、熱心に後押しした。「芸術」とは「文化」を促進するものであるし、「技術革新」はイマジネーションから爆誕するモノだからである！ つまりは「芸術」は「爆発」ということ！ アルデニクスは「爆発」が大好きで大得意だった。大芸術時代の爆開けである！

「芸術 美術 爆発だゴブ！ 美術 芸術 爆弾だゴブ！

一発ドカーンと打ち上げりや 何かが起きるさゴブリ爆弾！

そんなわけでゴブリンたちは「爆発」というものに熱中した。「爆発」と「カラクリ」はゴブリン族の華なのである。

主に使用された「爆発」は、アルデニクス特製の「ゴブリ爆弾」で、これはゴブリン秘伝の「ゴブリ火薬」を原料とした、とてとて特殊な「爆弾」だった。爆発力に優れ、誤爆性が極めて低い「ゴブリ火薬」は、ゴブリンたちの芸術のみならず、文明発展に爆発的に貢献した。爆発だけに。

「芸術」や「美術」といったものが、爆発のごとく発展し始めたゴブリンたちだが、当然、その飽くなき探究心は「内」ではなく「外」にも向けられるようになる。あの木の向こうを目指し、あの川の先を目指し、あの谷の底を目指し、あの山までを目指し、あそこや、こっちや、そっちや、あっちまで！ 生まれ持った探究心をフルスロットルにして、ゴブリンたちは思うがまま大地を駆けた。

そうして広がっていったゴブリンたちの版図は、とどまることを知らず、もはや一ゴブリンには把握しきれないほどに拡大していった。つまり何が起こったかという点、「迷子」が続出したのである。

「困った くまっ た 大変だ！」

狩りに行った連中が 三回寝ても戻って来ない！ 四回寝てようやく戻って来た！

こんなのもうコリコリコリゴブ どうしたらいいアルデニクス？」

のちに「マツピングクス」と名乗ることになるゴブリンが、アルデニクスにくまっ た様子で訊いた。

「それなら これなら 「地図」作るゴブ

色々なモノ色々なトコ 書き記した「地図」作るゴブ

そうすりやみんな きちんときっちり 戻って来れる 帰って来れる

見たことない “モノ” も知れるゴブ 行ったことない “トコ” も知れるゴブ

みんなで一緒に「地図」作るゴブ！」

斯くしてゴブリンたちによる、「ゴルダナル地図」の作成が始まったのである。

アルデニクスが作った皮紙の上に、アートシリクスが「絵」を描き、ヒストリクスが文字を刻む。あそこには “アレ” がある。あつちには “アレ” があった。そつちにはこんな “モノ” があった。それをマツピングクスが最後にまとめ、「点」を加え「線」を引き「名」を書き足していく。

独特な吹き抜け音がする「ゴオーン洞穴」、たくさん水が貯まる「リムローレン湖」、家畜たちの庭「ミートイトミート」、ゴブリンたちの農園「ボタルノスク農園」、「ゴルダナル採掘場」「スミシンロクス溶鉱炉」「グロレンツ工房」「サバルカス伐採地」「ハニービー養蜂場」「ドロドク青燐泉」「ラプトルの安息所」——そして最後に刻まれたのは、ゴブリンたちが住む「オンボロ遺跡」の「名」だった。

「シュココオ……シュココオ……」

ここは 我らの小さなお城　ここはゴブらの小さなお家
作って 直して 組み立てて みんなで創る理想の地　ここをゴ
ブリンの「理想郷」とする

その名もこの名も「リトルシャイア」　先人に倣って「リトルシャイ
ア！」

斯くして「リトルシャイア」と名付けられたオンボロ遺跡は、今日
も今日とて発展していく……。

*

*

驚異的とも言えるリトルシャイアの発展を支えたのは、異邦ゴブリ
ン「アルデニクス」の叡智だけではなかった。もう一つ重大な「要因」
があったのだ。言うまでもなく「魔法」のことである。

ゴブリンたちが使う「魔法」は、神様の「奇跡」ではない「原始魔
法」。威力も範囲もそれなりで、とてもじゃないが戦いには適さな
かったが、生活を便利にするには劇的な効果があった。ごく初期のゴ
ブリン文明は、この「原始魔法」が支えたのである。

火を灯す、水を清める、土を豊かにする、風を吹かせる、たったこ
れだけのことで、原始ゴブリンにとっては多大なる労力だった。そ
れを一挙に解決したのが「原始魔法」というわけである。

「昔々のそのまた昔　とてとて賢い学者が言ったゴブ」

雷落ちて火になった　火は燃えて土になった　土は遮り氷に
なった

氷は溶けて水になった　水は昇って風になった　風は曇って
雷になった

生命は巡りて元素は廻る　これぞ「六大元素」なり！」

アルデニクスが語った「六属創生論」は、自然界における「六大元
素」の成立過程や相関関係を、端的に述べたものだ。当然、ゴブリ
ンたちには高度すぎて理解不能だったが、理解できなくても使用でき
るのが「原始魔法」のイイところ。別世界でも使えちゃうのもイイこ
ろ。伊達に原始の名が付いてるわけじゃない！

「原始魔法」とは、もともと獣や魔物が狩りや身を守るために本能的に使用していた、超常現象の総称であり、まだ知性が低い原始ゴブリンでも、なんとか使えるものだった。それなりの素養と、それなりの修練さえすれば、ほとんどのゴブリンが使用できたのである。全てはアルデニクスの指導の賜物であった。

火の原始魔法はマッチ程度の火力しかなかったが、種火にするには十分だったし、水の原始魔法はジョウロ程度の水量だったが、水やりには十分だったし、氷の原始魔法は石ころ程度の氷を生み出す程度だったが、モノを冷やすには十分だったし、風の原始魔法はそよ風を吹かせる程度だったが、換気するには十分だったし、土の魔法はバケツ一杯分の土を操る程度だったが、上手くやれば様々な形にすることができた。

そしてなにより重要だったのは、ゴブリンたちが「雷」を操れるようになったことだった。雷の原始魔法は、しよせん乾電池程度のシヨポイものだったが、それだけで何もかも十分だった！ 十分すぎるほどに十分だった！

「カミナリ 電気 電子のちから」
「イナヅマ ビリビリ 電磁のちから」

電気は色んなモノ動かせる 磁力は色んなモノ働かせる

ビリビリ バリバリ 稼働させる 起動律動天動させる

雷の力 最初の力 火を生み 土を生み 氷を生む

雷の魔法 最初の魔法 水を生み 風を生み また雷を生む！

全ての起源だ電磁力！」

電力というエネルギーを得たゴブリンたちは、「六属創生論」に則り様々なモノに雷を変換させた。火や水や風は言うに及ばず、熱に光に音に運動に。そうゴブリンたちは電気エネルギーを運動エネルギーや熱エネルギーに変換する術を知ったのだ。

「シユココオ……シユココオ……」

我らに出来ぬ お仕事は 電気にさせるとイイんだゴブ

ゴブらに運べぬ お荷物は カレらにさせるとイイんだゴブ

色々できて 力強い いっぱいできて 心強い そんなカラクリ

便利な機工

その名もこの名も「機械」だゴブ」

ゴブリンたちはアルデニクスの演説に歓声をあげた。おおスゲーな「電気」って！ めっちゃスゲーな「機械」って！ そうなりや作ろう便利な「カラクリ」 創ってみせよう利便な「機工」！

とはいえ最初は極簡単な機械しか、ゴブリンたちは作れなかった。アルデニクスには知識と知恵があり、ゴブリンたちには知性があったが、圧倒的に「技術」と「経験」が足らなかったのだ。「原始魔法」の応用にも限界があった。どんなに利便性が高くても、しよせん「奇跡」でない「現象」など、神様の力には及ばないということだ。

だが、やがてゴブリンたちの文化が発展し、芸術や美術が開いて技術と経験を身につけると、話は変わってくる。身につけた「技術」で「魔法」を再現し、より強く大きくし始めたのだ。

マッチの火は鉄をも熔かす炎となり、ジヨウロの水は太湖のごとき膨水となり、小さな氷は巨大な氷塊となり、そよ風は突風となり、操る土は山となり、乾電池は発電所になった。

魔法でダメなら技術で、技術でダメなら魔法で、どっちもダメなら二つを合わせて、ゴブリンたちがゴブリンたちの問題を解決していく。より楽に、より便利に、より楽しく、より面白く……飽くなき探究心は留まることを知らず、発展もまた止まることを知らなかった。

全てはアルデニクスの理想の為に。全てはリトルシヤイアの発展の為に。全てはゴブリンの繁栄の為に。全ては理想郷実現の為に！

禁忌も禁断もなんのその、ゴブリンたちの探究は、今日明日も終わらない。

*

*

辺境の街のさらに辺境の辺境にある「へんぴな農村」は、このところ平和な日々をすごしていた。驚くべきことに、ここ数年ゴブリンの襲撃が全くなかったのだ！

こんなことは、老人村長が子供村人だった時からありはしなかつ

た。「冒険者」という職業が人気となり、若い連中がみんな村を出て行ってしまった、過疎化が激しい「へんぴな農村」にとって、これは吉報以外の何物でもなかった。

しかし、幸せの日々とは長くは続かないものである。へんぴな農村ではゴブリンに代わって新たな問題が浮上してきていたのだ。

昼夜を問わず鳴り響く爆発音や炸裂音、モクモクと立ち昇る煙、ゴンゴンガンガン叩く音、木々がなぎ倒される騒音、グオオオオンといった何らかの作業音……そして時折姿を見かけるようになった、奇つ怪な姿をした「小人」。

「小人」——そう形容する他ない奇妙なイキモノだった。「レーア」や「ドワーフ」などではない。気味の悪いマスクを被り、全身を防護服で身を包んだ、見たこともない生物だった。『カレら』がああ騒がしい音の原因であることに、疑いの余地はない。

正体不明な『ナニか』の出現に、農村は困惑する。血気盛んな農夫は「あんな連中オレたちで追っ払っちゃおう！」と主張した。幾人かの農夫もそれに追従する。彼らの意見には一理あったが、『アレ』がなんなのか分からぬ以上、下手に刺激するのも憚られた。

農村には腕に覚えのある者が少なかったし、なにより『アレ』は奇妙で不気味で気色悪かったが、農村に直接危害を加えたことはなかったのだ。ただ時折じつとこちらを見ているだけ……まるでこちらを「観察」しているかのよう。

村人だけで解決できないとくれば、残る手段は一つしかない。夢と理想と野心に塗れた無法者——「冒険者」——に、調査を依頼するしかない。森から響くあの「騒がしい音」はなんなのか、森に棲み着いた『アレ』はなんなのか、老人村長は村人を代表して「冒険者ギルド」へと赴いた。

「——そんなわけで、冒険者さんに調査を依頼したいんじゃないか……」
「ハイ、近隣の森への調査依頼ですね。報酬はいかほどでしょうか？」
鋼鉄とも言える営業スマイルを浮かべ、淡々と受付嬢は言った。

老人村長は、村中からかき集めたなけなしの硬貨を、冒険者ギルドの受付嬢に差し出す。

「2の4の8の10の……ハイ、調査依頼としては問題ありません。むしろ多いくらいですね」

「最近、ゴブリンの襲撃が無くてのう。おかげで多少の蓄えはあるのじゃ」

「それはそれは、喜ばしいことじゃないですか。となると、ゴ布林関係の依頼ではないのですね」

完全仕事モードだった受付嬢が、僅かに興味を抱いた様子を見せる。チラリと目配せし、老人村長を見た。

「ウチの村では、この何年かゴ布林はチラリとも見ておらん」

それは珍しいこともあるものだ、受付嬢は内心想った。

提出された書類を覗き見る。書いてある依頼内容は、ゴ布林ではなく「騒音」と「小人」の調査依頼だった。確かに、よくあるゴ布林退治の依頼ではない。

ゴ布林は最下級の怪物で、子供程度の知力と腕力しかないが、そのぶん数が多く、大抵の農村では常にゴ布林被害に悩まされていた。数週間や数ヶ月なら有り得ないこともないが、年単位で被害が無いことは、全くと言っていいほど例が無い。

もしかすると、「彼」が頑張っているおかげかしら——そんなことを受付嬢は考えた。自然と頬が緩み、僅かに赤く染まる。「彼」のことを思うと何時もこうだ。ゴ布林ばかりを狙う、あの「冒険者」のことを……。

「……つと、失礼しました。書類の方も不備はないようですね。近日中には必ず冒険者さんが調査に向かいますので、暫くお待ち下さい」
受付嬢は「必ず」の部分を強調して、そう言った。これは依頼主に安心感を与えるための手段だ。受付嬢の間では、そうやって話を締めくくることが常套句だった。

不安そうな面持ちで冒険者ギルドを出る老人村長を見送ると、受付嬢はもう一度手元の依頼書を見た。

近隣の森への調査依頼。それ自体はよくある依頼であったが、その内容に「騒音」と「小人」とあったのが気になった。レーアやドワーフの類ではないらしい。新種の怪物か、或いは全く別の「ナニか」か

……。

受付嬢目線で見ても、コレはあまり魅力的な依頼だとは言えなかった。「ドラゴン退治」といった冒険心をくすぐるような内容じゃなければ、「遺跡探索」のような一攫千金が望める依頼でもない。報酬は確かに割高だが、現地への移動距離を考えると、それも相殺される。

辺境の街のさらに辺境の辺境にあるへんぴな農村は、その名のおり恐ろしく遠いのだ。おそらく引き受けるのは、報酬や冒険よりも「信頼」が欲しい、駆け出しの冒険者になるだろう。

「はあー」

受付嬢はそうため息をつくとき、カウンターに頭を伏した。

そんな実利をきちんと考えられる「駆け出し冒険者」が、この街にいるだろうか？ 受付嬢の経験からすれば、それはあまり多いとは言えなかった。むしろ皆無と言っている。採算度外視で受けてくれる冒険者もいるにはいるが、「彼」はゴブリン以外には興味がないし、ゴブリンじゃないなら見向きもしてくれないだろう。

「信頼」を得るための依頼なら、他に適したものがいくらでもある。ならばこの依頼を受けるのは、暇を持て余した道楽者か、超弩級の愚か者以外にない。そんな冒険者が赴くであろう老人村長のことを思うと、受付嬢は不憫でならなかった。

「どうして、ゴブリンじゃないんだらう……」

不謹慎にもそう呟いてしまうほど、受付嬢は気落ちしていた。幸いにも切羽詰まった状況じゃなさそうなのが、唯一の救いか。それでも、依頼達成には暫く時間が掛かるだろう。相当「暫くの」時間が……。

結局、張り出された老人村長の依頼は、受付嬢が思っていたとおり徐々に掲示板の隅に追いやられ、長い間引き受ける者は現れなかった。

その間にも、着実にゴブリンたちが発展しているのを、誰も知らぬまま……。

「それじゃあ……調査対象について、詳しく教えて貰えるかしら？」

肩まで伸びた赤い髪、すらりとしなやかな肢体、ドカッと椅子に座り、目を細めニヤリと口を歪ませながら、懽然とした態度で女剣士は言った。

それは冒険者らしい、自信に満ち溢れた物言いだった。ともすれば、自惚れとも取られかねない態度。しかし、これは自惚れなどではなかった。それは、彼女が持つ「青玉」の認識票が物語っている。

「女剣士ちゃん……そういう言い方は、慎まないと……」

そんな女剣士のことを、後方に控えていた女治癒士がやんわりと嗜める。

女治癒士は女剣士と違い、その場に立って、身の丈に迫るほどの木杖を持っていた。白を基調としたローブを着て、髪はブロンド、瞳は青の、典型的な治癒術者だった。

「はっ、別にいいじゃない！ わざわざ「青玉級」である『この私』が、遠路はるばるこんな辺境も辺境のへんぴな寒村に出向いてやってるのよ？ 感謝されることはあれど、咎められる云われはないわ。むしろなぜ村を挙げて歓迎しないのか、不思議なくらいね」

永らくやり手のいなかった「へんぴな農村の調査依頼」は、巡り巡ってこんな彼女たちが請け負うことになっていた。冒険者になって以来、破竹の勢いで「青玉級」になった女剣士と、彼女と一党を組む「鋼鉄級」の女治癒士。彼女たちがこの依頼を受けたのは、なんてことない、ただの「点数稼ぎ」のためだった。

冒険者には全部で十段階の等級があり、上から「白金」「金」「銀」「銅」「紅玉」「翠玉」「青玉」「鋼鉄」「黒曜」「白磁」がある。全ての冒険者は「白磁」から始まり、数々の冒険や依頼をこなすことで信頼と実績を得て、さらなる等級へと昇進するのだ。

より上の等級に昇進するには「冒険者ギルド」の承認が必要であり、それを通過するためには「経験点」と呼ばれるものを稼がなければならない。

経験点は「社会への貢献度」「獲得した報酬総額」「面談による人格査定」によつて決まり、今回彼女たちは、その「経験点」稼ぎのためこの任務を請け負ったというわけだ。誰もやり手のいない「余り物」は、実入りは少ないにしろ、経験点は高くなる傾向にある。

女剣士の等級は「青玉」。冒険者になつてまだ数ヶ月程度の「新米」にしては、恐るべき昇進速度だが、彼女はこれっぽっちも満足していなかった。

私はいずれ「英雄」になつて、史上十人といない「白金級」になるのよ！ 女剣士はそう考えるに足る実績を残していたし、そう信じるに足る実力も兼ね揃えていた。

「それでも依頼はちゃんと真摯にやらないと……」

「ええ、だからこうして私自ら話を聞こうつて言つてるんじゃない。それともなに？ この私に「頭を垂れてお願いしろ」とでも言いたいのかしら？ 貴方は」

「そ、そんなわけじゃないけど……あの……その……」

それ以上は言葉が出ず、言い淀んでしまう女治癒士。彼女たちの会話は、いつもこんな調子だった。

「はあ……貴方つていつもそうよね。私の後ろをうろちよろして、オドオドウジウジ。なのに、こういう時だけはいつちよ前に口出ししてきて。アンタなんて、私がいなけりや何も出来ない癖にッ！」
「ひうッ！」

女剣士の剣幕に、涙目でビクつく女治癒士。

女治癒士と女剣士は、同時期に冒険者になつた言わば「同期」というもので、それ故に「駆け出し」の頃は、よく「即席パーティー」を組むことが多かった。

前衛タイプの女剣士と後衛タイプの女治癒士では、戦術的な相性が良いこともあり、やがて彼女たちは自然と「固定パーティー」を組むことになる。引つ込み思案だけど慎重派な女治癒士と、向こう見ずだけど積極的な女剣士では、性格的にも相性が良かったと言えるだろう。

だがそれも、お互いが「対等」であつた場合の話だ。

数か月とは言え、長くパーティーを組んでいると、嫌でも色々目についてくる。些細なことで口論になり、次第に溝は深まっていつて……両者の実力が拮抗していれば、危ういながらもバランスが取れていたかも知れないが、彼女たちの場合、僅かだが女剣士の方が上回っていた。

その僅かな違いは、徐々にだが確実な「差」となり、現実的な「評価」としても浮き彫りになっていく。「青玉」と「鋼鉄」——この僅かだが明確な「差」は、彼女たちの関係性を崩壊させるのに十分だった。女剣士が「青玉級」になり、女治癒士が「青玉級」になれなかったその日から、彼女はまるで「主」のように振る舞うようになり、彼女はまるで「奴隷」のように扱われるようになったのだ。

女剣士は俯く女治癒士を睨みつけると、プイッと向き直り老人村長に言った。

「もう、こんなヤツ放つといて、話を進めましょう？　イヤだと言うなら私はもう帰るわ」

そう言われてしまつては、老人村長も何も言えない。老人村長は、いまだ俯いたままの女治癒士のことを一瞥し、ややあつてから話を始めた。

「依頼書にも書いたと思うが、ワシらの依頼は「近隣の森」の調査依頼じゃ。ここ数年ゴブリンどもに代わり、森に「奇妙な生物」が棲み着いたらしく、そいつらが森で何をやっているのか、調査して欲しいのじゃ」

「ふうん、「奇妙な生物」ね……ソイツらは、どんな見た目なのかしら？」

「それに関しては、『コレ』を見て欲しい」

あらかじめ用意してあったのだろう。老人村長は待つてましたとばかりにそう言うと、女剣士に一枚の羊皮紙を手渡した。

そこには、気味の悪いマスクを被り、全身に防護服を着て、大きな荷物を背負った謎の生物のスケッチが描かれていた。身長は只人の子供くらいだろうか？　見方に拠れば、ドワーフやレーアにも見えなくもないが、こんな不気味な衣装を着る風習は、彼らにはない。

「コレが、その「奇妙な生物」ということ？」

「そうじゃ」

老人村長が短く肯定する。

「見たところ、あまり危険はなさそうですが……」

俯いていた女治癒士も、羊皮紙を覗き込みそう感想を述べた。

「そう、そうなのじゃ。ヤツらは奇妙な見た目をして不気味じゃが、幸いというかなんというか、今のところ具体的な実害は出ていないじゃが……」

「不気味なことには変わりないし、気味が悪いことには変わりないということね。まあ、よくある話だわ」

「それに「騒音」の件も、ということですよね？」

「うむ、ヤツらを見かけるようになってから暫くして、森の方で色々な騒音が響くようになってのう。最初は木々を伐採するような音だけだったのじゃが、次第に爆発音や、ワシらが聞いたこともない轟音も鳴るようになり、それが昼夜を問わず続くもんだから、みな不安が募るばかりだったのじゃ……」

なるほど、と女剣士が興味深げに笑みを浮かべ、女治癒士は心配そうな顔色を浮かべた。

老人村長は一呼吸置くと、そこから「じゃが——」と話を続ける。

「このところ、そんな「騒音」も鳴りを潜めがちでな。鳴ったとしても大分音量が抑えておるし、日が落ちてからは、滅多に鳴らなくなったのじゃ。今では定期的に鳴る「騒音」に合わせて、ワシらも生活をする始末でのう」

ちょうどその時、遠くの方から「ドーン」という爆発音が三回轟いた。「これはタイミングの良いこともあるもんじゃ」と呟きながら、老人村長は冒険者たちに目配せする。

「今のは「昼食の爆発音」じゃ。まあ、ワシらがそう勝手に呼んでるだけじゃが、いつの頃からか正午になると、必ずこの爆発音が鳴るようになってのう……そんなわけじゃから、話の続きは昼食をすませてからにしようか」

そう言つて老人村長は振り返ると「ばあさんや、そろそろ昼飯にし

「ようや！」と叫んだ。「はいはい」という声が、家の奥の方から返ってくる。

異常も慣れれば日常になる、ということなのだろう。異常が日常と化してしまった「へんびな農村」の村人たちは、異常を異常のまま受け入れるようになったのだ。森の様子は確かに異常だが、問題がなければ問題はないのだろう。

そんな様子を見せる老人村長に、呆気を取られる冒険者たち。

「……なんか、思っていたのと違うわね」

思わず女剣士は、そう女治癒士に耳打ちしてしまった。正直言つて拍子抜けである。

運が良ければ、知性に目覚めた怪物なんかが、コソコソと良からぬことを企んでいて、それを未然に防いだ「英雄」になれるかと思っていたが、この様子じゃそんなこともなさそうだ。

この「調査依頼」は、額面通りの見返りしかなさそうだし、額面通りの結果しか生み出さないだろう。女剣士からは、気落ちした様子がアリアリと見て取れた。

「いずれにせよ、何事もなさそうで良かったですね」

心底安心した様子で言う女治癒士。

「どこがよ。この分じゃ、碌な「経験点」は稼げないわ。無駄足だったかもね」

どうせならゴブリンにでも襲われてればよかったのに——女剣士がそう呟いたのを、女治癒士は聞き逃さなかった。それにほんの少しだけ、ほんの少しだけだけど、女治癒士も同意してしまったのは、仕方のないことだったのだろう。

他人の不幸は蜜の味とも言うが、冒険者にとって「他人の不幸」は仕事の種だ。平穏で平和そうな村の依頼主より、切羽詰まった村の依頼主の方が、「美味しい」のは間違いない。

女治癒士にとっても、一刻も早く「経験点」を稼いで、彼女と「対等」になる必要があった。だから、ちよつとでもそう思ってしまったのは、致し方なかったのだ。

ゴブリンだったら良かったのに……そう思ってしまったのが、彼女

たちの運命の分水嶺だったのかもしれない。

*

*

「後はもうアンタに任せるわ」

昼食をすませ、老人村長家の客室に案内された女剣士は、装備も外さず用意されていたベッドにボフッと寝そべると、そう吐き捨てるように言い放った。

「……えっ?」

「えっ? じゃないわよ、えっ、じゃ。この程度の「調査」だったら、アンタ一人でも十分でしょう? それにしても、ああもうこのベッド! カビ臭い上にクッションも固くて、最悪なんだけど! しかも部屋に一つしかないし。アンタは今日、床で寝てよね!」

へんぴな農村には、そりやもうへんぴなどこにあるので、当然ながら旅人用の宿舎などはない。なので、女剣士たちは老人村長家に泊まることになっており、食事に関しても村長家の厄介になっていた。もちろん費用は全額老人村長もちである。

「で、でも私一人じゃ……」

寝転がって装備を外し始めた女剣士に向かって、女治療士がおずおずと言う。

「でもって……アンタ、腐っても「鋼鉄級」でしょう? たとえ私の腰巾着だとしても、等級に見合った働きくらいしなさいよ。こんな依頼、アンタ程度でも屁でもないでしょうが」

たまには「一人」で何かを成し遂げてみなさいよ——視線を合わせず、女剣士はそう最後に付け足した。「二人」という部分を強調して。もしかするとこれは、女剣士なりの優しさだったかのものかもしれない。要するに女剣士は、言外に「今回はアンタに譲る」と言いたかったのだ。

パーティー

一党を組むのは一定のメリットがあるものの、報酬や経験点が分散されるという意味では、デメリットでもある。その分、高難度の依頼を受けていけばいいだけの話だが、今回の場合はそれは当てはまら

ない。

二人で分け合うには割に合わない仕事かもしれないが、単独なら少しはマシになるだろう。彼女と彼女の「差」は、それだけでは埋められないだろうが、これを期に自信も身に着けてくれば、遅かれ早かれ女治癒士も「青玉級」になれるはずだ。

そうすれば、二人はかつての「関係」に戻れるかも……そういった思惑が、女剣士にはあったのかもしれない。

装備を全て外し終えた女剣士はそのまま寝転がると、女治癒士に背を向けるようにして横になった。彼女の背中から何を感じ取ったのか、木杖をギュツと握りしめ、意を決した瞳を宿し、女治癒士は言った。

「わ、わかった、よ……私一人で行ってくるから……」

女剣士は何も言わず、背を向けたまま手を振った。さっさと行つてこい、ということだろう。

「それじゃあ、行ってくるね」

女剣士からの返答は、終ぞなかった。

*

*

ゴブリン族の少女「ランドロクス」は、今日もとてとてお気に入りのお花畑で、お花の世話をしていた。

「チコオ……チコオ……」

大きなあれ 大きなあれ

キレイに 立派に 大きなあれ〜」

このお花畑は、ランドロクスの秘密のお花畑だ。森の中でも特に日当たりがよく、様々なお花が咲き乱れるこの花園は、彼女の宝物でもあった。

今日も彼女はゴブゴブ言いながら、自前の「水魔法」を駆使してお花に水をあげる。

お散歩中にたまたま見つけたこの花園は、最初は残念な感じだったけれど、ランドロクスの手入れもあって、今じゃ結構ステキなお花畑

になっていた。これなら、かの有名なボタルノスク農園にも、引けを取らないだろう。

ランドロクスはお水をやり終わると、日向ぼっこを始めた。これは彼女の大切な日課だった。

ポカポカ陽気の下にしていると、昨日あつたイヤなことがどうでも良くなってくる。別に昨日も一昨日もそのまた前の日も、イヤなことは無かったけど、無いなら無いで幸せな気分になれるので、ランドロクスはいつもそうしていた。

「チコオ……チコオ……」

パピイとマミイ「それじゃあツリードナロクスみたいになっちゃおうゴブ」って言うけれど

わたちはそれでも イイんだゴブゝ わたちはそれでも構わないんだゴブゝ

木陰が好きなことで有名なツリードナロクスは、事あるごとに木陰で休むぐうたらゴブリンだったが、それ故に効率的な仕事法を考案していたりして、ランドロクスの憧れでもあった。あんな風にいつものほほんと生きていきたいと、ランドロクスは思うのであった。

お花畑では小鳥がピーチク、蜜蜂がブンブン、兎がピョンピョン、ゴブリンがゴブゴブ、全くもって平和な感じ。そんな「ランドロクスのお花畑」に、招かれざる侵入者がやって来る！ それはまさかまさかの「女治癒士」だった！

「うう、どうしよう……迷っちゃったよお……どこどこお？」

半泣き状態でお花畑に侵入してきた女治癒士が、そんなことを呟いた。緊張感の欠片も無いヘタレな発言だったが、誰も聞いちやいないので何も問題はない。

森の中へと調査に来ていた女治癒士は、生来のドジっ子属性を發揮したのか、ガッツリ道に迷っていた。

生い茂る原生林は進むほど奥深くなり、女治癒士の方向感覚を狂わせ、時間感覚も奪っていた。女治癒士の拙い搜索スキルでは、遭難するのは当然の帰結だったのだ。なんでそんなレベルなのに「単独」で探索に出たのか……なんやかんや言って彼女も「冒険者」だったとい

うことなのだろう。

そんな最中で訪れたランドロクスのお花畑。女治癒士の瞳には、より一層キレイに映っただろう。

「うわあ、なんてステキなお花畑！ 森にこんな場所があったただなんて……あつ」

「一体全体 だれゴブかく？ わたちのお花畑にやって来たの……あつ」

彼女と彼女の眼と眼が合う。方や見たこともないマスクをした謎の生物。方や見たこともない服装をした謎の人物。まさかまさかの偶発的遭遇！

女治癒士は「彼女」を指差し、そして叫んだ。

「あああああああああああああああ!!」

「ゴブウウウウウウウウウウウ!!」

女治癒士の叫び声に、ランドロクスはビックリ仰天して飛び上がった。そのまま猛ダッシュで木陰にとんずらすると、ひよこつと顔を覗かせる。

「チコオ……チコオ……」

だれだれ あなた だれなのゴブ？ あなあな あなた だれなのゴブ？

わたちは わたちは ランドロクス 一体 あなたは 何者ゴブ？

「えっ？ ウソ、喋った!? え、あつ……わ、私は女治癒士です！

えつと、あつと、その……すみません、ちよつと道に迷ってしまった……」

謎生物と偶発的遭遇をしたのに、咄嗟にそう言ってみせたあたり、女治癒士もなんだかんだで結構したたかである。

「女治癒士？ とてとて変わった名前ゴブ 道に迷った？ それはとてとて可愛そう

森はとてとて入り組んで 「地図」がないと迷っちゃう

女治癒士さん 「地図」持ってないゴブ？」

「えつと、あの、その……老人村長さんから譲り受けた「地図」はある

のですが……あまり、正確でなかったようで……」

そう言つて女治癒士は、持っていた「地図」を取り出して広げてみせた。

木陰に隠れていたランドロクスは、トテチテ慎重に女治癒士に近づいて、その「地図」を見てみる。ランドロクスが持つ「ゴルダナル地図」とは違い、ほとんど点も線も名前も記載されていない、どうしようもない「地図」だった。

「チコオ……チコオ……」

あらあら まあまあ この地図さん とてとて大事なモノ 書かれていない

リトルシャイアに ボタルノスク農園 とてとて大事なトコ 描かれていない

老人村長さん とてとて 酷いヒト……ヒト? あつ ゴブウウウツツ!」

突然奇声をあげたランドロクス。女治癒士から猛ダツシユで飛び退いて、再び木陰にチコオつと隠れた。何が起こったのか良く分からない女治癒士。えっ? なになにに、どういうことなの?」

「あ、あの……だ、大丈夫ですか? えつと……ランドロクスさん?」女治癒士の言葉に、ランドロクスはまたもひよこつと顔を覗かせて、女治癒士に問いかけた。

「チコオ……チコオ……」

あなた もしかして ひよつとして 「ニンゲン」 ゴブ?

女治癒士さん あなたつて 「ニンゲン」 ゴブ?」

ランドロクスの質問に、キョトンとして女治癒士は答えた。

「え、ええ……そうですけど、何か……」

「ヒ、ヒエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!」

女治癒士の言葉に、ランドロクスはあまりにもビツクリして腰を抜かしてしまった。

「や やっぱり ニンゲンだったゴブウウウウ!」

やめて こないで ゆるしてゴブウウ!

ゆるして こないで あっちにいつてゴブウウ!

「私たちは悪いゴブリンじゃないゴブ とてとて良い子なランドロクスゴブ！」

「オシオキはイヤイヤー！」

「あ、あのー！ 落ち着いてください！ 別に何もしませんから！ それに、さつきあなたゴブリンって!?!」

半狂乱に陥っていたランドロクスを、なだめようと近づく女治癒士。ランドロクスは腰を抜かしてしまい、逃げ出すことができない。絶体絶命のピンチが、ランドロクスを襲おうとしていた！

「えつと……その……お、落ち着いてください。私は悪い人間じゃありません」

とりあえず女治癒士は、ランドロクスに倣ってそう言ってみた。効果があつたかどうかは分からないが、ランドロクスが怯えながらも訊いてくる。

「チ、チコオ……チコオ……」

ほ 本当ゴブか？ ほんとに悪い人間じゃないゴブか？

ランドロクスのマスクを取って 食べちゃったりしないゴブか？」「そ、そんなことしませんよ！ どんな怪物ですか私!?! それよりも、さつき言ってた「ゴブリン」って、どういうことですか?！」

「?? どういうもなにも そのままの意味よゴブ」

私たちは 栄えあるゴブリン族のランドロクス

とてとて良い子で お花が好きな ランドロクス」

それが何か？ といった感じで言う自称ゴブリン族のランドロクス。

彼女の姿は女治癒士が見る限り、件の「調査対象」と非常に酷似していた。奇妙なマスクに全身防護服、背中に大きな荷物を背負った情報どおりの見た目。マスクの色はピンクだったが、それ以外は完全に一致している。

ランドロクスには申し訳ないけど、何処からどう見ても、あの醜悪な小鬼には見えない。

「でも、私知ってるゴブリンは、あなたみたいのじゃ……」

女治癒士の疑問に、ランドロクスが答えた。

「チコオ……チコオ……」

あなたが言ってるゴ布林 それはきつと 原始ゴ布林のこと

原始ゴ布林 とてとて野蛮で 怖いゴブ

わたちたち文化ゴ布林 マスクを被って 良い子になった

違いはそれだけ それ以外はない」

ランドロクスの言っていることは、女治癒士の理解を超えていた。どう考えても「アレ」と「コレ」が同じ生物だとは思えない。じゃあ何でわざわざ「ゴ布林」なんて名乗ってるのか。それもまた、女治癒士の理解を超えていた。つまりよく分からん！ ということだ。

なので、とりあえず女治癒士は、ランドロクスのことを、「ゴ布林」だと思いついでる可愛そうな謎生物ということ、認識しておいた。

「じゃあ、あなたが最近森に棲み着いた……えつと「ゴ布林(仮)」さん？」

ランドロクスのことをどう形容していいか分からなかった女治癒士は、とりあえずそう呼んでみた。推定ゴ布林族。いったいどんな悪夢か。もし本当にゴ布林族なら、女治癒士の貞操は絶賛大ピンチ中である。

「チコオ……チコオ……」

あなたじゃなくて あなたたちゴブ

森に住むゴ布林族 とてとていっぱいいるゴブ

パイイに マミイに お兄ちゃんに お姉ちゃん 弟 妹 アル

デニクス

とてとていっぱい 住んでるゴブ！」

「みんな、あなたみたいな格好をしているの？」

女治癒士は、ランドロクスそっくりなゴ布林たちが何十人もいるところを、想像してみた。ワイワイ、ゴブゴブ、シユコオシユコオ。なんだかとっても和やかになった。世界中のゴ布林が、彼女みたいになればいいのに……。

ランドロクスは女治癒士の質問に答える。

「モチのろんゴブ！」

とてとてイカしたマスクに とてとて便利な防護服 荷物を背負えば立派なゴブリン

それさえあれば わたちもあなたも立派なゴブリン族

これらが無いと あなたもわたちも栄えあるゴブリン 名乗れない」

へーそうなんですネー私もゴブリン族になれるんですネーってそんな馬鹿な!? そう心の中で、女治癒士はツッコんだ。

女治癒士は自分の中にある「常識」というものが、ガラガラと音を立てて崩れ去る音を聞いた気がした。それにしてもこの女治癒士、相手がゴブリン族だというに、結構物怖じしない性格である。

ここでコホンと咳を一つ。気を取り直した女治癒士は、ここぞとばかりにランドロクスに問いかけた。

「で、では、ときおり鳴り響くという爆発音は？」

「もちろん そちろん わたちたちの爆発だゴブ〜

わたちたちゴブリン族 爆発爆弾大好きゴブ〜

遠くでお仕事しているお仲間のためにも 毎日決まった時間に爆発させてるゴブ〜」

なるほどなるほどそうだったのですね〜。謎の生物と騒音の正体を解明し、見事任務達成した女治癒士は、とつてもご満悦な様子。相手が相手なら、口では言えない酷いことをされてたかもしれないのに、出会ったのが善良なゴブリンで、本当に良かったね。

調子に乗った女治癒士は、さらにランドロクスに質問してみた。自称ゴブリン相手だったが、まあ危険はなさそうだし、気にしなくていいでしょう。

「さつきかなり驚いてましたけど、人間は見たことはいんですか？」

「チコオ……チコオ……」

ううん そんなことはないゴブよ ときどきこっそり見たことあるある

でもでも ゴブリン族の「法」で決まってるの

“ヒトとあまり関わってはいけません” 守らないとてとて恐ろしいオシオキが……あつ」

ランドロクスは女治癒士を見て、それから辺りを見てもう一回女治癒士を見ると、もう一度「アッー！」っと叫んだ。

「しまった こまった やっちゃった！」

とてとて「ヒト」と関わっちゃったゴブ！ がつつり「ヒト」と関わっちゃったゴブ！」

ランドロクスは頭を抱えてすごく残念がった。このままではリトルシャイア随一の良い子、ランドロクスの揺るぎなき地位が揺らいでしまう！ かくなる上はこのゴブリ爆弾で自爆して……。

「ちよちよちよッ！ 何しようとしてるんですか!? 止めてください！」

どこからともなく明らかに不穏なモノを取り出して、明らかに不穏な行為をしだしたランドロクスを、慌てて羽交い締めにする女治癒士。

「イヤイヤ ヤメて お願いゴブ！ 後生だから 見逃してゴブッ！」

「いえいえ、流石に見過ごせませんよ！ どう見てもそれ爆弾じゃないですか！ 危ないですからどっかに仕舞ってください！」

ワーワー、キヤーキヤー、ゴブゴブ、チコオチコオ——こんな感じでゴルダナル大森林にある秘密の花園では、ゴ布林族と只人の少女たちの、初めての邂逅が果たされたのだった。

*

*

ゴルダナル大森林で、運命的な出会いを果たした女治癒士とランドロクスは、その後それなりに仲良くなっていた。

どうしてマスクを被っているの？ とてとてカッコいいし、カワイイから。

取っちゃいけないんですか？ 絶対ダメダメ！ ダメダメよ！

今は、そろそろ日も暮れて来たので、女治癒士を「へんぴな農村」へ送り帰しているところである。冒険者なのに迷子になるだなんて、どうしようもないヒトだゴブっと、ランドロクスは思っていた。

「でも、大丈夫なんですか？ その……ヒトと関わっちゃいけないかったんじや？」

「チコオ……チコオ……」

確かに 確かに そうなんだけど 関わっちゃものはどうしようもないゴブ

それにお姉ちゃん いいヒトだから きつと問題ないんだゴブ」

それに、「あんまり」としか言われてないし——ランドロクスは能天気にもそう思っていた。いわゆるバレなきヤセーフの精神である。

「ハイ ここまで来れば もう平気ゴブ

今日はとてとて楽しかったゴブ〜 ヒトとお話するのは初めてだったゴブ〜」

お日様が真っ赤になって完全に沈み込む前に、女治癒士とランドロクスは、村外れの小道に辿り着いていた。これ以上先に立ち入ることは、ランドロクスには許されていない。

「今日は本当にお世話になりました。まさかあなたみたいなゴブリンに出会うなんて、思ってもみなかったです」

「わたちもお姉ちゃんみたいなヒトに 会えるとは思ってなかったゴブ〜」

お互い一緒に ハッピーゴブ〜」

「ふふふ、そうですね、一緒にですね」

その時、森の奥の遠くの方から、ドーンドーンという爆発音が鳴り響く。ランドロクス曰く、日没の爆発らしい。仕事終わりの合図でもあるようだ。そして、ランドロクスが帰る時間でもある。

「それじゃあ私はこれで……」

「うん お姉ちゃん ばいばいゴブ〜」

そう言っつて森へと帰っていくランドロクスを、女治癒士は姿が見えなくなるまで見送った。途中、ランドロクスが何度も振り返ったので、見送るには結構な時間が掛かった。

それから女治癒士は老人村長の家に帰ると、挨拶もそこそこに部屋に戻り、今日あったことを女剣士に報告した。たとえ無法者の冒険者でも、報連相は大事なのである。

「あのね、あのね、聞いて女剣士ちゃん。今日森の中で出会った子がね——」

「そうして女治癒士は、今日あったことを洗いざらい全て女剣士に話した。女治癒士の報告を最後まで聞いた女剣士が、口元を歪ませて言う。

「そう、喋るゴブリン族ね……」

その言葉の真意がなんなのかを、女治癒士はまだ知る由もなかった。

四方世界の人々にとって、ゴブリンとは害虫以下の忌まわしき存在だ。ましてや女性にとつては、存在すら許し難い害悪そのもので、女剣士にしてみれば、なぜ国を挙げて駆除しないのか不思議なくらいだった。

ゴブリンなんてものは滅ぼされて当然のモノであり、絶滅して然るべき存在だ。殺して喜ばれることはあれど、悲しまれることなんてない……きつと、多くの人々が、女剣士の意見に賛同するだろう。

「だからこれは、正しいことなのよ女治癒士」

女治癒士が調査から帰り、眠りに就く頃になってから、女剣士は彼女にこう囁いた。『私たちの手で、そのゴブリンたちを討伐してしまいましょう』、と。

最初、女治癒士は女剣士が何を言ってるのか、分からなかった。あの善良なゴブリンを、どうする気だって？

「なんで、そんな、どうして?!」

女治癒士の問いに、女剣士は「ああもう!」っと頭を掻きむしって答えた。

「なんでって、当然でしょう? 相手がゴブリンなら、殺して当然じゃない。だってゴブリンなのよ? むしろ放置する方が問題だわ。私たちの信用にも関わるし、冒険者としての沽券にも関わる」

「で、でも……あの子たちは、何も悪いことはしてない……」

「そんなものは関係ないわ。ゴブリンは存在するだけで悪なのよ。それに、喋れるほど知恵をつけたなら、一刻を争う事態だわ。アンタだって、冒険者の端くれなら分かるでしょう?」

怪物の中でも最底辺に存在するゴブリンでも、人語を解するほどに成長したならば、厄介極まりない存在になるのは、馬鹿でも分かることだ。見つけ次第、即処分してしまうのが、冒険者としての責務である。

「でも……あの子は……ランドロクスさんは、そんな風には見えなかった……」

「そういう風に見えるように、擬態していただいだけかもね。そこまでの知恵を付けていたなら、有り得る話だわ」

「そ、それは……」

そこまで思い至らなかったのだろう。女剣士の言葉に、女治癒士は一瞬言葉に詰まってしまふ。それでも女治癒士は懸命に弁明を探した。女剣士には、なぜこんなにもゴブリンの肩を持つのか不思議でならなかった。

「も、もしかしたら、ホントはゴブリンじゃないかもしれないし……」
やつとの思いで捻り出したのは、そんな言葉だった。

女治癒士が出会ったランドロクスは、自称ゴブリンを名乗っていたが、女治癒士がよく知るゴブリンとは全然違っていた。精々背丈が同じくらいだというだけで、全く別の種族である可能性は高い。

「たとえそうだとしても、ゴブリンを名乗っている以上、ゴブリンとして扱うのが適当だわ」

間髪入れず女剣士は言う。

もし違つたとしても、それはゴブリンを名乗つたヤツが悪いのであつて、私たちには関係ない話よ。ランドロクスとかいう自称ゴブリン族の自業自得だわ。女剣士がそう説き伏せる。

「でも……でも……」

それでも、女治癒士には到底納得できることではなかった。理屈では女剣士が言っていることは理解できたが、気持ちの面で納得することができなかつたのだ。

そんな様子の女治癒士に、女剣士は「はあ」つとため息をつく。

「……あのね、道に迷つてその自称ゴブリンに助けられたから、そんなに同情してんでしょうが、相手は怪物で、私たちは冒険者なのよ？
たとえば言葉が通じるからつて、分かり合えるはずないじゃない。喋れるからつて、馬鹿みたいに絆されてんじやないわよ。いい加減、その甘つたれた考え捨てなさいな」

女剣士の言葉は鋭かったが、核心を突いていた。女治癒士は冒険者で、ランドロクスはゴブリンだ。どんなに意気投合したとしても、その事実が変わらず、その道が交わることはない。

そう、これは一種の気の迷いだっただの。

「そう思うことにしなさい。アンタは知恵の回るゴブリンに騙されて、絆された。きつとそれがヤツらの生存戦略だったのよ。それに私に気が付いて、私たちが鉄槌を下す。いつもと同じ、シンプルな話よ。お分かり？」

震えながら涙を流し、女治癒士は頷いた。元々、女剣士が「そう」と決めたなら、選択肢は「それ」しかないのだ。

素直に頷いた女治癒士の頭を、女剣士は優しく撫でる。

「そう、良い子ね……安心しなさい。明日、アンタは「その場所」に案内するだけで良いわ。後の始末は私がつけてあげるから……」

女剣士の言葉に、女治癒士は優しさを感じていた。嫌なこと、辛いこと、いつもこうして彼女が代わりにやってくれる。どんなにキツイことを言われても、そんな優しさがあるから、女治癒士はいつも女剣士の後ろをトコトコとついて回っていたのだ。

女剣士の胸で泣く女治癒士には、今、彼女がどんな顔をしているのかわ見えていなかった。

*

*

翌朝——ゴブリン族の少女「ランドロクス」は、昨日も今日もとてとてお気に入りのお花畑で、お花の世話をしていた。

「チコオ……チコオ……」

大きなあれ 大きなあれ

キレイに 立派に 大きなあれ〜 フンフ〜ン

昨日はこのお花畑で、とてとてイイことがあったので、ランドロクスは上機嫌。今日は気分がノツたので、ちよつと多めにお水をやりちやっただけ、たまにはいいでしょ、ご愛嬌。

「前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪」

前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪」

大人たちが唄う「仕事唄」を歌っていれば、あつという間に水やりは終わった。そうなりや、これから日向ぼっこである。ランドロクスはお花畑の中央でチコオっと座ると、日課である日向ぼっこを始めた。

昨日はこうして日向ぼっこをしていると、なんとという偶然でしょう。女治癒士というお姉ちゃんと、出会うことができた。今日もイイことあるといいなっと思っていると、偶然か必然か、女治癒士がまたやって来た。

「あつ 昨日のお姉ちゃん またまた来たのね こんにちはゴブ〜」
「……ええ、その……こんにちはは、ランドロクスさん」

こんななにい天気だというのに、なんだか女治癒士は浮かない様子。俯き加減で顔色も悪い。一体何があったのでしょうか。また道に迷っちゃったのかな？

「チコオ……チコオ……」

どうしたの こうしたの？ なんだか とてとて気分が悪そう

それに 後ろの「ヒト」のお姉ちゃん ダレダレ 一体だれなのゴブ？」

ランドロクスの問いに女治癒士は答えなかった。代わりに女剣士が口を開く。

「へえー、アンタが言ってたとおり、ホントに喋ってるじゃない。ぶっちゃけ半信半疑だったけど、マジだったのね」

女剣士はランドロクスに近づくと、持っていた剣でランドロクスのあちこちを突いてみせた。

「イタ アイタ アイタタ〜」

やめて よして つつかないで〜 わたちは悪いゴ布林じゃないゴブ〜」

「あら、ホントに「ゴ布林」って言うのね。流石に嘘だと思ってたけど……ねえアンタ、念のために訊くけど、ホントに「ゴ布林」なの？」

「もちろん そちろん そうだゴブ〜」

あたちは ゴルダナル大森林の文化ゴ布林〜 とてとて 良い

子で——」

「ああ、ならもうそれはいいわ」

言うか速いか、女剣士は持っていた剣でランドロクスを切り裂いた。

「……ゴ、ブっ?」

何が起きたのか理解できなかったのか、ランドロクスがそう言葉を漏らす。女治癒士が口を抑え息を呑む。ランドロクスがゆっくりと倒れ込んでいった。

「チ、コオ……チ、コオ……」

な　なんで?　どう　して?」

「チッ!　浅かったか!」

完璧に決まったと思っていた女剣士の斬撃は、しかしランドロクスの防護服によって威力が激減されていた。即死は言うに及ばず、致命傷にすら至っていない。

「思っていたより頑丈なのね」

それでも、女剣士が圧倒的に優位なのは変わりないことだ。目の前のゴブリンは、地を這う芋虫のように女剣士の魔の手から逃れようとしている。無駄なことを……女剣士は唇を歪に開いてそう思った。

「チ、コオ……チ、コオ……」

やめて……こないで……イジメないで……」

無様な醜態を晒してそんな命乞いをするゴブリン。それを見て、女剣士は更に歓喜で顔を歪ませた。

「いいわ、いいわ、凄く良いわ!　そうよ、こういうのよ、こういうのなのよ!　私が求めていたのは、こういうのだったのよ!」

それは、今までにない未知の快樂だった。ともすれば絶頂に達してしまうほどの悅樂。圧倒的優位な状況で、圧倒的低位な存在を弄ぶ。大義名分はこちらにあり、存在不可理由はあちらにある。これが快樂でなくてなんというのか。

「ああ、スゴクイイ!!　これで私はもつと有名になれる!　これで私はもつと昇進できる!　みんなから称賛されて、褒められて、憧れられて、私は「英雄」になるのよ!」

こんな雑魚共を殺すだけでそれが実現できるだなんて、なんて美味しい話なのかしら！

「イヤア……イヤア……酷いゴブ……怖いゴブ……どうして……こんな酷いことするの？」

「どうして？ どうしてって決まってるじゃない！ アンタが「ゴ布林」だからよ！ ゴ布林なんて死んで当然の存在なのよ！ アンタたちはそういう存在なのよ！」

「そんな……そんな……酷いゴブ……」

「わたち……あなたに何もしていない……悪いこと何もしていない」

「いいえ、アンタたちは生きてるだけで「悪」なのよ！ 存在自体が

「悪」なのよ！ 滅せられて当然だわ！」

「もうヤメて下さい!!」

あまりの凄惨な光景に、思わず女治癒士はそう静止した。だが、その程度で止まる女剣士ではない。

「ウルサイわね!! アンタはいつもみたいに黙って見てればいいのよッ！ 引っ込んでなさい！」

「でも……これではあまりにも酷すぎます！ 苦しませないって、約束したじゃないですか！」

「それはコイツが「頑丈」でなかった場合の話よ！ ゴブリンの癖に防護服なんて着てるから、こんなことになんのよ！」

「でも、でも……こんなのは、あまりにも……」

女治癒士の嘆きに、一瞬、女剣士の動きが止まる。そして、目の前で倒れ伏すゴ布林を見下ろした。

ふと、なぜこんなに女治癒士がこのゴ布林をかばうのか、分かったような気がした。この独特な「マスク」が全ての原因だ。見方によれば「可愛い」とも言えなくもないこの「マスク」が、女治癒士の同情を誘っているのだ。

小賢しい真似を……女剣士がギリツと唇を噛み締める。私が彼女を目覚めさせてあげなくては……。

「いい？ アンタはこの「マスク」のせいで同情を感じているんでしょ

うけど、この下にはあの醜悪なゴブリンの顔が収まってんのよ？ ア
ンタもゴブリンの顔くらい見たことあんでしょ！ あのキモい顔が
この下には入ってんのよ！ 見てなさい！」

そう言うのと女剣士は、ランドロクスを掴み上げ、強引にマスクを剥
がそうとする。

「イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
アアア!!」

マスクに手をかけた途端、想像以上の勢いで暴れだすランドロク
ス。しかし、力に勝る女剣士の前では、無駄な抵抗に過ぎなかった。

徐々に、徐々に、外れそうになっていくランドロクスのマスク。そ
れに合わせて、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、という謎のアラーム音が何処から
か聞こえてきた。それは、ランドロクスのマスクが外れそうになるほ
どに、大きな音を立てていく。

「ああもう、ウザったいわねこのアラーム！ どっから鳴ってんのよ
！」

言うまでもなく、アラーム音はランドロクスから鳴っていた。だ
が、それが分かったからといって、なんだというのか？ 女剣士は構
わずマスクを剥がしていく。

「……チコオ……お願い……もうヤメて……ヤメてゴブウ……」

最後の抵抗とばかりに女剣士の腕を掴むランドロクス。しかし、そ
の程度では女剣士の心を逆なでするだけだった。耳障りなアラーム
音は、未だ鳴り響いている。ピツ、ピツ、ピツ、ピイー。

「あと、もう、ちよい……よっし、外れ、たッ！」

パアンツという音を、女治癒士は聞いた。

女治癒士には、〃それ〃がなんの音なのか理解できなかった。

女剣士が崩れ落ちていく。何が起きてるのか分からない。彼女は
痙攣しているようだった。

ランドロクスも地面に落ちた。そのマスクの奥は、女治癒士からは
暗闇に隠れていて見えない。でも確かに外れているようだった。

アラーム音は、もはや「ピイイイイイイイイ」という耳鳴り音になっ
ている。その音だけが、花畑に木霊していた。

「お、女剣士ちゃ……」

女治癒士が女剣士に声をかけようとしたその時、ブオオオオオオオオという爆音と共に、木々の間から「何か」が猛スピードで飛び出してきた。

「それ」をなんと呼べばいいのか、女治癒士には分からなかった。鋼鉄でできた馬車。しかし引き馬は見当たらない。自動で動く馬車——「自動車」とも呼ぶべきそれは、ランドロクスの側で急停止すると、中からたくさんゴブリンたちが飛び出してきた。

真つ先にランドロクスへと駆け寄るゴブリン。女剣士を観察するゴブリン。そして女治癒士の周囲を包囲するゴブリン。皆一様に同じマスクをして、同じ防護服を着ている。

何かとんでもないことをしてしまったのだと、女治癒士はこの時になつてようやく理解した。

「あつ……あつ……あつ……」

ゴブリンたちは一斉に、持っていた「筒状の何か」を女治癒士に向けた。それが何なのか女治癒士は知らなかったが、あまりの恐怖心に強張ってしまい、動くことすらできなかった。それが幸いしたのか、ゴブリンからの発砲はなかった。

「ジュココオ……ジュココオ……」

オマエら 一体 何してくれやがったゴブ！

そんなゴブリンの怒声が轟いた瞬間、ドドドーンという発砲音がして、女治癒士にチクリといった感覚が襲った。それから幾許もなく、女治癒士は意識を失った。

*

*

次に女治癒士が目覚めた時、そこは花畑ではなく、ある個室だった。鉄と石でできた冷たい部屋。薄暗く、ベッドしかない簡素な部屋で、酷く無機質な感じがした。

言いようのない恐怖心に襲われる女治癒士。ここは何処で、何が起きてるのか、何も分からない。

「シユコオ……シユコオ……」

ようやく 目覚めたゴブか〜」

プシューという音と共に石壁が開き、そこから一匹のゴブリンが入ってくる。

「ヒツ……」

女治癒士は身を竦ませた。ガクガクと震え、顔にはアリアリと恐怖が刻まれていた。

「シユコオ……シユコオ……」

そんなに こんなに 怯えることない

ゴブの名前はアルデニクス みなを代表して オマエと話をしにきたゴブ〜」

アルデニクスと名乗ったゴブリンは、女治癒士の側によると、どこからともなく「椅子」を出して、そこにちよこんと座った。

女治癒士はできるだけアルデニクスから遠ざかるように、ベッドの端に逃れる。まるで恐怖に染まる小動物のようだった。

それをアルデニクスは一瞥すると、ややあつてから話しだした。

「シユコオ……シユコオ……」

ここまでビクつかれると アルデニクスでも悲しくなってくる〜

まあいい そういい 気にしない アルデニクス 気にしてない」

「……ここは、どこですか？」

女治癒士がようやく絞り出した言葉は、そんな言葉だった。

「シユコオ……シユコオ……」

ここは 我らが城「リトルシャイア」そこにある 「マッドマツ
デイクス研究所」

オマエさんには 計六つの「罪」が 嫌疑されてる〜」

女治癒士を捉えたアルデニクスの「レンズ」が、薄闇の中で不気味に煌めく。

「でもでも 安心するといい オマエさんの嫌疑 もう晴れた オマ

エさんに「罪」はない〜」

「そ、それは、どういう……」

「どうも どうも そのままの意味〜」

“記録ログ” 見せてもらったが オマエさん 見てるだけだった

むしろ 一生懸命 止めてるようでもあった

そう言うときアルデニクスは、持っていた「記録ログ」を取り出し、起動させた。ブーンと空間に投影された映像が、当時の状況を再現する。

『もうヤメてください!!』

『ウルサイわね!! アンタはいつもみたいに黙って見てればいいのよッ! 引っ込んでなさい!』

『でも! これではあまりにも酷すぎます——』

そこまで再生してアルデニクスは映像を止めた。

「シユコオ……シユコオ……」

オマエさんの嫌疑は この後の「苦しませない」という教唆的な発言が主だが

裁定の結果 無罪放免となった 弁護したランドロクスに 感謝するといひ

「あつ……ランドロクスさんは、ランドロクスさんは無事なんですか!?!」

アルデニクスにランドロクスのことを言われ、彼女のことを思い出す女治療士。女治療士の問いに、アルデニクスは淡々と答えた。

「死んだゴブ」

「……えっ?」

「だから ランドロクス 死んだゴブ」

ランドロクスは オマエさんを弁護したあと 屈辱に耐えきれず自殺したゴブ

「えっ? 死んだ? ランドロクスさんが? な、なんで?」

震える声で女治療士は問うた。

「ランドロクス マスクの下見られた これはゴブリン族にとって死よりも耐え難い屈辱ゴブ

だから ランドロクス オマエさんを弁護したあと ゴブリ爆弾で自爆した」

アルデニクスたちゴブリンは、それを決して止めようとはしなかった。それほどの屈辱だったのだと、カレらはよく理解していたのだ。「あああああああ」

震える声が溢れ出す。

「わ、私たちが……む、無理にマスクを外そうとしたから……ラ、ランドロクスさんは、死んだ？」

「違うゴブ〜 オマエさんたちじゃなくて もう一人のヒトが外したから 死んだゴブ〜」

オマエさんは見ているだけだったと 「記録」も「証言」も「証明」してるゴブ〜」

「わ、私があの時見てるだけじゃなくて、止めてれば、彼女は死ななかつた？」

「そうかもしれんし そうじゃなかつたもしれんゴブ〜」

でも そんなモンはタラレバの話で ランドロクスが死んだことに 変わりない〜」

あまりにも無慈悲なまでに、アルデニクスはそう言い切った。

「わ、私……こんなことになるだなんて、思ってもみなくて……だ、だって……あ、の……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「今更謝られていも 遅すぎるゴブ〜 それに謝るなら ランドロクスにゴブ〜」

でもランドロクス 粉微塵になって爆散しちゃったゴブ〜 もうなーんにも残ってないゴブ〜」

それでも女治癒士は、うわ言のように「ごめんなさい」と繰り返すばかりであった。そんな彼女に対し、アルデニクスは構わず続ける。

「それにオマエさん 謝っている場合じゃない〜」

オマエさんの裁判は終わったが〜 もう一人のヒトの裁判 終わってない〜

オマエさんはこれから その「弁護」をするんだゴブ〜」

未だ「ごめんなさい」を繰り返す女治癒士には、アルデニクスの言葉は届いていないようだった。

*

*

ゴブリンたちの裁定所、「ゴルダナル裁定所」の「円型法廷」では、怒れるゴブリンたち数百人がひしめき合っていた。

ガヤガヤ、ザワザワ、ゴブゴブ、シユコオシユコオ。今こそゴブ式裁判の時である！

「ジユコオ……ジユコオ……」

聞くと良い 見ると良い 同胞たちよ！ 栄光ある我らがゴブリン族たちよッ！」

ひとときわ立派な「裁判マスク」を被った裁判長ゴブリンが、法廷の中央でそう宣言した。

裁判長ゴブリンの言葉に呼応し、傍聴ゴブリンたちが声を揃える。ゴブ式裁判！ ゴブ式裁判！ ゴブ式裁判！ ゴブ式裁判！

「そう！ これより それより ゴブ式裁判の時でゴブ！」

被告人は か弱き少女Aのマスクを外せし大罪人 「女剣士」！

裁判長ゴブリンの台詞と共に法廷の扉が開き、厳重な装備に身を固めた警備ゴブリンに連れられて、女剣士が入廷してきた。

彼女の登場に傍聴ゴブリンたちは恐怖に包まれた。あちこちで悲鳴があがり、ヒソヒソゴブゴブギャーギャーざわめく。

連行されてきた女剣士は、なんと全身全裸だった。だらしなく膨らむ乳房を晒し、秘部はみっともなく露出されている。手足は頑強な「ゴルダナル鋼」でガツチリ拘束され、抵抗は出来ないようだ。なんて原始的な姿なのか。まるで文明的でない。信じられないくらい屈辱的な醜態だ。うええお下劣。

女剣士は全身切り傷だらけで、端正だったその顔は半分焼け爛れ、皮膚が剥げていた。目には全く生氣がなく、その足取りはたどたどしかった。

そんな変わり果ててしまった女剣士を、女治癒士は弁護席から眺めていた。

ゴブリンのざわめきはやがて怒声となり、女治癒士には分からない

言葉で、女剣士を罵っている。女治癒士はただただ怖かった。この裁判所も、ゴ布林たちも、女剣士のことも、何もかも。

「ジユコオ……ジユコオ……」

そして この大罪人を弁護するのは 同じくヒトの娘 「女治癒士」！

彼女は女剣士の友人であるからして この裁判に特別召集されたものである！」

裁判長ゴ布林がそう宣言すると、ゴ布林たちが沸き立つ。その喧騒の中で女剣士の視線が、女治癒士を捉えた。消えていた瞳の生気が、僅かに蘇る。

「ねえ、ねえ！ あなた女治癒士でしょう!? ねえ、お願いよ！ お願いだから、ここから助けてッ！」

そう訴える女剣士に、女治癒士はなぜか原始的な恐怖を抱いた。続けるような女剣士の視線、みつともなく涎を垂らし、目には涙が浮かんでいた。

「ねえ、ねえ、聞こえてるんでしょ!? コイツらに言つてやつてちょうだい！ 私は何も悪くないって!!」

なにが何も悪くないのか……私たちは、もうどうしようもなく「罪」を犯しすぎた。取り返しのつかないことをしてしまった。今更後悔しても、何もかもが遅すぎるのだ。

「ねえ！ お願いだからよ！ お願いだから！ 返事をして！ ねえ、女治癒士！ 聞こえてるんでしょ!? ねえ、無視しないでよ！」

オイ、返事をしろよ！ 返事をしろ、女治癒士イイイイ!!」

女剣士の罵声は、ゴ布林たちの喧騒にかき消され、女治癒士には届かなかった。しかし、たとえゴ布林たちがいなくても、彼女には響かなかっただろう。女治癒士は嗚咽を漏らし、弁護席に寄りかかって、泣き崩れることしかできなかった。

「ジユコオ……ジユコオ……」

ではこれより 裁定を始める！

被告人「女剣士」は 暴行罪を始めとする 四七の「罪」の嫌疑が掛けられているゴブ

詳細については “コレ” を見ると良いゴブ

裁判長ゴブリンがそう言うと、中央の空間に先程女治癒士が見た映像が再生された。

『へえー、アンタが言ってたとおり、ホントに喋ってるじゃない。ぶつちやけ半信半疑だったけど、マジだったのね』『チッ！ 浅かったか！』『やめて……こないで……イジメないで……』『どうして？ どうしてって決まってるじゃない！ アンタが「ゴブリン」だからよ！ゴブリンなんて死んで当然の存在なのよ！ アンタたちはそういう存在なのよ！』『いいえ、アンタたちは生きてるだけで「悪」なのよ！ 存在自体が「悪」なのよ！ 滅せられて当然だわ！』『イヤイヤイヤイヤイヤイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』――ブツン。

映像が終わって暫くしても、法廷は静まり返ったままだった。

「な、なによ……なによなによなによなんなのよ!! これの一体どこが悪いって言うの!? だってそうでしょう? オマエたちは「悪」なのよ! 醜悪で下劣で卑猥な人類の「敵」なのよ! 私が正しいのよ! 私は間違ってるんじゃない!」

そう訴える女剣士の姿は、ゴブリンたちには酷く醜く見えた。もはや哀れですらあった。裁判長ゴブリンは続ける。

「被告人はこの後 少女Aのマスクを剥がし その素顔を見た嫌疑が掛けられているゴブ!

これに関して 被告人 なにか申し開き あるゴブか?」

「だから、それがなんだっていうの? マスクの下を見たら、なんだっていうのよ!」

女剣士の発言に、傍聴ゴブリンたちはどよめいた。マスクの下見たらって、口にするもの悍ましい発言だゴブ。

「ヂココ……ヂココ……」

裁判長! ご覧の通り被告人は 全くもって これっぽっちも反省の色が見えないゴブ

ゴルダナル法典に従い 我々は 「貢献罪」の適用を求めるゴブ!」
女治癒士の弁護席とは反対方向に位置していたゴブリンが、手を挙

げ立ち上がるとそう言った。傍聴ゴブリンたちが騒めく。あ、あの「貢献罪」をゴブか!?

「ジユコオ……ジユコオ……」

ふむふむ ではでは 弁護士——」

裁判長ゴブリンがそう言うのと、法廷中のゴブリンの目が女治癒士に集中した。女剣士の継るような目さえも、女治癒士に注がれる。

「あ、あ、あの……わ、私、私……私は……」

あまりのプレッシャーに女治癒士の膝はガクガクと震えた。世界がグルグルと廻る。下半身に力が入らず、その場にへたりこんでしまう。彼女の股間からは、何やら透明なモノが溢れ出ていた。

ゲエー、アイツおしっこ漏らしたゴブよ! バカッ神聖な裁判中になんてこと言ってるゴブ! 傍聴席の方からそんな囁き声が聞こえる。

「ジユコオ……ジユコオ……」

弁護士! 弁護士! 弁護士 「女治癒士」!

女剣士の凶行に対し 何か釈明 もしくは弁解などはないゴブか?」

「お願いよ、女治癒士! ヤツらに “私は悪くない” って教えてあげて! あれは、そう……不幸な事故だったのよ!」

「あ、あ、あ、私は……私は……ただ、女剣士ちゃんに追いつきたくて……」

だから——ランドロクスを利用して、彼女との友情を利用して、利益を得ようとした。

「こ、こんな……こんなことになるなんて、思ってたんですけど……本当です……わ、私たち、何も知らなくて……それで……」

いや、本当は知っていた。ゴブリン族にとってマスクがいかに大事かを、少なくとも女治癒士はランドロクスとの会話を通して、知っていた。知っていたはずだった。知っていたはずなのに、こんなことをしてしまった。

「でも……こ、こんなに、大事になるだなんて、お、思ってた……だから……だから……」

それからは女治癒士はまるで命乞いをするようにうずくまり、ただ「ごめんなさい」と繰り返すばかりだった。

「ねえ、ねえ！ それだけなの!? それだけしか言うことはないの？
ねえ、お願いだから、顔を上げてよ女治癒士！ まだ何か言うことがあるでしょう？ ねえ、ごめんなさい」 じゃなくて何か言つてよ！ ねえ！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

それからは、ゴブリンにも見るに堪えない醜態が繰り広げられた。女剣士は女治癒士に罵詈雑言を投げ、女治癒士はただただ謝るばかりだった。

「アンタだつて私に協力していた癖に！ 花畑に案内したのは誰!?
ゴブリンの話を私にしたのは誰!? 全部オマエだツ！ 全部オマエがやったんだ！ なのになんで私がココにいて、オマエがそこにいるんだ！ オマエこそが諸悪の根源だろうが！ クソが！ このクソアマが！ 地獄に落ちろ！ 地獄に堕ちろおおお!!」

「静粛に！ 静粛に！」

見るに見かねた裁判長ゴブリンが「カンカンカン」つと「ゴブリガベル」を叩く。あまりにも叩きすぎてボコボコになりそうだったが、その頃になつてようやく罵詈雑言が止んだ。

「ジユココオ……ジユココオ……」

弁論は以上でゴブ！ これより神聖なる審判の下 判決を下すゴブ！

被告人「女剣士」は「有罪」か「否」か？ 裁定は如何に!？」

裁判長ゴブリンの問いに、法廷中のゴブリンたちが大合唱で応える。

有罪！ 有罪！ 有罪！ 有罪！ 有罪！ 有罪！

「ジユココオ……ジユココオ……」

ならば しかして その「罪」とは何ぞや？ その「罰」とは何ぞや？」

貢献罪！ 貢献罪！ 貢献罪！ 貢献罪！ 貢献罪！ 貢献罪！

「よおし ならばこれにて 審判は下った!

被告人「女剣士」に 「貢献罪」を下すでゴブ! 女剣士は「貢献罪」
ゴブウウウ!!」

裁判長ゴブリンの裁定に、法廷中のゴ布林たちが「わあああああ
あ」つと歓声をあげた。

「いや、いやよ、巫山戯んじやないわよ! 誰がアンタたちの言うこと
なんか——あう!」

判決の決まった大罪人に、もはやここに居場所はありません。可
及的速やかに刑を実行するため、周りを固めていた警備ゴ布林たち
は、女剣士を連行した。法廷では、なおも割れんばかりの大合唱が響
いている。

貢献罪! 貢献罪! 女剣士は貢献罪! 貢献罪! 貢献罪!

女剣士は貢献罪! 足の先から頭の天辺まで、女剣士は貢献罪!

「やだ、やだ、いやだ! お願い、お願いよ! 私が悪かったから!

謝るから、謝るから、許して! お願い——」

そしてドーンという音と共に、法廷の扉は閉じられた。

*

*

女治療士は、ゴ布林たちに最初にあてがわれた部屋で、ぼうつと
天井を見ていた。目は腫れ、唇はカサカサになっていた。顔は完全に
生気がなく。まるで生きた屍のようでもあった。

そこにまたもや同じようにプシューと扉が開き、アルデニクスが
入ってくる。

アルデニクスはまた何処からか椅子を取り出して、ちよこんとそこ
に座った。

「シユココオ……シユココオ……」

初めての「弁護」にしては あー そこそこ まずまずだったゴブ
アルデニクスなりに励ましたつもりだったのだろうが、全くもって
効果はなかった。アルデニクスは思った。そんなに衆目の前でお

しつこ漏らしたのがショックだったのか……と。

「シュココオ……シュココオ……」

これで オマエさん ここでやるべきこと 終わったゴブ
今日はもうお外は真つ暗だから 明日の朝 人里まで送っていく
ゴブ」

それから暫く沈黙が続いた。手持ち無沙汰になって、アルデニクスが色々と今後について思案し始めた頃、ぽつりぽつりと女治癒士が口を開いた。

「……女剣士ちゃんは、これから、どうなるんですか？」

アルデニクスは答える。

「シュココオ……シュココオ……」

女剣士さんには 「貢献罪」 適用されたゴブ

貢献罪 ととて重い罪でゴブ でも一番名譽な罰でゴブ

女剣士さんは 足の先から 頭の天辺まで 余すことなく ゴブ

リンの発展に 「貢献」 してもらおうゴブ」

「それって…… 「孕み袋」 になれってことですか？」

女治癒士の問いに、アルデニクスは不思議そうに答えた。

「なんだ その 「孕み袋」 ってのは？」

貢献罪 そんなモノと違う 貢献罪 何もかも有効利用する

服も 武器も 毛も 皮も 肉も 骨も 血も 爪の先も 細胞

一つに至るまで 全部有効利用する

生きてる内は 実験 研究 死んだ後も 研究 実験

そういう罪だと みんなで決めたく そういう罰だと みんなで
決めたく」

女治癒士はアルデニクスの説明を聞いて、ぞっとした。貢献罪とは「孕み袋」なんかよりも悍ましい、凄惨な罪だったのだ。

生きてる限り実験に利用され、死んでからも実験に利用される。あらゆる延命処置を施し延命され。あらゆる蘇生措置を施され蘇生される。それを何度も繰り返し、もう二度と目覚めなくなったら、今度は徹底的に解剖され解体される。

血や骨は錬金術の材料となるだろう。皮は革細工に、毛は糸になる

のだろうか？ 肉や内蔵は、食用に適するかどうか調べられるかもしれない。

そして何よりも恐ろしかったのは、その罪は本来、ゴブリンに対するものだという事だった。そのことが、女治癒士は何よりも恐ろしかった。カレらはそれを当然のこととして、受け入れている。

純粋さは時に、残酷さを強調させる。彼らゴルダナルのゴブリン族のあり方は、まさにその言葉そのままだった。

「あ、あの……せめて……せめて……女剣士ちゃんの……あの子の「認識票」だけは、返してくれませんか？」

冒険者にとって「それ」は、最期の生きた「証」だった。記載されるのは、名前と種族と職業ぐらいなものだったが、「認識票」にはそれ以上の意味が籠められているのだ。

だが、アルデニクスたちゴブリンに、そんな倫理は通用しない。無慈悲までの結論を、アルデニクスは女治癒士に伝えた。

「シユコオ……シユコオ……」

申し訳ないけど それは無理ゴブ

貢献罪に処されたモノの持ち物は 全て没収されるんだゴブ 全部共有財産になるんだゴブ

オマエさん渡せるものは 細胞一つありはしない」

「……そう、ですか」

不思議と、女治癒士は残念とは思わなかった。いっそ清々しさすら感じていた。ここまで徹底的だと、笑いすら込み上げてくるようだった。それなのに、瞳からは涙が溢れていた。

「シユコオ……シユコオ……」

アルデニクス 分かったゴブ “ヒト”とゴブリン関わると

最悪 こうなるって

だから ヒトと関わっちゃいけません そう教えてたけど 本当

残念ゴブ……」

アルデニクスは気落ちしたようにそう言った。

「今回 アルデニクスたち ランドロクス失った

今回 オマエさん 女剣士失った

今回 お互い それで手打ちにするゴブ

今回 お互い 何もなかったゴブ そういうことにするんだゴブ」

「……そう、ですか……そう……ですね」

アルデニクスの提案に、女治癒士はそう答えた。

それからそれ以上、二人は会話を交わすことはなかった。

*

*

翌朝、女治癒士は「へんぴな農村」まで戻ってきていた。

どれだけ留守にしていたかは分からない。でも、早朝に帰ってきたというのに、村人たちからは何も心配されなかったところを見ると、そんなに時間が経っているわけではないようだった。

あまりにも長閑な様子だから、昨日あったことが、まるで夢か幻だったかのよう思えてくる。

女治癒士は老人村長邸に辿り着くと、真つ先に老人村長の下へと向かった。そして老人村長に今回の調査結果を報告した。森は「何も問題はない」。『何も問題はなかった』と。

「いやーそうかそうか、薄々はそうじゃないかと思っておったが、冒険者さんのお墨付きとなれば、これで一安心じゃわい」

「ただ、森に住むカレらは、平穏を望んでいるそうなので、そつとしておいてあげて下さい」

「ん？ ああ、それは構わんが……なんとも、まあ、まるで話してきたみたいに言うんじゃないのう」

「ええ、まあ、はい……それで、あの、もう私はこれで失礼します」

「それは随分と忙しないのう。これからワシらは朝食なんじゃが、どうじゃ？ 冒険者さんも良ければ一緒に……」

「いえ、急いでいますので、大丈夫です」

「……そ、そうか……冒険者というのも大変なんじゃのう……ん、じゃがはて？ お嬢さんと一緒だったもう一人の冒険者さんは……」

「帰りました！」

「え？」

「だから、女剣士ちゃんは、もう帰りました。先に帰ったんです」
「そ、そうか……じゃあ、長く引き留めるのもあれじゃし、ここまでに
しようか。冒険者さん、ありがとう」
「はい、短い間ですがお世話になりました。もう二度と会うことはな
いでしよう」

それから女治癒士は街へ戻り、そして冒険者を辞めた。

秩序の中の混沌（ゴブリン）

悲劇とは、ほんの些細なすれ違いによって辿り着いてしまった、答えの先にあるものなのかもしれない。

たとえそうだとしても、ゴブリンたちは多くを悩まない。「過去」とは「知るべきもの」であって、「見るべきもの」ではないからだ。見るべきなのは「今」であり、考えるべきことは「未来」のことなのだ。だからゴブリンたちは、「これまでのこと」ではなく、「これからのこと」について考えていた……。

*

*

順風満帆に思われていたゴブリンたちの発展も、この頃になると、その速度も緩やかになっていった。

これまでの驚異的な発展は、アルデニクス主導によるエオルゼアゴブリン技術の「再発見」が主な原動力だったのに対し、主要ゴブリン技術を「再現」し終えた今となっては、これまでのような恐るべき発展速度は望めぬものとなっていたのだ。

とはいえゴブリンたちは、そのことを「問題」としては捉えていなかった。ただ、いそいそ忙しない毎日から、ゆつくりのほほんとした日常へ、変わり始めてきただけのこと。平和を享受し、ゴブリンたちは安穩に包まれようとしていたのだ。

「ゴブリタンク」や「ゴブリウォーカー」などの便利な乗り物、ゴブリン機構に支えられた安定した都市システム、高度に効率化された生産システム——そんな中で起きた先日の「悲劇」は、ゴブリンたちに少なくない衝撃をもたらした。

想像だにしていなかった「悲劇」に動揺するゴブリンたち。しかし、失敗に学ばぬゴブリンたちはいない。「悲劇」で得た「教訓」を糧に、ゴブリンたちはさらなる発展を歩み出す。

ゴブリンマスクと防護服に新たな改良を施し、より安全な治安維持システムを構築した。そしてなにより著しく「進化」したのは、ゴブ

リンたちの「武器」だった。

高度な文明を持ち、しかしながら、自然との調和を「是」とするゴルダナルのゴ布林たちは、その技術力に反して、これといった「武器」を持っていなかった。

文明開化当初、まだ外敵が多かった頃は、身を守るために弓や槍、剣などの「武器」が必要だったのだが、森を我がモノとし、大森林の支配者となったゴ布林たちには、必要以上の「武器」は不要となっていったのだ。

森に住む生き物たちは、ゴ布林たちの「脅威」ではなく、共に生き、共に死んでいく「親愛なる隣人」である。過剰なまでの「武力」の保持は、森の「秩序」を崩壊させかねない危険なものだった。

混沌は秩序の中にあつてこそ意味がある。オモシロおかしい「混沌」は、きちんとした「秩序」あつてこそ楽しく栄えるのだ。そう、ゴ布林たちは知識と経験から信仰していた。

そんなわけでゴ布林たちの主要武装は、あまり傷つけることなく「脅威」を無力化できる「ゴブリ麻酔銃」がせいぜいなわけで、たとえもつとスゴいモノを「再現」できたとしても、決してしようとはしてこなかった。

しかし、ゴ布林たちは知ってしまった。「脅威」とは、森の「中」ではなく、「外」にもいるのだということ。そして、その「脅威」とは、ゴ布林が望むと望まざるとに関わらず、向こうからやってくるということ……。

「脅威」とは、時として文明発展の起爆剤となる。良いか悪いかは別として、それは確かな事実だった。ゴ布林たちは他の多くの種族と同じように、外敵からの「脅威」に備えるため、自らの技術力を結集して「武装」し始めたのだ。

これは、そんな折に起きた出来事である。

*

*

ドシーン！ ドシーン！ 平和だったゴルダナル大森林に、突如と

して「脅威」が現れた！

なんの前触れもなく山間部に出現した、身の丈10ゴブリンはあり
そんなムキムキマツチヨの大男。肩と頭からはドでかい角が突起し、
口元には大きな牙が生えている。逞しすぎる筋肉はモリモリで、それ
を誇示するかのように、サビのような赤褐色の肌が外に露出されてい
た。マツチヨマンの両腕には、これ見よがしに大きな戦斧が握られて
いる。

そう、言わずと知れた「人食い鬼^{オーガ}」である！

強固な盾を持つ騎士を、その盾ごとぶった切ったり、数多の術を修
めた魔術師を、それよりもっとスゴい術で焼き殺しちゃったりする、
なんかこうめっちゃめっちゃ強くてスゴい、ヤバイヤツだ！

そのオーガの中でもこのマツチヨメンは、「オーガ長」の名を持つ兎に
角色々とスゴいヤツで、平和に暮らすゴルダナルのゴブリンたちの平
穩を脅かすために、遙々遠方からここまでやって来たのだ！

いや実際には、「魔神将」からの密命を受け、復活した「魔王」の
領土拡大を目論むためにゴルダナル大森林にやって来たのだが、そん
なことはゴブリンたちの知るところではない。

ゴブリンたちが「ゴルダナル大森林」と呼ぶこの土地は、未開拓だっ
た故か異常なまでに天然資源が豊富であり、「神々に愛されし地」と
呼ぶに相応しいミラクル大地だった。さらに、立地的にも人類の主要
都市からいい具合に離れていることもあって、「祈らぬ者」どもにとつ
てかなりの要所となっていたのだ！ 当然、そんなこともゴブリンた
ちの知るところではない！

そんな重要地点である「ゴルダナル大森林」に単身乗り込んできた
「オーガ長」は、その見た目は言わずもがな、その実力、その信頼、そ
の実績全てに於いて相当なモノであることは、そのムキムキの筋肉具
合から容易に推し量ることが出来るだろう。筋肉はパワー、パワーは
筋肉……つまり、どういうことかというところ、ゴルダナルのゴブリンた
ちは絶体絶命のピンチだった！

しかし、そんな危機に瀕しているゴブリンたちは、オーガ長の姿を
最新の治安システムで捕捉した時、呑気にもこう思った。なんて原始

的な見た目なんだゴブ！ ああ恐ろしや！

なにせ相手は「ほぼ全裸」。ゴブリンたちにとってはそれがなによりも重要だったし、なによりも見るべき箇所であった。防護服どころかマスクすらしていないゴブ！ なんとという原始的な格好！ そのせいか、便利でお得な「道具」であるはずの「斧」でさえ、野蛮で前時代的なものに見えてくる。

突如出現した原始的な生物に対し、ゴブリンたちは対応を迫られた。どうしようか、そうしようか……なにせ相手は野蛮そうなお人。強引にお引取り願うこともできるだろうが、「過去」の教訓を基にする、下手に手出しするわけにもいかないぞ。

「相手は単騎ゴブ！ さっさと先制してさっさと排除してしまうゴブ！」

「でもでも 手荒なマネはご法度ゴブ 相手は原始的な生き物の可能性 高いゴブ 慎重に接触して 丁寧にお願いゴブ」

「しかし 接触したところで 会話が通じるとも 限らないゴブ」

「下手打てば 「前回」のようなコトになっちゃうゴブよ！」

「ゴブゴブ 確かに それだけは 避けなくてはならないゴブ」

「であるならば 躊躇わずうって出るべきゴブ！ そのために作った『アレ』ゴブ！ 是非もないゴブ！」

「だが それでは「あの時」とまるで変わらないゴブ！ 「前回」のことを忘れたゴブか!? あの「悲劇」を 我々が繰り返すワケにはいかないゴブ！」

「フゴフゴ もっともな意見ゴブ 相手が原始的だからとはいえ我々も原始的になる必要はない」

「それに 原始的な見た目だからといって 中身が原始的である保証もないゴブ 「前回」の時もそうだったし 「見た目で判断してはいけません」 それは忘れちゃいけないことゴブ」

「確かに確かに でももしかして このまま放置するわけにもいかないゴブ 対策を練らねば」

「ウムウム 全くもってそのとおりゴブ じゃあ どうしようかゴブ？」

「うーん うーん どうしようかー そうしようかー」

やんややんや、ワイワイ、ゴブゴブ……斯くしてゴブリンたちの「会議」は踊り、しかして、めつきり進まなかった。暇なゴブリンたちが全員出席する「直接民主制」の会議では、もはや増えすぎたゴブリンたちの統制をとれなくなってきたのだ。

正体不明の「脅威」に対し、右往左往するしかできないゴブリンたち。そうこうしている間にも、「原始的な生物」は「リトルシヤイア」へと真っ直ぐ接近してくる。何が目的なのかは皆目検討も付かないが、とてとてピンチだ！

とりあえずゴブリンたちは、有能そうなゴブリンたち何名かを代表として選考し、その他のゴブリンたちはカレらに採択を託して仕事に戻っていった。「ゴブリン賢学者議会」発足の瞬間である。

「この足取り この進み方 明確な「意思」を感じるゴブ！」「原始的な生物」は「意思」を持つてるゴブ！」

「そんなもん 見れば分かるゴブ！」「意思」を持っていればどうだというのだ？」

「意思を持つてるなら 会話が可能なはずゴブ！ コミュニケーションが可能なはずゴブ！ それならお話して 丁重にお帰り願うゴブ！」

「しかし 会話が通じるからといって 友好的とは限らないゴブ 下手に刺激すると 「前回」のようなことになりかねないことも 無きにしもあらずゴブ！」

「然り然り だからといって ムザムザ侵入を許すのも 許されないゴブ ほっとくわけにはいかないんだゴブ」

「誰かが代表して 接触するしかないゴブ！ 成人していて 知性が高く 経験豊富で 実力があり 頼りがいのあるゴブリンがいいと思うゴブ！」

「ウムウム 全くもって同意見だゴブ ならばしかして そんなうってつけのゴブリンは 誰ゴブか？」

会議中のゴブリンの目が、あるゴブリンに集中した。成人していて、知性が高く、経験豊富で、実力があり 頼りがいのあるゴブリン。

そんなゴブリンは一人しかいない。そう何を隠そう、我らがアルデニクスである！

「シユコオ……シユコオ……」

あゝ もしかして もしかして アルデニクスのことか？」

冒険者というのは、往々にして厄介事をふられる運命にある。アルデニクスが尊敬する世界一偉大な冒険者も、世界一多忙な苦労人なのだ。ゴブリン族の冒険者であるアルデニクスもまた、その運命にあつたのかもしれない。

斯くして矢面に立たされたアルデニクスは、筋肉モリモリマッチョマンの原始的な生物と、単身対峙することになるのである。

*

*

森をドシンドシンと揺るがし、ズンズン前進していた「原始的な生物」こと「オーガ長」の目の前に、アルデニクスはポツンとやってきた。その様子は、治安システムを通じて、「ゴブリン賢学者議会」にモニタリングされている。

「シユコオ……シユコオ……」

やあやあやあ 我こそはゴルダナルのゴブリン族「アルデニクス」
そこなるここなる 旅人よ 一体全体 この森になんのようにゴブか？」

アルデニクスはとりあえず、もつとも普及しているであろう「共通語」で話しかけてみた。「前回」のヒトはこれで会話が成立したし、よしんば通じなくても、他の言語を試してみればいいだけの話である。幸か不幸か言葉は通じたらしく、ムキムキの原始的な生物は足を止め、アルデニクスをギロリと睨みつけると、地の底から響くような声で応えた。

「フンツ、何者かと思えば、小鬼風情か……生意気にも言語を解すようだが、片言とは……相も変わらず下劣な種族よ。なにゆえ、そのような奇つ怪な姿をしている？」

アルデニクスは言われて思った。コイツ、初対面なのにめちゃんこ

偉そうゴブ。

「シユコオ……シユコオ……」

どうしてもこうしても オイラはゴ布林族だから マスクを被るの 当然ゴブく 防護服着るの 当たり前前ゴブく」

「何をワケの分からんことを……フン、たとえ言葉を得たとしても、所詮は劣等種族ということか……まあいい、オマエがこの森のゴブリンの頭目か？」

オーガ長の質問に、アルデニクスは首をかしげた。

「シユコオ……シユコオ……」

アルデニクス 頭目違う違うく

ゴ布林族 上も下もないく ゴ布林族 みんな平等く

みんな同じで みんなハッピー！」

アルデニクスのゴ布林族への貢献度は、もはや「神」近いレベルでトンデモナイことになっていたが、ゴ布林たち特有の「個」を尊重し、しかしながら「集団」を重視するという全体主義的な思想のためか、一応それなりに尊敬されてはいるが、あくまでもそれなりでしかなかった。

みんな一緒にみんなイイ！ それがゴ布林たちの信条なのだ。

なんとも要領を得ないアルデニクスの返答に、オーガ長はちよつと面倒くさくなったのか、余計な追求を避けた。スルーしたとも言おう。「……まあいいだろう。我こそは「魔神将」よりこの地に遣われた「オーガ長」である！ これからオマエたちは「魔神王」さまの名の下に、この「土地」を明け渡し、我らが「混沌の軍勢」の「軍門」に下るのだ！」

ドーン！ という効果音でも聞こえてきそうな堂々たる態度で、オーガ長はそう要求を突きつけてきた。

それに対しアルデニクスは「えっ!？」と思った。「ゴ布林賢学者議會」のゴ布林たちも、同じく「えっ!？」と思った。ちよつと良く意味が分からない。土地を明け渡して軍門に下れって？ ウムムムム、なぜ唐突にそんな要求を……もしかしてひよつとすると、オーガ長さんは別の言葉を喋っているのかな？

ゴブリンたちは急いでオーガ長の真意を探ろうとした。その間、アルデニクスとオーガ長には、気まずい沈黙が流れる。しかし、そう思ったのはゴブリンたちだけだったのか、オーガ長は愉快そうに笑いながら続けた。

「ガツハツハツハ！ フム、驚きすぎて言葉もでないか！ まあ、当然のことだろう。矮小なるキサマら小鬼には、身に余るほどの光栄だろうからな！」

何を勘違いしてしまったのか、アルデニクスの反応を見て、そんなことを言うオーガ長。

アルデニクスはなんだか、とてとて申し訳ない気分になってしまった。「混沌の軍勢」かなんだか知らないが、土地を明け渡すワケにもいかないし、軍門に下るつもりもない。それはアルデニクスだけでなく、賢学者議会のゴブリンたちも同意見であった。

「シユコオ……シユコオ……」

あゝ 申し訳ないけどオーガ長さん あなたの提案 受け入れられないゴブ〜

アルデニクスたち 丁重にお断りするゴブ〜

アルデニクスの返答に、オーガ長は「はあ？」という顔をした。ちよつと何言ってるかわからない。両者とも、上手く意思疎通が取れていないようだ。異文化コミュニケーションの難しいところである。「アルデニクスたち 土地は明け渡せぬし オマエたちの軍門にも下らない〜」

我々は争いを好まない〜 争いはなにも生まぬ〜 申し訳ないけど お帰り願うゴブ〜

想定外の返答に、オーガ長は狼狽える。まさかゴブリンに断られるだなんて、思ってもいなかったのだ。このままでは、魔神将から直々に授かった任務に失敗してしまう。

「な、なにを言っているのだ!? 我らが「魔神王」さまが復活なされたのだぞ!? いまこそ団結し、祈る者どもに復讐する時ではないか！」

そう激昂するオーガ長。混沌より生まれしモノのクセに、なに秩序だったこと言ってるんだとお冠の様子。

「でもでも」 我らゴブリン 「魔神王」など知らぬ」 「復讐する時」も知らぬ」

知らぬなら」 戦うわけにはいかぬ」 手を貸すわけにはいかぬ」 「無益」な争いほど 「無益」なモノはない」

これには流石のオーガ長も力チンときた。いくら同族の中でも話
がわかるヤツと評判のカレでも、限度というものがあるのだ。この様
にゴブリン族はいつも一言多いのが、玉に瑕だった。

「無益!? 無益だ!? 我らが祈らぬ者の「悲願」を「無益」だと言う
のか!? 創世以来虐げられ続けてきた我らが「悲願」を、キサマは「無
益」だと言うのか!? この、この……「混沌」の風上にも置けぬグズ
めツ！」

そんな怒号とともにブオンっという風切り音が鳴り、オーガ長の豪
腕から怒りの斬撃が繰り出される。

オーガの中でも我慢強いと噂のオーガ長だが、なんやかんやいつて
オーガらしく短気なのだ。こうとなつては混沌流交渉術の出番であ
る。つまりは話を通じぬとなればブツ殺すまで。実にシンプルな発
想だったが、小鬼風情には効果てきめんはずだった。二、三匹目
ぬっ殺せば、大人しく従うだろう。いつもと同じパターンだ。

オーガ長の人知を超えた剛力から放たれた一撃は、見事なまでの正
確さでアルデニクスに撃ち込まれる。あわやアルデニクスの命は風
前の灯火! オーガ長の大斧は吸い込まれるようにアルデニクスに
向かい、そして、ガキインっと止まった。

「な、なんだっつと!?!」

オーガ長が狼狽え声を上げる。なんと信じられないことに、オーガ
長の一撃は、身長10分の1にも満たない矮小なゴブリンに、完璧に
防がれてしまったのだ!

「ば、馬鹿な!?! 我が一撃がこんな雑魚に……!?!」

動揺するオーガ長に対し、迫真のマスク顔でアルデニクスが自信
満々に宣言してみせる。

「新型防護服ゴブ!」 ドドーン!

流石はゴブリン製のNEW防護服である。オーガ長の攻撃に傷一

つ付いていない。しかし、実際に無傷なのはそれだけが理由ではなかった。

確かに防護服の性能は飛躍的に向上していたが、体格的にも質量的にも、こんな理不尽な現象が起きるはずなのだ。しかし、現実には起きてしまっている。これは、明らかにこの世界の法則から逸脱した現象だった。大事なことなのでもう一度言うが、この現象は明らかにこの世界の法則から逸脱している！

「ええい、小癩なツ！ ならばこれならどうだツ!? カリブ^火ンクルス^石……クレ^成スクント^長……」

オーガ長の掌に、暴虐的とも言える火球が収束する。呪文を紡ぐほどにそれは巨大になっていき、最終的にはオーガ長を超えるほどの大ききさになっていた。「キヤストタイム」はそこそこ長かったので隙だらけだったが、アルデニクスは何もしなかった。お約束は守る主義なのだ。

「食らうがいいッ!! ……ヤク^投タツ!!」

放たれる火球。燃え盛る炎。衝撃で木々はなぎ倒され、灰になる。そしてその中心でアルデニクスは、平然とその場に立っていた。

「新型防護服ゴブ!!」 ドドーン！

迫真のマスク顔で、アルデニクスはそう自信満々に宣言してみせた。流石はおニューの防護服である。ビクともしていない。だが、お察しのとおり、無傷な理由はそれだけじゃなかった！

アルデニクスは何処にでもいる普通のゴ布林だが、言わずもがな、エオルゼア出身のゴ布林だ。この「世界」とはまた別の、異なる「理」から来た異世界ゴ布林なのである！

アルデニクスは賽を振らない。そもそも「賽を振る」という概念すらない。いちおう「ゴブリダイス」とか「random」という概念はあるが、カレを支配するのは緻密に計算された「数値」であり、綿密に処理された「数式^{プログラム}」だった。

要するに「世界観」が違うのだ。アルデニクスの「世界」には「レベル」があり、「ステータス」があり、「パラメータ」があり、「プログラム」があり、それが全てを決定し、全てを司っていた。この「世界」

にも力量^{レベル}という「言葉」はあるが、それとは違い、純然たる性能規格を決定づけるという意味での「レベル」を、アルデニクスは持っていたのだ。

アルデニクスの「レベル」は、アルデニクスも詳しくは知らない。それは特殊な能力を有した人物しか「視る」ことができない、不可視のモノだからだ。しかし、その程度を推し量ることはできる。

アルデニクスは冒険者だ。カレが尊敬する「あの冒険者」と比肩するほどではないが、それなりに熟練したベテラン冒険者だった。少なくとも「ヤーンの大穴」まで単独で踏破し、その土地の「Bランクモブ」とタイマン張れるくらいには、一端の冒険者だった。

つまりオーガ長がそれくらい力量を持っていなければ、最悪の場合、アルデニクスには一切の攻撃が通用しないなんてことも有り得るのだ。そしてこの「現象」はつまり、多くは語らないが、そういうことなのである！

「そんな馬鹿な……我が秘術が、脆弱な小鬼如きに……」

そうこう言っている間に、アルデニクスはオーガ長に飛びかかり、手に持つ何の変哲もない「ゴルダナルソード」で、オーガ長の頭をゴチンつと叩いた。

これまで受けたこともない強烈な衝撃を受け、オーガ長はあっさり気絶した。

*

*

「シュココオ……シュココオ……」

こちらアルデニクス　こちらアルデニクスゴブ〜

侵入者の無力化に成功したゴブ〜　繰り返し返す〜　侵入者の無力化に成功したゴブ〜　次の判断を仰ぐゴブ〜」

『ジゴ……ジゴジゴ……ジゴ……』

こちら「賢学者議会」ゴブ〜

侵入者は「法典」従い　『アレ』の試験に用いることに決定したゴブ〜　闘技場に連れて帰ってくるゴブ〜』

「シユコオ……シユコオ……」

了解したゴブ〜」

通信を切り、アルデニクスは気絶したオーガ長を見た。

遂にこの時が来てしまった。あれを再現した「兵器」が、遂に起動する時が来てしまった。願わくば、ずっと待機状態であるのが最善だったが、カレの中を流れる忌まわしき血と知識が、それを許さなかったようだ。

「シユコオ……シユコオ……」

ハア……まったく因果なものゴブ……」

そしてアルデニクスは再びオーガ長を見た。 //連れて帰ってくる
“ ってどうやって!?”

*

*

オーガ長が目を覚ました時、そこは暗闇に包まれる大広間だった。どうやら四方を壁で囲まれているらしい。鋼鉄で出来た広間。夜目がきくオーガ長だからこそ、それが分かった。

鉄と油の匂いがある。歯車が回る音がする。何かが蠢く気配がある。
手を弄ると、すぐ近くにオーガ長の戦斧があつた。虚ろな思考でそれを掴む。激痛で目が眩む。頭を押さえつつオーガ長は立ち上がった。

「グツ……ガア……こ、ここは……?」

返答は言葉ではなく強烈な“光”だった。

ガンガンガンつと照明が灯る。照らし出された場所にいたのは、あの奇つ怪な姿をした小鬼たち。観客席と思われる場所に、うじゃうじゃといる。

みなを代表して「剣闘マスク」を被った剣闘ゴブリンが進み出て、高らかに宣言した。

「シユコオ……シユコオ……」

これより それより 決闘の開始ゴブ!

オーガ長さん！ オマエさんは 十四の罪に問われ、そして厳正な審判の結果、有罪となった！

主な罪状は「侵入罪」「暴行罪」「侮辱罪」でゴブ！

本来であれば、オシオキ二十八日の刑に処されるところゴブが、侵入者であるオーガ長さんには、特別な刑が用意してあるゴブ！ ずばりは「決闘刑」でゴブ！

「な、なにを……なにを言っているのだ？ ここは何処だ!？」

オーガ長の質問に、剣闘ゴブリンは律儀に答えた。

「ここは、我らが彼らが、ゴルデイオン闘技場でゴブ！

ゴルダナルにしようと思ったのに、スペルを間違えてそうなった場所ゴブ！」

ええーそれは言わないお約束だったのにー!? 何処かのゴブリンが、そう悲鳴をあげる。

「シユココオ……シユココオ……」

オーガ長さんにはこれから、ここで我らが「新兵器」の性能テストに、付き合ってもらおうゴブ！

見事、勝利することができたならば、お家に帰してあげるゴブ！

もし勝てなかったら、勝てるまで頑張るゴブ！」

ノリノリでそう宣言する剣闘ゴブリン。矮小な小鬼どもにそんなことを言われ、オーガ長は激怒しそうになったが、なんとか堪え、冷静さを保った。

コイツらは偶然であったとしても、オーガ長の攻撃を尽く防ぎ、一撃で意識を奪ったゴブリンどもだ。見下すことはあれど、侮ることはしてはいけない。動物的本能から、オーガ長はそう判断した。

「イイだろう！ 我は「魔神王」に連なりしオーガの長！ 人を喰らい、人を糧とする不滅の化物！ オーガの中のオーガ！ 我に挑むと言うのなら、その証を示して見せろツ!!」

なんとという痺れる口上だろうか。こんなにカッコいい前口上を、ゴブリンたちは聞いたことがなかった。後々の参考にするために、書記ゴブリンたちはオーガ長の台詞を一言一句あますことなく記録する。ゴブリンたちの熱狂は最高潮に達していた。

「シユコオ……シユコオ……」

それでは 決闘開始でゴブ！ ポチツとな」

剣闘ゴブリンがスイッチを押すと、何処からか大音量のBGMが流れてきて、高らかにゴブリンたちが歌い出す。

理性という平和を探し求める 平和なき時代のゴブリンたち

信じ続ける理由 眠れる獣を目覚めさせる！

歌に合わせるように対面の扉がせり上がり、奥から「ヒトの形をした機械」がガシヤンガシヤンと歩いてくる。人型防衛兵器「パンツァードール」。試作機「ファウスト」のご登場である。

ファウストの登場に、観客ゴブリンたちは盛りに盛り上がった。キヤーファウスト先生こっち向いて！ かましたれ先生！ 負けるな先生！ やつたれ先生！

当然、ファウストはただの兵器なので、ゴブリンたちの歓声に答えるはずもなく、ただ静かに沈黙し、佇むのみである。

オーガ長は相対した「兵器」を注意深く観察した。

全身を緑色の装甲で覆われ、右腕には螺旋状の槍を持っている。後ろの首元には塔のような突起物があり、その下には尻尾のようなものが生えていた。造形はヒトの形に近い。頭身はオーガ長の半分にも満たないだろうか。見たところジツと静止し、動き出す気配はない。まるで「かかってこい」つと待ち構えているようだった。

この運命を手放せ お前は夢幻に囚われた

夢の中で足踏み続け 前に進む気配もなく 後ろに戻る気配もない

ゴブリンたちの耳障りな歌が、オーガ長の鼓膜を震わす。異様な雰囲気におーガ長は僅かに尻込みした。かいたこともない汗が、額から流れ落ちる。ゴブリンたちの歌はまだ続いていた。

そう 我らが仕える「騒がしき世」がバネの如く張る

一步後退！

カツと目を見開き、オーガ長は決意した。

一撃だ！ 最初の一撃に全てを懸ける！ 一つの太刀！ 全身全霊を籠めた一撃で、彼の者を粉碎する！

「カリ^火ブ^石ンクルス……クレ^成スクント……」

真に力のある言葉を紡ぎ、オーガ長は現実を捻じ曲げる。

「マ^最ークシ^大ムス……オ^付ツフ^与エー^与ロツ!!」

オーガ長の唱えた業火の炎が、戦斧へと宿る。もはや地獄の火炎と言つても過言ではない魔力の奔流が、オーガ長の戦斧を紅く閃光させた。

二歩 二歩 二歩

大上段に構え、そして……。

一 二 三!

「ウオオオオオオオオオオツツツツ!!」

刹那の間に、オーガ長はファウストとの距離を詰めた。狙いすまし、燃え盛る大戦斧を力任せに振り下ろす。気合一闪。繰り出された一撃は、生涯最大最強にして最期の一撃! 最大最強にして最期の一撃ツツ!!

念のためにもう一度言おう! 生涯最大最強にして最期の一撃ツツツツツツ!!

「敵性存在ヲ感知シマシタ 対象ヲ排除シマス」

感知範囲に侵入した標的を、ファウストは決して許しはしない。

決着は一瞬だった。

そうつまりは、オーガ長はその一撃を繰り出した瞬間、呆気なくファウストによって穿たれてしまったのだ。

我らの世界は——あつ! あつ! あつ! あつ!

歌が止まり、四方八方の観客ゴ布林から、そんな声が漏れ出る。あまりの出来事にゴ布林たちは叫んだ。

あああああああああああああああああああああああああ!?

おそらくオーガ長は、負けたことも、死んだことも認識できなかつたのだろう。鬼の如き形相のまま息絶えるオーガ長。まさかまさかの瞬殺であった。胴体部分には大きな孔が穿たれ、上半身と下半身がお別れしそうになっている。決闘はもう終わってしまったので、当然、BGMも止まってしまっていた。

死んでしまったオーガ長に、ゴ布林たちは嘆いた。そりやあもう

とてとて嘆いた。

なぜそんなにも嘆いたのかって……まだ、歌はサビまでいってなかったのだ。まだホンの触り程度だったのだ。なのに、もう終わってしまった。これからが盛り上がりるところだったというのに。せっかく十分を超える大作を作ったというのに……ゴ布林たちは激しく嘆いた。

ゴ布林たちが悲しみにくれる中、一仕事終えたファウストは、再び開始位置に戻り、静かに待機していた。流石、生粋の仕事人である。

斯くして「混沌オの尖兵ガ」はゴ布林たちの前に倒れ、ゴルダナル大森林のゴ布林たちは、「混沌」に与しない「秩序の中の混沌」として、少しづつ、少しづつだが、「祈らぬ者」たちに認識されていくのであった。

喋るサカナと喋るゴブリン

オーガ長の襲撃以降、ゴルダナルのゴブリンたちはちよいちよい「混沌の軍勢」の攻撃を受けるようになっていた。

その尽くを返り討ちにしてみせるゴブリンたち。遂に起動した「機工兵器」たちは八面六臂の活躍で、果てしなく広がる大森林と長く険しい山脈による天然要塞は、リトルシャイアを難攻不落の都としていたのだ。

念願だった平和を手にしたゴブリンたち。みな思い思いのまま好きな仕事をし、大好きな趣味に没頭した。世は正に太平の時代なのである！

釣り師である「フィッシュチックス」も、今日も今日とてお気に入り穴場スポットで、大好きな釣りに興じていた。

ゆっくりのほほんどと流れる時間。何か釣れればとつてもハッピー。なんにも釣れなくても、まあいいじゃないかそこそこハッピー。ゴブリンの中には何かと効率重視なゴブリンもいるけれど、フィッシュチックスはそうじゃなかったし、そんなゴブリンもそこそこ多かった。

流れ行くせせらぎをボケエーつと見つめるフィッシュチックス。あらあら今日の釣果はお生憎さまの「ボウズ」のよう。まあそれもいいじゃないかご愛嬌。こんな日にこそステキなことがあるもんさ。

そんなことを思っていたからか、フィッシュチックスの釣り竿にピクピクと反応があつた。

「シユココココ!?」

遂にきたゴブ? きちやつたゴブ!?

グイグイと引つ張られる釣り竿。ゴブリン製の超高性能ゴブリンフィッシングロッドが大きくしなる。これまでになく大きな手応え。これはもしかしてひよつとして、きちやつたかも!?

思わずフィッシュチックスは立ち上がり、グイッと釣り竿を引つ張つた。

「シユココココ!」

このアタリ この手応え 間違いないゴブ！ 「ヌシ」ゴブ！ 遂に来たんだゴブ！」

釣りゴブリンになって幾星霜。実際にどれだけ経ったのかは忘れちゃったけど、それなりに長かったことだけは確かだ。その釣りゴブ生の中でも随一のアタリ。これは間違いなく「ヌシ」が食い付いた感じだった。

フィツシユチツクスはロッドを引き引き、リールを巻き巻き……時に大きく、時に優しく、引いて緩めてまた引っ張って、前へ後ろへ闘いを繰り広げる。

よほど立派な「ヌシ」なのだろう。フィツシユチツクスの巧みな釣り技術にも関わらず、相手はビクともしない。かなりの大物なのは疑いようもなかった。フィツシユチツクスのそれなりに長い経験からして、捉えた「獲物」は「人間並」のビッグサイズに違いない。

「シユココオ……シユココオ……」

中々に手強い相手ゴブ……でもでも フィツシユチツクスだって負けてないゴブ！」

いかに「獲物」が強敵であろうとも、フィツシユチツクスだって百戦錬磨の古強釣り師だ。カレに釣り上げられない「獲物」はいないし、退いてやる気もこれっぽっちもなかった。

しかし相手も相手でヌシ的な意地があるようで、いかなフィツシユチツクスでも長期戦を強いられた。攻めて守って引いて緩めて。気付けば相当な時間が流れ、もはや友情すら感じられるようになってきた頃——遂に決着の時間が訪れた！

「シユココココ！」

今だゴブ！ フィィィィィッシユツツツ!!」

渾身の力を振り絞り、フィツシユチツクスは遂に「ヌシ」を釣り上げた。バシャーンと水音を立てて陸上げさせられる「ヌシ」。フィツシユチツクスは、その「強敵と書いて友」とも呼ぶべき釣果をマジマジと見つめた。

それは、とつても珍しいサカナだった。

鱗はなく、尾ヒレも背ヒレも付いていない。胴体部分からは「手」と

「足」のようなものが伸びていて、頭部には「毛」のようなものが生えていた。サカナのクセに「鎧」のようなものまで着ていて、たいそう立派な「剣」も持っている。まるでサカナというよりも「ニンゲン」みたいだった。

「シユコオ……シユコオ……」

これまた とてとて珍しいサカナゴブ〜 こんなサカナ初めて見たゴブ〜

これまた 煮ても焼いても うまそうじゃないサカナゴブ〜

フィツシユチックスは釣り上げた「ヌシ」を見て、そんな感想を抱いた。とりあえず、釣り上げた証として「魚拓」を取ろうとしたら、釣り上げた「獲物」がピクピク震え、更にはうめき声まであげたではないか！

「う……ううう、ん……」

フィツシユチックスはびつくらこいて一歩飛び退いた。コイツ喋ったゴブ！ 喋るサカナゴブ！

まさに未知との遭遇。まさか喋るサカナを釣り上げてしまうとは、なんとということか！ フィツシユチックスは自分の才能が恐ろしくなった。まさか喋るサカナを釣り上げてしまうだなんて、前代未聞の偉業であった！

これでフィツシユチックスの「名」は、栄光あるゴ布林族の歴史の中でも燦々と輝く偉ゴ布林として、未来永劫語り継がれることにウンヌンカンヌン――。

「うううん……あ、あれ？ ここは？」

そうこうしていると、そんなことを呟き始めた喋るサカナ。顔を上げ、辺りを見渡す。これはイカン！ せっかく釣り上げたサカナに、逃げられてしまっはかなわぬ。陸を走るサカナなんて聞いたこともないが、手と足みたいのが生えてることだし、そんなことも仕出かすかもしれない。何せ相手は「ヌシ」なのだ。あり得ない話じゃない。

「んん？ あれ？ あなたはヘブシツ!？」

瞬間、脳天を直撃する「ゴ布林ハンマー」。喋るサカナは再び目を

回し、大きなタンコブを作ってもう一度ぶつ倒れる。ふう、危なかった危なかった。危うく取り逃がすところだったゴブ。

さあこれでひとまず一安心。あとは魚拓を取って、凶鑑に残して……そうだ！ せっかくだからリトルシヤイアのみんなにも見せてあげよう！ こんなニンゲンみたいな喋るサカナ、きつとビックリするに決まってるゴブ！

「シユココオ……シユココオ……」

そうと決まれば 早速取りかかるゴブ、ゴブゴブブーン」

そんなわけでフィツシユチツクスは喋るサカナを「えいや」つと担ぎ上げると、みなに見せびらかすためにリトルシヤイアへ急いだ。そばに落ちていた、それはもう見事な大剣もモチロン忘れずに……。

*

*

フィツシユチツクスが喋るサカナを持ち帰ると、リトルシヤイアはちよつとした騒動になった。なにになんなの何を釣り上げたの？ うわまるでニンゲンみたいなサカナゴブ！ ちよつと なんてモノ釣って来ちゃったのよ!? スゲーマジでニンゲンそっくりゴブ！

ザワザワと騒乱に包まれるリトルシヤイア。フィツシユチツクスは一躍時のゴ布林。ワイワイゴブゴブとみんな集まってきた、喋る奇妙なサカナに夢中になった。

はああん……それにしても見れば見るほどニンゲンそっくりな喋るサカナゴブね。

しかし、みんなでワイワイ盛り上がっている時、とあるゴ布林がとある勘違いに気が付いた。ありやいやこれはもしかして……とあるゴ布林がみんなの前でその勘違いを披露する。

「シユココオ……シユココオ……」

みんなみんな 勘違いしてるゴブ

喋るサカナと言うけれど ゴブたちコイツが喋ってること 見たことないゴブ！

だから コイツは「喋るサカナ」じゃなくて 「喋らないサカナ」ゴブ！」

えっ？ えっ？ あっ！ 確かに言われてみれば、そうだそうだその通り。コイツさつきから喋ってないし、喋る気配もない。ならばコイツは「喋るサカナ」じゃなくて「喋らないサカナ」ゴブ！ これは危ない危ない騙されるとこだった。

なんという思い違いをしていたのだろう。しかし、ゴ布林たちがそう思いかけた瞬間、なんとビツクリ喋らないサカナが「う……うう、ん」と喋ったではないか！

アツコイツやっぱり「喋るサカナ」ゴブ！ 「喋らないサカナ」は「喋るサカナ」だったゴブ！ うわあ、なんという驚きの大発見！ よもや「喋るサカナ」が実在していたなんて、前代未聞のビツクリ仰天！

そんな世紀の大発見である「喋るサカナ」を、見事釣り上げたのフィツシュチックスは、みんなに「スゲースゲー」と讃えられ褒めちぎられる。その隙について、何事も研究熱心なマッドマツデイクスが「喋るサカナ」に近づいてみると、如何にして「喋るサカナ」が喋っているのかを調べようとした。

「ううう……うーん……」

なるほどなるほど、確かに確かに空耳じゃなくて、バツチリしつかり喋っている。エラ呼吸じゃなくて肺呼吸。胴体からは「手足」が生えていて、頭部にも「毛」が生えていた。まるでニンゲンのように「鎧」を着て、これはもしかしてこのサカナの「鱗」かなにかかな？

なんともなんとも摩訶不思議な「喋るサカナ」……喋るサカナ、喋るサカナ、喋るサカナ……うん？ 喋る……サカナ？

「シユコオ……シユコオ……」

コ コイツ ま まさか!?

それは、人体にとつても詳しいマッドマツデイクスだからこそ、気づけた事なのかもしれない。コイツはもしかしてひよつとすると、ほんとは「喋るサカナ」じゃなくて……。

「ううううん？ あれ？ 大きな目に、大きな鼻……はっ！

ひよつとして宇宙じデブシヤ!」

瞬間、脳天を直撃する「ゴ布林ハンマー」。喋るサカナ(仮)は三度みたび目を回し、大きなタンコブを二つも作ってぶっ倒れる。

思わずぶっ叩いてしまったマッドマツデイクスは、衝撃のあまり叫んだ。

「ジユココオ……ジユココオ……」

コイツ 「喋るサカナ」じゃなくて 「喋るニンゲン」 ゴブ!!

喋るサカナは 喋るニンゲンだったゴブウウウ!!」

えええええ!? これはまさかまさかの新事実! 喋るニンゲンっぽいサカナは、ホントのところは喋るサカナじゃなくて、喋るニンゲンだったのだ! えええええ、そんなバナナ!

ついに判明してしまった真実に、ゴ布林たちは大恐慌に陥った。ギャーニンゲンゴブ! きつとマスクを取りに来たのよ! うわー逃げるマスクを取られるぞ! 警備兵を呼べー! きゃー助けてファウスト先生!

大混乱に包まれるリトルシヤイア。直ぐ様「賢学者議会」が招集され、あれやこれや、そうじゃないこうじゃないと話し合いが行われる。どうすんのよ ニンゲンなんて拾ってきて! そんなあ まさかニンゲンだとは思わなかったんだゴブ! でも よくよく見てみれば どつからどう見てもニンゲンじゃない! でもでも みんなも勘違いしてたゴブ! それは確かにその通り。

なんやかんや色々議論され、ああでもないこうでもない話し合われたが、結局決まったのは「穏便にお帰り願う」ということだった。相手はフィツシユチックスが拾ってきた、一見なんの変哲もない「ニンゲン」さん。現時点では「侵入者」であるか「迷い人」なのか判断が付かない。ならば、乱暴に扱うのは非文明的であると言えた。

とりあえずゴ布林たちは「喋るニンゲン」を「マッドマツデイクス研究所」に搬送すると、容態を見た。

「シユココオ……シユココオ……」

どうやら 頭部に「強い衝撃」を受けたようでゴブ

でも バイタルに問題はないゴブから そのうち目覚めるゴブ」

「強い衝撃」を与えた張本人のくせに、素知らぬマスクでマッドマツデイクスが言った。

さて、そうなれば「誰か」この「喋るニンゲン」にお帰り願うのかという話になる。なにせ相手は「あのニンゲン」さん。「混沌の軍勢」よりかはマシであるとはいえ、凶暴で野蛮な可能性は五分五分であった。ゴブゴブ、ゴ布林だけに、ゴブゴブ。

しかも「喋るニンゲン」はどうも「赤毛」のようで、過去のデータを参考にするに凶暴な可能性が飛躍的に高まった。ゴ布林たちの実体験では「赤毛のニンゲン」は凶暴で、「金髪のニンゲン」は温厚なのだ。サンプルが二種類しかないので一概には言えないが、ゴ布林たちには慎重な対応が迫られた。

「シユココオ……シユココオ……」

誰かが代表して 交渉するのがいいと思うゴブ！ 成人していて 知性が高く 経験豊富で 実力があり 頼りがいのあるゴ布林がいいと思うゴブ！

というわけで矢面に立つことになったのはアルデニクスである。拾い主であるフィツシユチツクスと共に、喋るニンゲンと対面する。

「う、ううくん……あ、あれ？ ここは？」

なんだか前にも同じようなことを言ったような？ そんなことを思いながら喋るニンゲンは目を覚ました。

ゴ布林たちに緊張が走る。空気が3℃くらい下がった気がしたが、観測によると気のせいだった。下がったのは2℃である。なんということでしよう。万が一の時に対処するため、対ニンゲン用の薬物なども準備させてあるが、どう転ぶかはゴ布林にも分からない。

「シユココオ……シユココオ……」

ようやくお目覚めゴブ！ ここはゴブたちの都「リトルシャイア」

オマエさんは フィツシユチツクスリバーで川流れしていた時
フィツシユチツクスにフィツシユユされ 釣り上げられたんだゴブ！

「……ううう、んん？ ええつと？」

唐突にそんなこと言われても……そう疑問符を浮かべるニンゲン。
フィツシユチツクスがフィツシユチツクスでフィツシユチツクスが

どうしたって？さてさて対するアルデニクスたちは、そんな様子を見せるニンゲンにホッと一息ついていた。

「喋るニンゲン」さんは、初手でいきなり斬りかかってこないところからして、そこそこ温厚なタイプのニンゲンのようだ。とはいえまだまだ安心できない。アルデニクスたちはさらなるコミュニケーションを試みるため、会話を続ける。

まず切り出したのはフィツシユチツクスだ。

「シユコオ……シユコオ……」

オマエさん このフィツシユチツクスが釣り上げたんだゴブ〜

それはそれは とてとて大変だったゴブ〜

そのままリリースするのは勿体なかったから 持って帰ってきたんだゴブ〜

フィツシユチツクスの発言にアルデニクスが「えっ?! そうだったの?」と振り返える。それにフィツシユチツクスが「任せる!」といったマスク顔をした。アルデニクスが頷く。しかし、フィツシユチツクスはノリでそうしただけで、実はまったくのノープランだった。

「そ、それはどうもありがとう? ああつとキミたちは……」

「ゴブはフィツシユチツクス! そしてこっちのカレは アルデニクスゴブ!」

「どうも はじめまして こんにちはゴブ」

「え、あ、うん、どうもはじめまして……えっと、ボクは見習い冒険者です」

そう自己紹介をする見習い冒険者。胸部はぺったんこだが、マッドマッデイクスの診断によればニンゲンの「メス」らしかった。前の赤毛と同じタイプである。でもでも金髪のヒトとも同じタイプだったので、見習い冒険者の危険性に変化はなかった。

「シユコオ……シユコオ……」

それにしてもオマエさん どうしてこうして 川流れなんかしていた?

趣味ゴブか? それとも噂に聞く「カツパ」ゴブか? 教えてみるみる」

アルデニクスがそう尋ねる。注意深く観察し、返答を待った。回答によつては、いつでも動き出せるよう身構える。なんだかイヤな予感がするゴブ。緊張の一瞬だった。

見習い冒険者が「うんうん」つと頭を捻ると、記憶を思い出しながら答える。

「ええつと、確か……ゴブリンの親玉つぱいのを追いかけてた時に、うっかり道に迷っちゃってね。なんとかその親玉は倒したんだけど、帰る途中、「変な人形」みたいのに遭遇しちゃって、それで戦闘になつたんだけど、そいつがそれはもうトンデモなく強くつてさ……んで、その戦闘中にうっかり足を踏み外しちゃって、そのとき頭を打って川に落つこちっちゃつたみたい……あつ！ 二人とも、助けてくれてありがとうね！」

そう見習い冒険者は頭を擦りながら言った。そして「ボクだつて単独で依頼達成くらいできるんだつて豪語しちゃつたけど、失敗しちゃつたなあ……とブツブツ呟く。頭にはそれはもう大きなタンコブが二つもできていて、コイツのせいで気絶してしまったのは、間違いないようだった。

すつごいデカイタンコブになつてる——そんなことを見習い冒険者が呑気に思つていた時、居合わせていたゴ布林たちには戦慄が走つていた。

アルデニクスたちは動揺を悟られないよう冷静なマスク顔を演出したが、果たして効果はあつたかどうか……アルデニクスは直ぐ様バックにいるゴ布林たちに指示を出し、「パンツァードール」たちに何か異常がないかどうか確認させる。

するとなんとということだろうか！ 山間部に配置されていた「ファウスト」の一体が、ボロボロになつて半壊しているではないか！ その事実にはゴ布林たちは大慌て。直ぐさま新たな「ファウスト」が派遣されたが、当番だつた警備ゴ布林はオシオキ一七日の刑に処された。

「シユコオ……シユコオ……」

よもやファウストと戦つて生き残るとは トンデモナイヤツゴブ

「この見習い冒険者さん ヤベーヤツゴブ」
「そうボソボソとアルデニクスは呟いた。」

「シュココオ……シュココオ……」

「こんなヤベーヤツを釣り上げてしまうだなんて 自分の才能が怖いゴブ」

「フィツシュチュックスはお気楽にもそんなことを言ってみせた。」

「そんなフィツシュチュックスを、アルデニクスはポコンッと叩く。まったくの偶然だったとはいえ、そんなヤベーニンゲンさんを勘違いでリトルシャイアにつれてきちゃったのは、他でもないフィツシュチュックスなのだ。少しは反省しなさいっとアルデニクスはツッコむ。」

「さてさてこの見習い冒険者は、どうにも「ファウスト」と戦闘して川に落っこちたらしい。そうであるならば、いちおう「侵入者」として分類されるが、見た感じ「敵意」も「害意」もないようなので、手荒なマネはご法度であった。ゴ布林たちはお互いのマスクを見合わせて頷く。」

「シュココオ……シュココオ……」

「それにしても とてとて面倒くさいことになったゴブ」

「フィツシュチュックス トンデモナイヒト 釣り上げちゃったなゴブ」

「でもでも あのままほっとくわけにもいかなかったゴブ！ 仕方がなかったんだゴブ！」

「確かに確かに 起きてしまったコトは このさい仕方がないゴブ」

「幸い 暴れだす様子もないゴブし このまま丁重にお帰り願うゴブ」

「でもでも しかして どうやって?」

「そうコソコソ相談するアルデニクスたちが気になったのか、好奇心旺盛な見習い冒険者がずっと割り込んできた。」

「ねーねー? なんの話してるの?」

「シュココココー!」

「べ 別に なんでもないゴブよ!」

「別に オマエさんにさっさとお帰り願う相談なんて してないゴブ」

「ブよ！」

「あつ……」

アルデニクスがフィツシュチックスを見つめる。フィツシュチックスもアルデニクスを見つめた。見習い冒険者はその様子を気まずい感じで見ていた。

「シユココオ……シユココオ……」

フィツシュチックス それ言ってしまったのは 元も子もないゴブ 穩便にお帰り願いたいヒトの前で お帰り願う相談してるって言うのは なんやかんやお帰りいただけにないフラグゴブ！」

「シユココココ！」

しまった あらま やつちまったゴブ！

見習い冒険者さん 後生だから 今のは聞かなかったことにしてほしいゴブ！」

「えっ……と、そう言われても、ねえ……」

流し目になり頬をかく見習い冒険者。見ちゃいけないものを見てしまった気分だが、どうやらあまり歓迎されてないということだけは分かった。

でも、なんというんだろうこの感じ……上手く言えないが彼らの様子を見てみると、なんだかこう——不思議とイジメなくなるね！ キラーンと目を輝かせて見習い冒険者は思った。

「うーん……別に聞かなかったことにしてあげてもいいけど、どうしようかなあ。ボクは別にどっちでもいいんだけど、どうしてもって言うなら、考えてあげなくもないかなあ」

勿体ぶってやや演技過剰になりつつも、見習い冒険者はそう言う。もちろん、チラチラと反応を伺うのも忘れない。

ゴブリンたちはビクウつとなると、見習い冒険者から距離をとってヒソヒソと相談を始めた。オイオイヤベーよどうするよ。どうするたってどうするゴブ……それがなんだか子供たちの井戸端会議を見ているようで、見習い冒険者はつい吹き出してしまった。

「プツ……冗談だよ冗談！ 別に聞かなかったことにするくらい、そんなに慌てなくても全然やるよ」

「シュココオ……シュココオ……」

本当ゴブか？ 本当に嘘ついてないゴブか？

偽証罪 とてとて重い「罪」ゴブよ。ウソだったらオシオキ一二日の刑ゴブよ。」

「うんうん、ついてないついてない……ボクは何も聞きませんでした！ キミたちがボクに『お帰り願う相談』をしてるだなんて、一言も聞いておりません！」

両手で耳を塞いで、見習い冒険者はそう言った。

「シュココオ……シュココオ……」

ああ良かったゴブ！ これで一安心ゴブね！

ささアルデニクス 話の続きを進めるでゴブ！」

「あ。なんかもう これでいいのかって感じゴブ。」

アルデニクスはちよつぴり悲しくなった。それでもここで立ち止まっては話が進まないの、アルデニクスはレンズを拭いて前進することにした。

「……んで 見習い冒険者さん なに見てるゴブ？」

「いや、聞かなかったことにする」とは言ったけど、『見なかったこととする』とは言っていないあつて……」

「シュコココココ！」

だからって ジロジロ見るのはダメゴブ。ダメダメなんだゴブ。」

「えー、でも「聞かなかったことにしてほしいゴブ」とは言われたけど、見ちゃダメなんて言われてないもん！」

「シュコココココ！」

確かにその通りおっしゃる通り でもでも それは屁理屈つてやつゴブ。」

見習い冒険者さん 屁理屈さんゴブ！ 屁理屈さんは嫌われるゴブ！」

ゴ布林たちはプンスカプンスカ。その反応がいちいちコミカルで、見習い冒険者の嗜虐心をますます刺激した。

「分かった、分かったよ。今度は聞きも見もしません！ キミたちに

嫌われたくないしね！」

今度は目も耳も閉じてそう言う。ようやく見習い冒険者が引っ込んだことを認めると、ゴ布林たちは再び相談を始めた。ゴブゴブゴフゴ、ああでもないこうでもない。

しかし、幾ばくもしない内に、見習い冒険者からコソツと横槍が入った。

「ねえ、もしかしてキミたちってさ……ゴ布林だったりする？」

サーツと冷や汗が流れるのをアルデニクスは感じた。フィツシユチックスが何か言おうとしている。オイバカ止めろ。

「シユココオ……シユココオ……」

ど どうして……そう……思ったゴブ？」

「どうしてって……さっきからずつと「ゴブゴブ」言ってるし、もしかするとゴ布林なのかなあ？ って」

ガガン！ ゴ布林たちは予想だにしていなかった発言に慌てふためいた。よもや語尾の「ゴブ」と「ゴ布林」を結びつけるだなんて、コヤツ天才かつ！

ゴ布林たちは「赤毛のニンゲン」を研究したことによって、人体構造など様々なことを知ったのだが、何より多く学んだのは、「人間はゴ布林のことが嫌い」ということだった。

なのでニンゲンと接触する時は、極力ゴ布林であることを明かさなないように細心の注意を払っていたというのに、まさか語尾からバレるだなんて、全くの盲点である。

「ねえ、ねえ、どうなの？ キミたちって、ゴ布林なの？ それとも違うの？」

「シユココオ……シユココオ……」

もしゴ布林なら どうする気ゴブ？」

アルデニクスは訊いた。口調は淡々としていたが、事の次第によっては最悪刺し違える覚悟すらあった。ニンゲンがゴ布林だと分かかって取る行動は、大凡予想される限りでは碌なもんじゃないからだ。

「んっ？ 別にどうもしないよ。だって、キミたちは「良いゴ布林」

じやん。「悪いゴブリン」なら倒すけど、キミたちはそうじゃないでしょう?」

特に根拠はない。なんとなくそう感じたのだ。ただこういった勘は、見習い冒険者は良く当たった。

「それにしてもボク、「喋るゴブリン」なんて初めて見たよ。みんな「喋るゴブリンは危険だ!」って言うってたけど、やっぱり噂はアテにならないんだね。キミたちには邪悪さの欠片も感じないもの」

「シユココオ……シユココオ……」

じゃあ ゴブたちをイジメたり 斬りつけたり マスクを取ったりしないゴブか?」

「うんうん、しないしない。というかそんな酷いことした人がいたの?」

ゴブリンたちはその返答を以って、見習い冒険者を「温厚なタイプのニンゲン」であると認定した。見習い冒険者は赤毛であるが、金髪の女治癒士と同じタイプである! そうなりや洗いざらい話してさつさとお帰り願おう!

「シユココオ……シユココオ……」

分かった 分かった 決まりゴブ

見習い冒険者さん「良い人」ゴブ 女治癒士さんと一緒ゴブ

ここは ゴルダナル大森林の「リトルシャイア」ゴブ

我らは彼らは そこに住む「文化ゴブリン」ゴブ

オマエさんは今回 ゴブたちの防衛兵器に捕まって ボコボコに

されたんだゴブ

「ふんふん……って、えっ!? 防衛兵器?もしかして「あの人形」って、キミたちのだったの!?!」

見習い冒険者の驚きの顔。

「その通りゴブ その節はそれはそれは 大変申し訳なかつたんだゴブ

お詫びに ゴブたちにできることなら 一つだけ お願い聞いてあげるゴブ

だからだからそのかわり ゴブたちのお願いも一つ 聞いて欲し

いんだゴブ〜」

「ここぞとばかりにアルデニクスはそう言った。

「それは、別にいいけど……何を願っていたいの?」

見習い冒険者の了承に、アルデニクスは一瞬言葉を置いて続けた。

「シユコオ……シユコオ……」

ゴブたち 静かに暮らしたいんだゴブ〜 平和に過ごしたいんだゴブ〜

無闇な争いはご遠慮したいんだゴブ〜

だから見習い冒険者さん 森を出て 森を出たら ゴブたちのことは黙って欲しいんだゴブ〜」

見習い冒険者はう〜んつと考えた。「それってお願い二つない?」なんて空気の読めないことは言えない。対するアルデニクスたちゴブリンも、言い淀む見習い冒険者を見て思った。やっぱり見習い冒険者さんは「悪いヒト」だったゴブか!?

しばらく沈黙が続き、ややあってから見習い冒険者が口を開いた。ドキドキの瞬間である。

「もちろん良いよ!」

あつけらかんと言いつ見習い冒険者。

フウ……おそろくきつと、その瞬間はリトルシヤイア中のゴブリンがホつと一息ついた瞬間に違いない。しかし、気を抜くなかれ、見習い冒険者の言葉はまだ続いていたのだ。

「でもその代わり——ボクに「キミたちの人形」と戦わせてくれないかな?」

*

*

ゴルデイオン闘技場では、ひしめくゴブリンたちが盛りりに盛り上がっていた。

こんなに盛り上がっているのは「オーガ長」の時以来である。とうかこの闘技場が使われたこと自体が、オーガ長以来であった。

今回も今回で「剣闘マスク」を被った「剣闘ゴブリン」が、みんな

を代表して進み出て、アナウンスする。

「シユゴオ……シユゴオ……」

見るとイイ 聞くとイイ 騒がしいゴ布林たちよ！ 暇を持って余したゴ布林たちよ！

遂に今日とて 決闘の幕開けでゴブ！」

わあああつと歓声をあげるゴ布林たち。久々の決闘にゴ布林たちは湧きに湧いた。剣闘ゴ布林がアナウンスを続ける。

「本日決闘をするのは ご存知 我らが門番「ファウスト」先生ツ!! 数多の侵入者を ちぎっては投げちぎっては投げ 我らがゴブリンの発展に 大いに貢献してくれたゴブ！」

今回はオーガ長の時とは違い、ファウストは既に開始位置でスタンバイしていた。ファウストに向けて、ゴ布林たちの黄色い声援が注がれる。キヤーファウスト先生頑張つて！

「シユゴオ……シユゴオ……」

対する挑戦者は この度フィツシュチックスに釣り上げられたニンゲンさん！

通称「喋るサカナ」 見習い冒険者アアアアアア!!」

バアンつと見習い冒険者にスポットライトが当てられると、彼女に對してもゴ布林たちは惜しみない声援を与えた。やいのやいのやいのやいの。中には野次らしきものも混じっていたが、まあまあそれはご愛嬌。アウエーにしては概ね好印象な声援ばかりである。

なんとも大掛かりな仕掛けに、見習い冒険者は胸を高鳴らせた。

「うん！ すっごいワクワクするね！」

それにしても、この見習い冒険者。この雰囲気には飲まれないとは、見習いのクセにかなり肝が座っているのである。ゴ布林たちはみなスゲーつと関心した。

しかしそれもそのはずである。なぜなら見習い冒険者は、ずっとこんなシチュエーションを密かに望んでいたのだ。それはもう結構シリアスな感じにである。

周りは目を覆うばかりの敵だらけ。味方はなく、孤立無援の状態で、相対するのは勝てるかどうかも分からない比類なき強敵——そんな

なギリギリの「冒険」を、見習い冒険者はずっと待ち焦がれていたのだ。

「でわでわ 決闘の開始ゴブ〜！ ミュージックスタート！」

冒険者になれば、それが成せると思っていた。でも直ぐにそれが間違いだと言付いた。

彼女はあまりにも、あまりにもあまりにも強すぎたのだ。

冒険者になってから、ずっと感じていた僅かな不満。一党を組んでいる幼馴染たちにも言えなかった確かな不足。どんなに難しいという依頼をこなしても、どんなに危険だと言われる迷宮に挑んでも、どんなに強いと言われる怪物と戦っても、「こんなものか」としか思わなかった。

理性という平和を探し求める 平和なき時代のゴブリンたち

信じ続ける理由 眠れる獣を目覚めさせる！

決して満たされることのなかった密かな欲求。ずっと憧れていた「冒険」は、念願だった「冒険者」は、こんなものだったのか。そんなはずはない、そんなことがあつていいはずがない。そう信じて冒険に出かけても、待ち受けているのはいつも落胆と失望だけだった。

見習い冒険者は運命に愛されていた。苦戦はなく、敗北もまた無い。それ故に満たされぬ想いはますます焦がれ、やがて遂には一時的に一党を離れるまでになる。

この運命を手放せ お前は夢幻に囚われた

夢の中で足踏み続け 前に進む気配もなく 後ろに戻る気配もない

ずっと一緒だった幼馴染たちとの別れ。不安と孤独の中で挑んだ初めての単独任務。それでも心のどこかでこう思っていた。「今回もまた一緒だろう」と。

そう思っていた矢先に出会った真の強敵、真の怪物、真の冒険。その一時はまるで甘美な蜜のように感じられ、満たされぬ想いを満たしてくれた。

でもまだ足りない。まだまだ全然足りてない！

そう 我らが仕える「騒がしき世」がバネの如く張る

一步後退！ 二歩 二歩 二歩 一 二 三！

一回目は中途半端なところで終わってしまった。バカなことに足を踏み外して、中断されてしまったのだ。だからまだまだ満たされていない。あれくらいじゃ全然足りない。むしろ、知ってしまったからこそ、その渴望は余計に膨れ上がった。

消されたすべてに依存するシステムに

お前は流され込んで落ちていく

ゴ布林たちの歌が聞こえる。「あの^{ファウスト}人形」は目の前にいた。ずっと焦がれていた「敵」が目の前にいた！

お前がこのシステムから抜け出すために戦うことは

お前がこの場所に戻ることを意味する

笑みを浮かべる。胸が高鳴り、頬が紅潮した。まるで恋をしているかのようだ、と柄にもなく思う。でも言われてみればそうなのかもしれない。まさか初恋の相手が人形で、しかもこれから決闘する相手だなんて思ってもいなかったが、まあ、そんな恋もありっちゃありだろう。そんな悲劇のヒロインつてのに、憧れてた時代もあった。

そう お前を最下位に落とすシステムに

またもや流され込んで落ちてゆく

「だから、これで滾らなくてどうするのさ!!」

音を置き去りにして見習い冒険者は駆けた。渾身の力で愛用の剣を振るう。駆け出しの時に偶然手にした曰く付きの一品だが、これほど手に馴染む剣はなかったし、これほど切れ味のある武器もなかった。

明日には時間が足りない！

始点に戻るためには圧倒的に足りない！

ドゴーン！ 剣戟で発生してはいけない轟音を立てて、ファウストを斬りつける。大抵の場合この一撃だけで全てが決着するのだが、ファウストは平然と受けきって、平然と反撃してきた。

それが何よりも嬉しかった。

「そうこなくっちゃ！」

二十二区画の走査完了！

一方向に断片アリ!

繰り返される一撃は何もかもが激烈。まともに喰らえば、いかな見習い冒険者でも必殺であろう。それが雨霰の如く注がれる。これが悪夢と言わずしてなんといいのか。その悪夢の中を、見習い冒険者は駆ける、駆ける、駆ける。

天体のノイズを発見!

精神錯乱の疑いナシ!

何度も潜り抜ける死線。ギリギリの攻防。情け容赦のない刺突を避け、僅かな隙を見出しファウストに一撃を加える。

クリティカルヒット
致命的な一撃ツ!!

しかしファウストはビクともしない。

「いまさらそれくらいじゃビクリしないよ!」ライトニングボルト 雷 撃 ツ!

詠唱破棄な上に異状なまでの威力で放たれる魔法。人形相手に電撃が有効であると判断したのか、しかし、見習い冒険者の攻撃はこれで終わりじゃなかった。

「まだまだあああツ!」ライトニングボルト 雷 撃!
ライトニングボルト 雷 撃!
ライトニングボルト 雷 撃!
ライトニングボルト 雷 撃!
「オオオオオツツツ!!」

怒涛の雷撃魔法六連発! 理不尽な攻撃の連続に、されどファウストは怯まない。不沈艦の如き勇猛さで、見習い冒険者に迫りくる。

「いいよ! そうだよ! そうなのだよツ!!」

思わず歓喜の声をあげる。

異常なまでのタフネス。クリティカルヒット 致命的な一撃と魔法の連発を前提とした、不屈なまでの耐久性。さらにそれらを大前提とした想像を絶する攻撃力。何もかもが規格外。常理から外れまくった異端児。『普通』とは違う、『おかしなモノ』。

エネルギーが徐々に浸透

我が存在との相乗効果

同じだ……。

滴る汗を舐め、見習い冒険者は正眼に構える。ファウストの刺突が彼女の頬を掠めた。全く息つく暇もありはしない。そうだというのに、見習い冒険者は決して笑みを崩さなかった。

呼吸が苦しい。心臓がバクバクする。筋肉ははち切れそうで、頭は割れそうだった。手に持つ「愛剣」が異様なまでに重い。それでも容赦なく繰り出される攻撃を紙一重で躲し、愛剣を振るって、見習い冒険者はこれまでにない充実感を得ていた。

不信の一時停止

シナプス伝達まで あと三秒 三 二 一 ……送信！

同じだ……この人形はボクと同じだ……。

異常、異端、異質、異形……何もかもが常理から外れた化物。この世界の法則システムの外にいるモノ。何もかもが常識外で、何もかももの“当たり前前”の外にいる真なる怪物。

“ボク”と同じ、“おかしなモノ”。

見習い冒険者と人形の戦闘は、恐ろしいまでに噛み合っていた。戦法が似ているとか、相性が良いとかいうレベルじゃない。存在レベルで……いや世界レベルで両者は噛み合っていた。

そう、つまりは「世界観」がとってもマッチしていたのだ。

言葉を交わさなくても、ともすれば剣を交えなくても、分かる。“この人形”は……いや、“この場所”はボクと同じ“存在”だ。歌うゴブリンたちも、戦いを見守るゴブリンたちも、声援を送るゴブリンたちも、みんなみんな。

それが見習い冒険者は嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

一人じやなかった。

楽しい

楽しい……

すごく楽しい……

私はいま、すごく楽しんでる！

「楽しいー」

生まれて初めて感じた感情を、見習い冒険者は素直に言った。

咆哮、疾走、そして——気付けば、立っていたのは見習い冒険者だけだった。

ゴブリンたちが大歓声をあげる。

荒々しく息を吐いて、見習い冒険者は辺りを見回した。彼女の足元

には崩れ落ちたファウストが沈黙している。

「勝つ……た？」

息も絶え絶えそう吐き出す。

「その通り！ その通り！ お見事ゴブ！ 見習い冒険者さん！ おおブラボー！ おおブラボー！」

ゴ布林たちはみんな立ち上がり、見習い冒険者の勝利を讃えた。すごいぞ！ スゴいぞ！ 見習い冒険者さん！ よもや最後まで戦いきるだなんて！ ゴブたちも最後までお歌が歌えて大満足ゴブ！

体を剣に預け、見習い冒険者はゴ布林たちの称賛に応える。ハハハ、勝った、勝ったぞ！

「さてさて 見習い冒険者さん！」

オマエさんは 見事「ファウスト門番」を倒し 挑戦権を得たゴブ！」

「……えっ？」

瞬間、見習い冒険者に一筋の汗が流れた。なんだかとってもイヤな予感がする。

「見事 挑戦権を勝ち取った見習い冒険者さんに みんな惜しみない拍手ゴブ！」

万雷の拍手が闘技場に響く。ゴ布林たちが口々に言う。すごいゴブ！ ヤバいゴブ！ トンデモナイゴブ！ 見習い冒険者さんヤベーニンゲンゴブ！ 次も頑張るゴブ！

アア、ナンダカモノスゴク嫌な予感がスル……。

「——そんなわけで お待たせしました 第二ラウンドゴブ！

起動せよ「オペレッサー」！ ポチツとな」

ガウイイイイイインンンン。

闘技場にある「門」が円を描き回転する。低く轟く起動音を鳴らし「門」が開く。はたしてそこから這い出て来たのは、ファウストよりも遥かに大きく、遥かに巨大な、対大型施設用無人兵器「オペレッサー」だった。

そうさつきまでの「ファウスト」はあくまでも「門番」で、「本番」はこれからだったのだ。

「は、はは……さすがに、これは、想定外……」

乾いた笑い声を漏らす。

体はボロボロ。足はガクガク。完全に満身創痍。そもそも万全の状態です勝てるかも分からない相手。敵はもはや巨人を越えて小さな城。それでも見習い冒険者の気力は今だ萎えず、戦意は挫けていなかった。

「ではでは 第二ラウンド開始ゴブ〜！」

始まりのゴングは必要ない。ゴ布林たちが再び歌い始めたと同時に、見習い冒険者はオプレッサーへと駆けていった。

* * *

「ちくしよー、あと少しだったんだけどなあ……」

愛用の大剣を杖のように突き、見習い冒険者はトボトボと田舎道を歩いていった。体中ボロボロで美しい赤髪もあつちこつちに跳ねている。

あのあと見習い冒険者は「オプレッサー」に敗北した。そりやあ見事に大敗した。文句の一つも出やしない完全敗北だった。

「良いところまでいったと思っただけ、まさか分身が出てくるなんてね……」

ホント、なんでもありかよ。そう見習い冒険者は呟く。

「でも、楽しかった……」

そう、楽しかった。負けたけど、ずっと楽しかった。

あれやこれや考えて、工夫して、頭を使って、体を使って、使えるものはなんでも使って、手持ちのカードを全部フル活用して、それでも勝てなかった戦いは、すっごく楽しかった。

今までの、ただ力任せにゴリ押しする戦いでは得られなかった不思議な快感。ずっと探し求めていた楽しさ。

見習い冒険者はすっかりその魅力に魅了されてしまっていた。

「帰ろう……帰って、もっと強くなろう……」

何者もボクには敵わない——そう勝手に思っていたボクはなんて鳥澁がましかったのだろう。世界は広い。世界は果てしない。冒険

は確かにある。あの森のゴブリンたちのように、ボクの知らない「未知」はこの世界にはまだまだある。

「思い切って一人で出てきて良かった……」

そうじゃなかったら、きつとこんなステキな出会いに巡り合うことは出来なかったであろう。なにかと口うるさい幼馴染たちと一緒に、きつとこんな「危険」は冒せなかっただろうから……。

「でも、今回のことで骨身に染みたよ。ボクは弱い。一人ぼっちじゃもつと弱い。だから——」

帰ったらいの一番に謝ろう。『勝手に出ていってごめんなさい』とちゃんと謝ろう。

謝って、そして今度は三人でゴブリンたちに会いに行こう。あの陽気で元気で能天気なカレらに、また会いに行こう。

「出ていってとも、黙ってても言われたけど、帰ってくるなどは言われなかったからね……あつ、でもそうすると、二人には言えないのか……」

まあ、いいさ。きつとカレらならそれくらい笑って許してくれるはず。二つあったお願いを、ボクはちゃんと聞いてあげたのだから、それくらいは許されるはずさ……一人家路を急ぎながら、見習い冒険者はそう思った。

人間のようなゴブリン

一人の冒険者が、街道を歩いている。

薄汚れた鉄兜に革鎧、手には円盾と短剣、腰に雑嚢を携えた、みすぼらしい冒険者だった。

冒険者の名は「ゴブリンスレイヤー」——その名の通り、ゴブリンを殺すことを生業とする冒険者である。

等級は「銀等級」——在野では最高位の等級であり、ゴブリンスレイヤーは、ゴブリン退治だけでその等級にまで上りつめた、ゴブリンジャンキーゴブリン狂いであった。

ゴブリンスレイヤーにとって「ゴブリン」こそが行動原理であり、存在理由だ。彼にはそれ以外に何も無く、それ以外に何も必要なかった。

今は「依頼」を終え「辺境の街」へ帰る途中だ。依頼内容は言うまでもなく「ゴブリン退治」であり、ゴブリンスレイヤーはいつものようにゴブリンを見つけ、戦い、そして殺した。

波乱は何もなかった。ゴブリンは馬鹿だが間抜けではない。ゴブリンスレイヤーは口癖のようにそう言うが、所詮ゴブリンは卑猥で知性の低い下等生物だ。ゴブリンを知り尽くした彼の敵ではなく、彼は尽くを見つけ出し、尽くを塵殺した。

油断や慢心など欠片も無い。たとえ代わり映えのない「仕事」だとしても、ゴブリンスレイヤーは坦々と仕事をこなし、坦々とゴブリン殺しをするのみである。

ゴブリンスレイヤーは「辺境の街」に着くと、早速冒険者ギルドに行き、受付嬢に依頼達成の報告をした。

「あ、お帰りなさいゴブリンスレイヤーさん。依頼の方はいかがでした？」

「ゴブリンを殺してきた。数は八。ホブやシャーマンなどの「渡り」はなし。依頼どおり極小規模な巣だった。増援もなし。これなら「駆け出し」でも問題はなかっただろう」

「ははは……そうだとでも「ゴブリン退治」は中々やり手がいま

から……」

ゴブリンスレイヤーの報告を聞き、淀みなく答えつつも、スラスラと書類に記入する受付嬢。

「……はい、特に問題はありませんね。他にになにか気になった点などはありませんでしたか？」

「気になったこと……」

顎に手を当て思案する。

受付嬢はその様子を上目遣いで伺うと、心の中で「珍しいこともあるものだ」と思った。

ゴブリンスレイヤーは、ことゴブリンに関しては「ド」が付くほど大真面目な男だ。依頼報告に関しても、彼女の「教育」の賜物か、言い淀むことは全くない。少なくとも、ゴブリンに関しては……。

そんな彼がなにか思案している。

なにか異変でもあったのだろうか？ ゴブリン退治のプロフェッショナルであるゴブリンスレイヤーの言葉は、存外、ギルドでは重要視される場合が多い。都では悪魔デーモンが出没し始めているという噂もあるし、万が一ということもある。楽観視することはできないだろう。受付嬢が握るペンに、自然と力が入る。

暫しの後、ゴブリンスレイヤーは静かに口を開いた。

「ゴブリンどもに変わりはなかった」

ホッと胸を撫で下ろす受付嬢。

「……だが、「奇妙な娘」に会った」

「奇妙な……「娘」ですか？」

さつきまでとは違う意味で受付嬢に緊張が走る。ライバルは少ないと思っていたが、もしかして、もしかするののか？

「そうだ、「娘」だ。依頼のあった村の教会にいる「修道女」だったのだが、村に行くとゴブリン退治に猛反対された」

「猛反対？ 急かされたのではなく？」

「ああ。まるでこの世の終わりのような様子で懇願してきた。お願い、あの子たちを殺さないで」とな……」

「珍しいこともあるものですね。「恨み」ならまだしも、まるでゴブリ

ンたちに「情」でもあるかのような言い方です」

「実際そのようだった。ギルドに依頼を出す時も一悶着あったそうで、村人たちも困り果てていたようだ」

「そのようなことは依頼書には書いてありませんでしたが……」

ゴブリン退治の依頼書をチラリと見つつ受付嬢が言う。

「村人も言いづらかったのだろう。ゴブリン退治に反対する修道女が村にいるなどと言うのは、些か外聞が悪い。気が触れてしまっているのではないかと」

「……それじゃあ彼女は？」

「いや、別に気が触れているわけではないようだった。事実、普段は献身的で大人しい修道女だったようだ。「元冒険者」ということで「治療術」も修めていたらしく、村人たちからは頼りにされていたらしい。特に、子供たちにはかなり好かれていたようだった。だが、ゴブリンが出たとなると様子が一変したらしい」

村人たちは最初、修道女はゴブリンに何らかのトラウマを持っているのだと推察した。そういったことは良くある話だったし、彼女のような境遇の女性はそういった場合が多いのだ。彼女のように「冒険者を辞めて、教会に入った女性」、は……。

しかしそれにしては様子がおかしい。

ゴブリンが出たことで「早く退治してくれ」と取り乱すなら話は分かるのだが、彼女の場合は「絶対に手出しをしてはいけない」と取り乱してきたのだ。

それはまさに鬼気迫る様子で、明らかに異状な光景だった。

「……それで、ゴブリンスレイヤーさんはどうしたんですか？」

「無論、ゴブリンを殺してきた」

「そ、そうでしょうね」

問答無用の断言。その思い切りの良さは流石ゴブリンスレイヤーと言うべきか、ことゴブリンに関してだけは情け容赦が全く無い。

ゴブリンスレイヤーは必死に懇願する修道女を完全に無視して、ゴブリンを皆殺した。大人も子供も余すことなく、全てだ。

殺したゴブリンたちは、なんの変哲もないゴブリンだった。

誰よりもゴブリンの恐ろしさを知るゴブリンスレイヤーでも、なぜそこまで恐れるのか理解できないほどのゴブリンだった。

だから、それだけで終わればこの修道女のこととは、ゴブリンスレイヤーの記憶にも残らなかつただろう。

過去、何千、何百と繰り返し返してきた「作業」となんら変わらない同じ結末。ただ少し変わった修道女がいただけ。それだけで、この話は終わるはずだった。

「だが、依頼を終え村を出る時、修道女から奇妙なことを訊かれた」
取り乱し、泣きじやくりながら、絶望した様子で修道女は訊いてきたのだ。

「……なんて訊かれたのですか？」

受付嬢の言葉には、僅かながらに恐怖が滲んでいた。ゴブリンスレイヤーが話を進める。

「殺したゴブリンの中に、「マスクをしているゴブリン」はいなかったかと訊かれた。俺が「いなかった」と言うと、修道女は救いの神でも現れたかの様な顔をして言った。『良かった』、と……なぜだ？」

ゴブリンスレイヤーの最後の呟きは、受付嬢へ向けてではなく、まるで自分自身に問いかけているかのようだった。

「さ、さあ……あいにく私は、ゴブリンにはあまり詳しくなくて……」
受付嬢はそう言ったが、ゴブリンスレイヤーの耳には届いていないようだった。

下を向き、考えにふけるゴブリンスレイヤー。

ゴブリンスレイヤーはずっと、村から街に帰ってくる間そのことが引つかかっていた。

「マスクをしたゴブリン」。チャンピオンやロードとも合致しない、ゴブリンスレイヤーが聞いたこともないゴブリンの特徴。果たしてそんなゴブリンが本当に存在するのだろうか？

ふと、ゴブリンスレイヤーはギルドに設置されている大きな「姿見」に目を向けた。

そこには、薄汚れた鎧を着込み、角の折れた兜を被ったゴブリンスレイヤーの姿が映っている。そう、^{マスク}兜をした人間の姿が……。

「……人間のようなゴブリン」

そう呟くとゴブリンスレイヤーは受付嬢に向き直った。

「えっと……ゴブリンスレイヤーさん？」

「ゴブリンだ……」

「はい？」

「ゴブリンだ。依頼はあるか？」

「え、ええ……今日も何件かありますが……」

「その中に「マスクをしたゴブリン」の依頼は？」

「え？ いいえ、そのような依頼はなかったはずですよ……」

「なら過去に似たような依頼は？」

「ええっと、そういったのはなかった……っと思います」

「……そうか」

当然だ。そんな変わったゴブリンがいたのであれば、ゴブリンスレイヤーの耳に入らぬはずがない。

だが、いないという保証があるわけでもない。

そして、ないのであれば、確かめる必要がある。

「……そうか」

ゴブリンスレイヤーはもう一度、そう強く呟いた。

*

*

修道女は今日も、教会で祈りを捧げていた。

だが一体何のために？ 彼女は祈りを捧げる時、いつもそんな疑問が湧いて出ていた。

見捨てた「仲間」のためか？ 見殺しにしてしまった「友達」のためか？ それとも、憐れで可哀想な「自分」のためか？

何のために自分は祈っているのかと考えると、修道女は気が狂いそうだった。

なぜなら、彼女はゴブリンのために祈っていたからだ。彼女が信奉する「地母神」ではなく、教会が信仰する「至高神」でもなく、あの卑猥で矮小な「小鬼」^{ゴブリン}のために祈っていた。いや、正確にはただの「小

鬼」ではなく、「マスクをした小鬼」のために祈っていた。

これは明らかな異端行為だ。修道女として決して褒められることではない。だが、そうすべき責務が彼女にはあると思われた。

「カレラ」はそれを望んではいないだろうが、他でもない彼女がそうすべきだと思ったのだ。そうすることが「彼女」と「彼女」への罪滅ぼしになるのだと、それだけが「彼女たち」への償いになるのだと、そう信じて……。

自分勝手な言い分だとは思う。でも、それ以外に良い手段も思い浮かばなかった。どんなに祈ったところで、死んだ者は帰ってこないし、過去を変えることはできない。結局の所これはただの自己満足だ。きつとこれは償いですら無い。だから、修道女は村にゴブリンが出たと聞いた時、密かにゴブリンと運命を共にしようと思意していた。

ずっと見逃されていた「罪」を贖う時が遂に来たのだ。

修道女は惨めにゴブリンたちの食い物になって、失意のまま「カレラ」の糧になるべきだったのだ。もうずっと前にそうなるべきだった。「女治癒士」という冒険者は、辺境の村でのうのうと「修道女」などになるのではなく、そういった末路を迎えるべきだったのだ。

だが、そんな彼女の心中を知ってか知らずか、村人たちはそんな愚行を許そうとはしなかった。

畑が荒らされたわけでもなく、ただの目撃証言があったというだけで、速やかに冒険者ギルドに出される「討伐依頼」。数日もしない内に、「冒険者」はすぐやってきた。それも「銀等級」の冒険者が……。かの冒険者こそ、ゴブリン退治のプロフェッショナル中のプロフェッショナル。ゴブリン退治だけを専門とする偏屈な冒険者「ゴブリンスレイヤー」だった。ことゴブリン退治において、これほど信頼のおける人物はいないだろう。

スペシャリストの登場に、村人たちはホッと胸を撫で下ろす。

事実、ゴブリンスレイヤーの手際は見事の一言で、いくつかの質問を的確に交わした後で足早にゴブリンの住処に赴くと、数時間もしない内にゴブリンを全滅させて帰ってきた。

その熟練すぎる手腕に村人たちは皆一様に関心したが、修道女だけは心底恐れ慄いていた。

ああ、ゴブリンを殺してしまった。ならば「カレら」が来る。復讐しにやって来る。この村にやって来る。

それは妄想以外の何物でもなかったが、恐怖からくる強迫観念によつて修道女はそう信じ込んでしまつていた。

「カレら」が来る。復讐しにやって来る。もし殺してしまったのが「マスクをしたゴブリン」なら、「カレら」は必ずここにやって来る。「カレら」が「罪」を贖わせに、必ずここにやって来る。

修道女はそれが何よりも恐ろしかった。

ただのゴブリンならいい。孕み袋になるくらいならどうつてことない。むしろこの「悪夢」を終わらせてくれるなら、望むところかもしれない。毎夜訪れる「赤髪の悪夢」を終わらせられるなら……。

だがマスクをしたゴブリンはダメだ。カレらの罪を償うことだけは、到底耐えられそうにもない。

だからゴブリンスレイヤーが帰る際、修道女はつい訊いてしまった。「あなたが殺したゴブリンは、マスクをしたゴブリンではなかったのか」と。

修道女はそのことを恥じた。結局のところ自らの保身が大事なのかと恥じた。なにが罪滅ぼしだ、なにが償いだ。綺麗事ばかり並べて、言うに事欠いて結局はこのザマか。何より修道女は、ゴブリンスレイヤーが「そんなゴブリンはいなかった」と言ったことに対して、心底安心してしまった自分がいたことに、心の底から恥ずかしくなつた。

なんて浅ましい考えなのだろうか。ここまで卑しくなれる生物も他にはいないだろう。そう修道女は自嘲する。だからこそ、今日も彼女はゴブリンに祈りを捧げるのだ。決して潰えぬ罪を贖うために……。

「……………ここにいたのか」

そんな彼女に声をかけたのは、他でもないゴブリンスレイヤーであつた。

「あんにんに訊きたいことがあつて来た」

ゴブリンスレイヤーが修道女に近づく。

修道女は祈りの姿勢を崩さぬまま、ゴブリンスレイヤーに応えた。

「……なんでしょうか？」

だが、なんとなく察しはついていた。

ゴブリンに執着する冒険者ゴブリンスレイヤーが、わざわざ教会に来て、修道女に訊きたいことなど高が知れているからだ。

「ゴブリンについてだ」

案の定、ゴブリンスレイヤーの返答はゴブリンだった。

修道女は無言。それをゴブリンスレイヤーは了承と受け取ったのか、話を続ける。

「あんたはこの間、「マスクをしたゴブリン」はいなかったのかと訊いた。なぜだ？ なぜそんなことを訊いた？」

ゴブリンスレイヤーらしい単刀直入な問いかけ。対する修道女は沈黙を貫いていた。

「……」

返答は無言。

「マスクをしたゴブリンがいるのか？ いるとしたらどんなマスクをしている？ 特徴は？ 大きさは？ 武器は？ 魔法は使うのか？」

「……」

返答はない。

「ホブやシャーマンとは違うのか？ チャンピオンやロードではないのか？ ヤツらの中には権威を示すために仮面を被るヤツもいる。その類ではないのか？」

「……」

答えは返つてこない。

「あんたは「マスクをしたゴブリン」を見たのか？ 聞いたのか？ それともただの妄想か？ あんたは何を知っている？」

「……」

修道女は祈り続けている。

「なぜ「マスクをしたゴブリン」がいたかどうかを俺に訊いた？」

「……」
修道女は答えない。

「……」
「……」
沈黙が続く。

「……」
「……」
それでもゴブリンスレイヤーは辛抱強く待った。

「……」
「……」
待つことは何よりも得意だった。『あの時』もずっと側で待っていた。姉が小鬼たちに食い物にされている間、ずっと側で待ち続けた。いつだって待ってばかりだった。だから、待つことだけに関してはなんの苦にも感じなかった。

「……」
「……」
ゴブリンスレイヤーはただひたすら黙って待っていた。彼女が語り出すのをジツと……。

「……それを聞いて、あなたはどうする気ですか？」
やがて観念したのか、修道女がそう呟く。
「無論、ゴブリンを殺す」

間髪を入れぬ即答。
だがゴブリンスレイヤーの言葉を、修道女は心の中で『ハッ』と笑い飛ばした。

なるほど、流石はゴブリンスレイヤーを殺す者様だ。畏れ多くもゴブリンを殺すなどと、こんなにも平然と言つてのけるとは、命知らずも甚だしい。ゴブリンスレイヤーは『カレラ』のことを知らないからそんなことを言えるのだ。『カレラ』のことを知っている修道女にしてみれば、ゴブリンスレイヤーの言葉は愚答と言う他ない。

「……たとえそれが、善良なゴブリンでもですか？」

「善良なゴブリンなどいない」

今度は間髪を入れぬ否定。

その容赦のない断言は、ゴブリンを殺し続けてきたゴブリンスレイヤーだからこそ言える台詞であり、自らの実績と経験に裏打ちされた確固たる事実であった。

少なくとも、ゴブリンスレイヤーにとってはそれが真実だ。

「もし方が一いたとしても、それは人前に出てこないゴブリンであつて、そんなゴブリンは存在するはずもない」

そうゴブリンスレイヤーは言い切る。

「ゴブリンたちは「略奪する」という発想しか持たないからですか？」

「そうだ。ヤツらは「奪う」ことしか知らず、自分たちで新たなものを「作り出す」ことなど決してしない」

「あなたが殺してきたゴブリンはきつとそうだったのでしょうね」

吐き捨てるように修道女はそう言った。

「でもじゃあ、あなたはこの世界の隅々まで冒険して、その事実を確かめたのですか？ 決してそうじゃないでしょう？ だったら善良なゴブリンが絶対にいないだなんて、どうして言い切れるんですか？

中には「奪う」ことではなくて「作る」ことを知ったゴブリンもいるかもしれないのに！ 平穏を望んで静かに暮らすゴブリンもいたかもしれないのに！ ただゴブリンってだけで、どうして傷つけることができるんですか!? どうして私たちはッ!!」

最後の方はもう絶叫となっていた。

気付けば修道女は立ち上がり、ゴブリンスレイヤーと向き合っていた。体は震え、蒼色の瞳には涙が溜まっている。怒り、悲しみ、恐れ、憤り……様々な感情が瞳に渦巻いている。

ゴブリンスレイヤーは奇妙な感覚を感じていた。修道女言葉はまるでゴブリンスレイヤーではなく、自分自身へと向けられているかのようなのだ。

「どうして……どうして、私たちは……」

「……なにがあつた？」

ゴブリンスレイヤーは修道女のような娘を何度も見てきた。ゴブ

リンに人生を狂わされた者の姿。必死にひた隠しにしているようだが、他でもないゴブリンスレイヤーの目を誤魔化すことはできなかった。この修道女は、ゴブリンスレイヤーが知らない「何か」を知っている。

「……確かに「善良なゴブリン」はいるのかもしれない。俺は見たことはないが、なるほど、あんたが言う通り俺もゴブリンの全てを知っているわけではない。探せば確かにいるのだろう。善良なゴブリンなどという矛盾をはらんだ存在も。だが、俺は「ソレ」を知らない。「善良なゴブリン」など知ったことではない。だが、知らないのであれば、知らなくてはならない。俺はゴブリンのことを知る必要がある。あんたは知っているのか？ 知っているのであれば教えてくれ……」

「私は……私は……」

私はこんなにも浅ましかったのかと、このとき修道女は思った。この期に及んで修道女は「救い」を求めていたのだ。

罪を贖うのではなく、罪から救われようとしている。自分だけのうと生き延びて、あまつさえ救われようとしている。自分だけのうと祈り続けていたのはこのためだったのか？ このためにここでずっと祈り続けていたのか？ いずれ来るであろう「救い」を待ち続けるために、罪を贖うフリをせずとここで祈り続けていたのか？ 良かったじゃないか目論見どおり「救い」は遂に来たぞ！

ホラ、これでオマエは救われる。卑しいヤツめ、恥を知れ！

赤髪の悪夢が、彼女をそう責め立てる。

でも仕方がないじゃないか。なにせ相手は「ゴブリンを殺す者」だ。ただの「ゴブリンに祈る者」である修道女に、抗えるはずもない。

「私は――」

だから修道女は自らが知る「秘密」を、ゴブリンスレイヤーに洗いざらい話した。

*

*

翌日、ゴブリンスレイヤーは冒険者ギルドに行き、真つ先に受付嬢

のところに向かった。

「おはようございます、ゴブリンスレイヤーさん！ 今日ゴブリンですか？」

「いや違う」

「はい、今日はゴブリン退治の依頼が六件ほどありまして……つて、今なんて言いました？」

「む？ 違うと言ったんだが……」

「……え、え？ えええええええ！？ ゴブリンスレイヤーさんがゴブリンじゃない？ じゃ、じゃあ一体なにしにギルドに来たんですか！？」

思わずそう言ってしまう受付嬢。言ったあとで「しまった！」という顔をする。さすがにこれは失言以外の何物でもない。

「す、すみません！ そりゃあゴブリンスレイヤーさんだって、時にはゴブリン以外でギルドに来ることもありますよね！ 私は見たことはありませんが！」

「む？ ああ、そうだな」

「……そ、それで、ゴブリンでないなら一体何をしにギルドへ？」

も、もしかして私に会いに!? なんてことを考えちゃうくらいには、いま受付嬢はテンパっていた。それくらいゴブリンスレイヤーがゴブリンと言わないのは珍しかったのだ。

あたふたする受付嬢をよそに、ゴブリンスレイヤーは坦々と言う。「過去にあった「冒険者依頼」を見せて欲しい。数年前、当時「青玉」と「鋼鉄」だった女冒険者の一党パーティーが請けた依頼だ。ああ、ゴブリン以外で構わない」

「ゴブリン以外!? 本当にゴブリン以外で良いんですか!？」

「ああ」

受付嬢は天地がひっくり返るかのような衝撃を受けた。あのゴブリンスレイヤーの口から「ゴブリン以外で」なんて言葉が飛び出してくるとは前代未聞だったのだ。明日は血の雨でも降るのかしら？ きつとその血はゴブリンのものだろう。

「ちよ、ちよっと待ってて下さいね」

受付嬢は椅子から転げ落ちるのをなんとか堪えて、そそくさと資料室へと向かった。自分でも足取りが震えているのが分かる。これは天変地異の前触れか何かか。ゴブリンスレイヤーからゴブリン以外を求められるだなんて、彼女が受付嬢になって以来初めてのことであった。

つまりこれは処女を奪われたのと同義ではないか。何を言っているんだ私は？ 受付嬢は混乱していた。

オーバーヒートする頭とは裏腹に、受付嬢はゴブリンスレイヤーが求める資料を着実に探し当てていく。資料以外でも求められればなんでもしてあげるのに……だから何を言っているんだ私は？ 受付嬢はかなり混乱していた。

「こ、これで以上になります、ゴブリンスレイヤーさん」

見つかった資料は思ったよりも多くはなかった。「青玉」と「鋼鉄」の一党にしては驚くほど少ない。どうやら、彼女たちは僅か数か月でその等級まで登りつめていたようだ。

「優秀な冒険者さんだったのですね……彼女たちに何かあるんですか？」

さり気なく探りを入れる受付嬢。もしかすると、もしかして、またもやライバル出現の兆しなのかもしれない。

「どうだろうな……彼女たちが請けた中で一番最近の依頼はどれだ？」

「ええつと……それなら多分これですね。「辺鄙な村」からの調査依頼です。ああこの依頼は私も覚えていますよ。確か私が受付した依頼ですね。随分前のことですが、ちよつと変わった依頼でしたので覚えていません。これ彼女たちが請けていたのですね。あ、でも彼女たちこれを最後に引退しちゃってるんですね。道理で等級の割に依頼数が少ないわけだ……「女剣士」に「女治癒士」の一党パーティー。彼女たち、何かあったんですかね？」

「見せてくれ」

一介の冒険者に個人情報でもある「依頼書」を見せるのはあまり褒められた行為ではない。だが、ゴブリンスレイヤーは安心と信頼の

「銀等級」の中でも最優と言われるくらいには信用のおける冒険者だ。実績に関しても全く申し分ない。特に問題はないだろうと判断し、受付嬢はゴブリンスレイヤーに資料を渡した。

マジマジと資料を見つめるゴブリンスレイヤー。

「そうか「辺鄙な村」か……すまない世話になった」

「いえ、これくらいどうってことないですよ。その依頼に何かあったんですか?」

「ああ……ゴブリンだ」

やっぱりそうでしたか、と受付嬢は呟く。むしろちよつと安心したくらいであった。やはり天変地異の前触れはなかったのだ。ゴブリンスレイヤーは今日も今日とて相も変わらずゴブリンスレイヤーだった。

「では俺は行く」

「あ、はい。気を付けて下さいね」

「ああ」

そう言つてゴブリンスレイヤーはギルドを出て行った。

気が動転していた受付嬢は気付けなかった。ゴブリンスレイヤーが、ゴブリンの依頼があるというのに、一つも請けずにギルドを出て行ったという事実。そんなこと、ゴブリンスレイヤーが冒険者になつて初めてのことだった。

*

*

辺境の街を出て、街道をひたすら行き、気が遠くなるほど歩き続けてようやくゴブリンスレイヤーは「辺鄙な村」に辿り着いた。

森の近くにある寂れた村——とりたてこれといった産業もなささうで、当然、宿屋らしい施設もない。教会すらないようだった。

住民は老人が多く、働き盛りである大人たちは少ないようだ。それに倣うように子供たちの姿も少ない。

よくある過疎化が進む農村のそれだった。冒険者という職業が流るにつれて、こういつた寒村が増えていると聞く。もう何年かすれ

ば、この村も人知れず消え去ってしまったのだろうか。

まあそれ自体はよくある話だ。

消え行く寒村のことなど、ゴブリンスレイヤーには関係がない。なぜなら相手は「ゴブリン」ではないからだ。ゴブリンでないなら知ったことではない。

突然前触れもなく現れたゴブリンスレイヤーに対し、村人たちはなぜか手慣れた様子で対応した。曰く、ここ最近「三人組の女冒険者」がこの村を利用するようになったらしい。頻繁ではなく数週間に一度あるかないかの話らしいが、こう何度もあれば自ずと手慣れてくるというものだ。

「それで兄ちゃんも、森へ探索に行くのかえ？」

「ええ、まあ、そうです」

拠点として提供してくれた村長家で、ゴブリンスレイヤーはそう質問に答えた。当然、取るものは取られたが、元よりそうするつもりだったので問題はない。むしろ情報収集も兼ねて都合が良かった。「しっかし奇抜な人もいるものじゃな。こんな辺鄙な所にわざわざ来るだなんて……いっつも来る冒険者さんたちは、森へ行くといっつもボロボロになって帰ってくるんじゃないが、兄ちゃんも森へ行くなら気をつけることじゃて」

「はい、そうします」

まずゴブリンスレイヤーは、辺鄙な村に着くやいなや徹底的に情報を集めていた。修道女が語ったことを信用していないわけではないが、人伝で聞くのと自らの足で集めるのでは、情報の確度が違うことをゴブリンスレイヤーは知っていたのだ。

村人の話によれば、森には正体不明の小人が住んでいる。小人はマスクを被っていて不干渉を望んでいる。森から響く「音」はその小人たちの仕業。村人たちは小人たちの正体を探ろうとは思っていない。なぜなら、かつて調査を依頼した時、調査を担当した冒険者からそう言及されたから。それは、小人たちに会いに行っていると思われる。「三人組の女冒険者たち」からも、そう強く注意されていた。

村人たちは、それだけは厳格に守るようにしていた。触らぬ神に祟

りなし。辺鄙な村の住人は、そうやって今の今まで生き抜いていたのだ。

村人たちの情報はこれだけではない。

森から響く「音」は、日の出と共に鳴り始め、日没と共に鳴り止む。日が沈んでから鳴ることは滅多にない。

小人たちが現れるようになってから、ゴブリンだけではなく、怪物による被害が全くなかった。お蔭で老人ばかりの村でも、なんとかやっていけているらしい。

定期的に森へ赴いている「三人組の女冒険者たち」は、いつも大抵ボロボロになって帰ってくるが、なにか酷い目に遭っているというわけではないようだ。

総じて判断するのであれば、森に住む「小人」は決して危険なモノではないように思われる。あらゆる情報がそう示していた。

ゴブリンスレイヤーは僅かに困惑する。

得られた情報全てが、彼の知るゴブリンの生態と全くといって合致しない。

鳴り響く「音」から、ヤツらは日中に活動しているようだ。ゴブリンは夜行性で昼間に出歩くことは滅多にない。相手がゴブリンなら、ボロボロになった女冒険者たちが平穩無事に戻ってこられることはまず無いだろう。村の作物に全く被害が無いとはどういうことだ？

ゴブリンスレイヤーに一抹の疑問が過ぎる。本当に森に住む小人は「ゴブリン」なのか？ だが修道女は言った。あの森に住む小人こそ、「マスクをしたゴブリン」なのだ……。

村で得られる情報だけでは確証は得られないようだった。やはり自らの目で確かめるしかあるまい。ゴブリンスレイヤーは迷ったが、ゴブリンの習性に基づいて、最初の「音」が鳴り響く前——つまりは日の出前に森に入ることに決めた。

まだ薄く暗い寒空の下、ゴブリンスレイヤーは「三人組の女冒険者」が利用しているという獣道から僅かに逸れる道なき道から森に入る。それからゴブリンスレイヤーは慎重な足取りで、森の深部へと前進していった。

ゴブリンは言うまでもなく、「森」とは元来非常に危険な場所だ。立ち並ぶ木々は平衡感覚を狂わせ、生い茂る草葉は日差しを遮り視界を悪化させ、体温を容赦なく奪う。そこは人類の領域ではなく、そこに棲む獣たちの領域だ。碌な装備も準備もなしに挑んでは、呆気なくその深淵に飲まれ命を散らすことになるだろう。

細心の注意を払い、ゴブリンスレイヤーは徐々に、だが確実に森の奥地へと歩を進めていった。

息を殺し、汗を拭い、音を立てずに進む。こんなにも慎重になったのは久しぶりかもしれない。そもそも――

(こうして、自らゴブリンを探索するのは、初めてのことだったかもしれないな……)

ゴブリンスレイヤーにとって、ゴブリンは人生の全てにおいて優先される事柄だ。ともすれば、ゴブリンこそが生きがいであると言ってもいい。

だがそのスタンスとしては、基本「受け身」であった。

ギルドで依頼された「ゴブリン退治」を手当たりしだいに請け、そして実行するだけの人生。ゴブリンは数だけは多かったから、それだけでゴブリンスレイヤーの時間は殆ど忙殺された。だからこそ、こうして自らの意思でもってゴブリンを探すなんて、初めてのことだった。

これはゴブリンスレイヤーにとっても意外な発見だった。だがそれ故に実に有益な発見でもあった。

修道女は言った。「あなたは世界の隅々まで探索したわけではない」と。確かにその通りだ。ゴブリンスレイヤーとてゴブリンの全てを知っているわけではない。ゴブリンのことを全て知るには、これまでのように待ち続けるのではなく、自ら行動に移すべきなのかもしれない……探索を進めながらも、ゴブリンスレイヤーはそう思った。

森へと侵入して、もうどれだけの時間が流れたのかゴブリンスレイヤーにも分からない。悠然と生い茂る草木の中では、流れゆく時間も違ふようだ。だが、まだ日の出の「音」が聞こえないことから、そんなに多くの時間が流れたわけでもないようだった。

森の様子は至って平穩で、なにか異常があるだとか、変わったモノがあるだとかいう様子もない。慎重に歩を進めているが、あまりにも慎重になりすぎるのも得策ではないだろう。ゴブリンスレイヤーがそう思いかけた瞬間——遠くの方の茂みがガサガサと揺れた。

ゴブリンスレイヤーは素早く臨戦態勢をとり、警戒を露わにする。茂みの揺れは次第に大きくなっていき、遂にはゴブリンスレイヤーが体感できる程に地面が振動するほどになった。ズシン、ズシンという「音」が鼓膜を震わす。日の出の「音」とは違う音だ。

「音」の方向に目を向け、ジツと構えるゴブリンスレイヤー。居場所がバレないように、木々の影に身を潜める。息を殺し待つ。ややあつて現れたのは「巨大な人形」であった。

全身甲冑に身を包み、関節部の隙間からは人肌ではなく金属の接合部が見え隠れしている。手には大きな矛を持ち、肩や背中の部分には——ゴブリンスレイヤーにはどんな用途があるのか分からなかったが——巨大な装飾が施されていた。駆動音が鳴り響き、金属が軋む音が聞こえる。ゴブリンスレイヤーは見たこともなかったが、相手は機械仕掛けの人形のようなのだ。

「……これはゴブリンではないな」
だか、人間というわけでもない。

巨大人形——対見習い冒険者用新型防衛兵器「ネオ・ファウスト」——は、ゴブリンスレイヤーから僅かに漏れた眩き声を、その優れた感知機能で速やかに察知すると、ゴブリンスレイヤーへと急転換した。

「——ッ!？」
息を飲むゴブリンスレイヤー。よもやこの距離から察知されるとは、予想だにしていなかった。この人形は相当に感知能力が高いらしい。気配を殺し息を潜める。

ガシャン、ガシャンつと音を立て、ゆつくりとゴブリンスレイヤーの方へと向かってくるネオ・ファウスト。もはや起動音だけでなく、ピコピコといった電子音さえも聞こえてくる位置にまで近づいていた。

ゴブリンスレイヤーは選択を迫られた。このまま一旦退くか、戦い

を挑むかの二択だ。

ゴブリンスレイヤーは自らの力量は重々承知していた。ゴブリンスレイヤーは「勇者」ではない、もちろん「英雄」でもない。ただのゴブリンスレイヤーを殺す者だ。だから、ゴブリンが相手でないのなら、何者であつてもゴブリンスレイヤーに分が悪かった。

直ぐ様踵を返し、撤退を選択するゴブリンスレイヤー。だがしかし、今回ばかりは相手が悪過ぎたようだ。

ゴオオオオオオという音を鳴らし空中を飛翔するネオ・ファウスト。瞬く間にゴブリンスレイヤーの行く手を阻み、進行を塞いだ。

ゴブリンスレイヤーは回り込まれてしまった！

まさか空を飛ぶとはな——ゴブリンスレイヤーが下唇を噛む。どうやら撤退は許されぬようだ。ならどうするか……ゴブリンスレイヤーの脳裏にいくつもの選択肢が列挙される。だが、彼がそれを実行に移す前にネオ・ファウストの行動は既に始まっていた。

「グツ……」

ゴブリンスレイヤーの腕を掴み、強引に持ち上げるネオ・ファウスト。逃げられないように確保してから、ネオ・ファウストは念入りにゴブリンスレイヤーを観察した。

ガガガ……侵入者(仮)ヲ確保……コレヨリ「スキャン」ヲ開始シマス……ガガガ……頭部位ニ「マスク」ヲ確認……侵入者デアル可能性ガ17%低下……

「なに、を……見ている？」

ガガガ……対象ヨリ「共通語」ノ発声ヲ確認……侵入者デアル可能性ガ3%低下シマシタ……ガガガ……スキャン継続中……胴体部、脚部、腕部ニ「防護服」ヲ確認……侵入者デアル可能性ガ24%マデ低下……対象ハ「ゴブリン」デアル可能性ガ高イデス……

ネオ・ファウストは搭載された最新鋭の思考回路を駆使して、確保した対象の正体を解明していく。

この姿、この格好、このマスク、そしてこの「臭い」……多少サンブルから外れているが、間違いない、確保した対象は「ゴブリン」に違いなかった。計算しつくされた思考回路によつてそう導き出すネ

オ・ファウスト。

なぜこんなところにゴブリンがいるのかデータはないが、それはネオ・ファウストが計算すべき項目ではなかった。大方きつと遭難でもしたのだろうとゴブリ式思考回路は弾き出す。ならば速やかに安全を確保しなくてはならない。迷子になったゴブリンの身柄確保は、ネオ・ファウストの最優先任務事項なのだ。

「ガガガ……0645遭難シタ「ゴブリン」を確保。コレヨリ「リトルシャイア」へト帰還シマス」

言うやいなやゴオオオオオと音を立てて飛び立つネオ・ファウスト。

斯くして、遂に出会ってしまうことになる「ゴブリンスレイヤー」と「マスクを被ったゴブリン」——囚われの身となってしまうたゴブリンスレイヤーの明日はどっちだ!?

ゴブリン・アイデンティティー

ゴブリンスレイヤーは空を飛んだ。

正確には飛ばされたかもしれないが、どちらにせよ、そんなことは初めてだった。

急上昇、急降下、急旋回、急停止——そのたびに内臓がせり上がり、血液が逆流する。視界が狭まり、色調が消え失せた。意識が彼方へと吹き飛んでいく。

高性能ゴブリンマスクと防護服を装備するゴブリンであれば、これくらい手荒なマネをされた方がアトラクションぼくてエキサイティングするのだろうか、ただの革鎧と鉄兜でしかないゴブリンスレイヤーには少しばかり刺激的すぎた。

意識を失いだらんと脱力するゴブリンスレイヤー。そんな彼をネオ・ファウストはがっちりホルドし、ゴブリン的「安全第一」でリトルシャイアへと輸送する。

轟音を響かせてリトルシャイアの「レンドロン広場」に着陸したネオ・ファウストは、ゴブリンスレイヤーをゴブリン的な意味で優しくポイ捨てすると、ゴブリンスレイヤーは脳天から地面に直撃した。グシャアツと嫌な音がする。

任務遂行を確認したネオ・ファウストが、再び任地に赴くためゴゴゴッと炎を噴射させて飛び去っていった。

ポツンと広場に取り残されるゴブリンスレイヤー。水路のせせらぎが虚しく響き、一陣の風が哀しく吹く。ここは老若男女のゴブリンが集うリトルシャイアの憩いの場だったが、幸か不幸かまだ夜明け前であったため、ゴブリンの姿はない。

ゴブリンスレイヤーは暫しのあいだ、無慈悲にもそのまま放置されることになる。しかしそれも束の間のことであった。

ドーン！　　っという爆発音。夜明けを知らせる爆発が鳴り響くと共に、どこからともなくリトルシャイアのあちこちから、ゴブリンたちがゾロゾロと這い出てきたのである。

うーんうーん、まだまだちよつと眠いゴブ。今日の朝ごはんはなん

だろなゴブ。さてさてこれからなにをしようかゴブ。ああ、腰が痛いゴブ。今日は採掘場にでも行こうかなゴブ。アンタ昨日も採掘場に行ったじゃないゴブか。

そんな雑談を和気あいあいと交わしながら、どこかへとトコトコ向かうゴ布林たち。カレらが目指しているのは、広場の外れにある大きな建物——「クックノックス大食堂」だった。

リトルシャイアの食卓事情を一手に担うこの大食堂は、最大収容ゴブ数約千五百ゴ布林を誇るリトルシャイアでも有数の巨大施設で、クックノックスを始めとする74名の給養ゴ布林と、27体のコツヘンドールによって、リトルシャイアのゴ布林たちの食欲とお腹を満たしていた。

クックノックス大食堂が提供する食事は日によって最低三回は変わり、大抵の場合、日の出の爆発とお昼の爆発と日没の爆発の時にさり気なく変更される。

今はちようどその「日の出の爆発」の食事の時間というワケだ。リトルシャイアのゴ布林たちは日の出とともに目覚めると、まず真っ先にこの場所を目指すのが習慣になっていた。腹が減っては仕事も趣味もできぬというわけだ。

クックノックス大食堂からはゴ布林的に美味しそうな匂いが漂ってきて、ゴ布林たちは期待に胸を膨らませる。

これは我先にと行かねばならん！ ゴ布林たちは競い合うようにしてクックノックス大食堂を目指した。ラプトルの臭み焼きのような人気メニューは、人気なだけあって競争率も高いのだ。

ゴ布林たちは、まるで押し寄せる大波のような大群となって、ぞろぞろとレンドロン広場を横切っていく。

そしてその最中、ゴ布林たちはとんでもないモノを見つけてしまった！

これはなんとということでしょう！ 我らが憩いのレンドロン広場の端っこに、なんとも一風変わったマスクと防護服に身を包んだ、身の丈ニンゲンほどもある大ゴ布林が寝っ転がってるではないか！

これはビツクリななんとることか！ 一体なにゆえこんなところで

お寝んねを!? ゴ布林たちは不思議に思っ、ワサワサとその大ゴ布林のところに集まって来る。

はーん、さてはこっそり深夜に抜け出して、酔っ払ってそのまま寝ちゃった感じゴブね。やれやれ全く仕方のないやつゴブ。こんなところで居眠りするだなんて、なんてだらしないゴ布林なのかしら。ゴ布林たちは思い思いにそんな感想を述べていく。

本来なら大忙しの日の出の時間だというのに、ゴ布林たちは寝っ転がってる大ゴ布林が気になって、興味津々の様子だった。次から次へとゴブリだかりができて、それに伴って、何だ何だっ、と、どんどんどんゴ布林たちが集まってくる。

どうしたんだ何事か? 大丈夫? 平気? 何があつたの? なんでも、酔っ払って眠りこける大ゴ布林が広場で発見されたそうぞ! あらまそれはまあまあ! それは確かに一大事!

リトルシャイアのゴ布林たちは、こんな感じで、結構、何気に、面倒見が良いヤツらだった。持ちつ持たれつ、の精神が、ゴブリ社会を円滑に回す秘訣なのだ。ゴ布林たちは困っているゴ布林を見ると、なんだかんだで放っておけないタチだった。

眠りこける大ゴ布林は、随分と薄汚れた防護服になんだか古めかしい鉄製マスク”と、随分古風な姿をしている。

そこそこイカしたデザインだけれど、機能性についてはイマイチのようで、ゴ布林たちの評価もイマイチだった。空気清浄機能や環境適応機能どころか、体温調節機能すらも付いていない。見た目は大きな体をしているが、体格に似合わずまだまだ未熟な若者ゴ布林のようだ。

もしかしたらひよっとすると、外から来たゴ布林かもしれないぞ!

どこかのゴ布林がそんなことを言い出す。それは確かに言われてみれば、そんな風に見れば、そんな風に見えなくもないかもしれない。それならば前時代的なマスクと防護服に説明がつくし、仄かに香る体臭が原始ゴ布林っぽい理由にもなる。

リトルシャイアのゴ布林たちは、寝っ転がってる大ゴ布林が

「外ゴブリン」だと分かって、歓喜に包まれた。外ゴブリンの中にも我々のような文明開花ゴブリンがいたのだ！　ゴブリンたちが諸手を挙げて喜び合う。

外ゴブリンといえば、大抵「ナントカの軍勢」とかいう良く分からないヤクザみたいな連中に支配されていて、全くコミュニケーションの取れないヤンキーゴブリンばかりだったけれど、この大ゴブリンを見る限り、決してそんなことはなかったのだ。外ゴブリンの中にも、ちゃんと話の通じそうな文化ゴブリンがいたのである。

ゴブリンたちはこれまで、森の外の文明とは積極的に関わろうとはしてこなかった。ほぼ一方的に喧嘩を売られたり、因縁を付けられたりしてきたことはあったが、ゴブリンたちからコミュニケーションを取ることは殆どなかったのだ。現在定期的に関わりがあるのは、精々、なぜか気に入られてしまった見習い冒険者たちぐらいである。

その見習い冒険者たちにしても、交流相手というよりも「勝手にやって来て防衛兵器をボコボコにしていく傍迷惑な相手」でしかなく、交流しているというよりも競争しているというのが正しかった。ゴブリンたちは「争い合い」や「殺し合い」は好まないが、「競い合い」ならば大歓迎だったのである。

ゴブリンたちは見習い冒険者との競い合いを通じて、様々なことを学んだ。競い合う楽しさ、より効率的な兵器の運用法、戦術戦略の洗練、新たなゴブリン兵器……そしてなにより強く学んだのは、「ニンゲンってヤバいッ!!」ということだった。

どんなに情け容赦のない鬼畜なギミックやトラップを仕掛けても、見習い冒険者たちはその尽くを見事に突破してみせるのだ。「ナニナニの軍勢」が何ヶ月も躓いている防衛機構を、だ。

もちろん、何事も最初は上手くはいかないものである。だが、最終的には必ず解法を見つけ出し、見事クリアしていった。中にはゴブリンたちが想定していなかった意外な方法で突破することもあり、今ではもう「マニピュレーター」にまで到達しているのである。

見習い冒険者たちの強さは、「ナンチャラの軍勢」なんか目じやないくらいブツチギリの強さだった。しかし、そんな恐ろしい強さを誇る

見習い冒険者たちでさえも、人間基準で見れば、その名の通りただの「見習い」でしかなかった！

これが「見習い」じゃなくて「正」とか「聖」とか「天」とかになつたら、いったいどうなっちゃうの？ ゴ布林たちは戦慄した。

これは認識を改める必要がある——ゴ布林たちは心底そう思つた。

これまでのゴ布林たちの人間基準は、骨の髄まで調べ上げた「貢献者A」が基準になつていたのだが、実際には貢献者Aはニンゲンの中でも規格外に弱い部類だったらしく、基準としては全くもって相応しくなかったようである！

ゴ布林たちはデータを重んじる主義だった。貢献者Aと見習い冒険者たちならば、どちらがより参考になるデータなのかは、赤ちゃんゴ布林でも分かることだった。「1」と「3」ならば当然「3」の方が、ゴブリンのにも統計学的にも参考になるのは一目瞭然である。

どっちもあんまり変わらないじゃないかというツツコミは、ゴブリンの辞書にはなかった。

とはいえ貢献者Aのデータもおびなりにすることはできない。結局ゴ布林たちは彼女たち4人の平均値をニンゲンの最低基準とし、予てより練っていた「ある計画」の見直しを図った。

実のところゴ布林たちは、パンサードールなどのゴブリ兵器を完成させたあかつきには、ゴルダナル大森林の外に進出することを密かに目論んでいたのである。

大森林の隅々まで網羅したゴ布林たちには、もはや森は全てを知るところとなり、カレらの知識欲を満たす「未知」は、もうめつきり見つからなくなっていたのだ。それでもゴ布林たちの探究心は留まることを知らず、遂にはゴルダナル大森林ですら越える領域に到っていた。

しかし、そんな折に現れた計算外の強さを持つ見習い冒険者の登場によって、ゴ布林たちの「計画」は一旦取り止められることとなる。ゴ布林たちの「外の世界への進出」は、当面の間「延期」となったのだ。少なくとも、見習い冒険者たちとの「競い合い」を経て、彼女

たちを鼻をほじりながら倒せるくらいに強い機巧兵器を創り上げるまでは……。

外の世界は危険でいっぱいだ。見習い冒険者のような「つええーニンゲン」が、まだまだゴロゴロいると予想される。そんな危険が危ない世界に、なんの準備もなく飛び込んでいくほど、ゴ布林たちは無鉄砲ではなかった。

だからこそ、「外から来た話の分かりそうなゴ布林」の来訪は諸手を挙げて大歓迎だった。「外の世界」を知り、まだ見ぬ「未知」を知る「同族」の来訪は……。

「シユコオ……シユコオ……」

それにしても 見れば見るほど「ニンゲン」みたいな 不思議なゴ布林さんゴブね」

「もしかしてひよつとすると 実は「ニンゲン」だったりして」

「何を冗談を 確かに一風変わってはいるが 「マスク」をしているし 少し原始的だが 「防護服」も着ているゴブ」

「それにこの仄かに香る匂いは まさにゴ布林そのものゴブ！ 一週間は洗っていない ばつちいゴ布林の匂いがするゴブ！」

「確かに確かに ちよつと原始的だけど 間違いなくゴ布林ゴブ ちよつとニンゲンみたいだけど コイツは立派なゴ布林ゴブ！」

ゴ布林たちは、見た目がちよつとニンゲンに似ているからって、決して鼻屑はしないヤツらだった。寝っ転がってるだらしないニンゲンみたいなゴ布林は、そうは言ってもきちんと立派なゴ布林なのだ！

そんなゴ布林の論理思考で、ゴ布林たちは「気絶しているゴ布林スレイヤー」のことを「ゴ布林」だと認識した。一風変わったマスクと防護服だが、「マスク」と「防護服」をしている以上、この寝っ転がってるゴ布林が「ゴ布林」であることは確定的に明らかなのである。

ゴ布林たちは自らが作り上げた治安維持システムに絶大な自信を持っていた。さらに、その一翼を担うネオ・ファウストのことも大いに信頼していた。そんな優秀なゴブリ兵器が、リトルシャイアのど

真ん中でニンゲンが居眠りしていることを許すはずもないし、有り得るはずもなかった。

それにカレが外ゴブリンなら、擬態とかカモフラージュとかそんな理由で、ニンゲンみたいな見た目をしている可能性もある。ゴルダナルの文化ゴブリンは、見た目がちよつとニンゲンに似ているからつて、変な偏見は持たないのだ。なんにせよ、ゴブリンたちはゴブリンスレイヤーのことを自らの同朋であるとした。

さてさて、それじゃあそれならば、未だ目覚める兆しのない外ゴブリンを、みんなで起こしてあげようか！ ということになって、そういうことならばつと続々と集まってくるゴブリンたち。こういった「放置ゴブリン」は、ネオ・ファウストの配備以降、まあまあそこそこ良くあることだったので、ゴブリンたちは慌てず騒がず落ち着いて対処した。

まずはバイタルチェック——なんとゴブリンスレイヤーの防護服には、「バイタルチェック機能」がついていなかった。外ゴブリンの文化はちよつと遅れてるゴブね、と呑気に思うゴブリンたち。仕方がないので視診で容態を窺う。

「シユココオ……シユココオ……」

それにしても これにしても 見れば見るほど 個性的な格好のゴブリンゴブね」

「マスクは鉄製 防護服は革がメイン……素材を統一していないのは 外ゴブリンの流行りゴブか？」

「頑丈そうな造りゴブけど 傷だらけだし 汚れが多くてばつちいゴブ
ちゃんとお手入れしないと せつかくのイカしたマスクがもった
いないゴブ」

「ならきつと コイツはズボラな性格のゴブリンゴブね それならこんなところで居眠りしちゃうのも 頷けるといふものゴブ」

「見たところ 呼吸 体温 共に異常なし それなら起こしてあげようそうしよう だれか気付薬とか持ってないゴブか？」

「それならこれなら ゴブが持つてるゴブ ホレこれゴブ」

そう言ったゴブリンが取り出したのは、なんとも怪しげに発光する瓶詰めの謎エキスだった。

それをホイッと渡すお薬ゴブリン。

手渡されたゴブリンは、渡してきたゴブリンをチラリと見てから、瓶詰めになった気付薬らしき謎エキスをチラリと見ると、「ま、いつか！」と思つてゴブリンスレイヤーのマスクの隙間からドバドバッと投入した。

「……ゴツ……ゴボツ!? ゴボゴボゴボ! ……ゴボゴボゴボ!?」

激しくむせ返るゴブリンスレイヤー。それでも容赦なく注ぎ込まれる謎エキス。気絶した状態でもマスク越しで飲食できるのはゴブリンたちの常識だったので、一切容赦がなかった。

「ガハッ、ゴホッ、ゴボオツゴボゴボゴボツゴボツゴボツゴボツ!? ……ガッ、ガハアツ!!」

そして遂に鉄兜から謎エキスが溢れそうになった頃、ガバアツと覚醒するゴブリンスレイヤー。

ゴブリンたちは流石ゴブリン製の謎エキス! と思つたが、実際にはただ単純に息苦しくて目覚めただけだった。

「ガハッ、ゲボオ、ゴホッ……ハア、ハアハア……グツ……ここ、ここは……?」

視界が霞んでいる。気分是最悪だ。息が苦しい。頭の奥がズキズキする。動悸が激しく高鳴り、体が痙攣していた。ここは何処だ? いやそもそも……俺は誰だ?

「シュココ……シュココ……」

オマエさん ホントにホントに大丈夫か?

心配するな安心するとイイ ここは 我らが彼らがゴブリンたちの理想郷「リトルシャイア」ゴブよ」

「……リ……トル、シャイア?」

その地名には聞き覚えがあつた。だが、それを何処で聞いたのか思い出せない。まるで朝霧の中に迷い込んだかのように、記憶が曖昧だった。怒りとも、恐怖とも、歓喜とも言えぬ感情が湧き上がってくる。何故そう感じる? 何故、俺はここにいるんだ?

呼吸が荒く、酸素が足りない。脳に血液が行っていなかった。何もかもがあやふやで、何もかもが曖昧だった。吐き気がする。しかし吐くべきモノがない。胃の中は空だった。

ゴブリンスレイヤーは辺りを見渡した。おびただしい数の「小人」たちが無数にいる。頭を覆い隠すほどの大きなマスク。丸いレンズの瞳。足先から手の先まで至る全身防護服——誰かが言っていた、マスクをした「何か」。それが何だったのか思い出せない。記憶の中が空虚だった。

「お前たちは……誰だ……?」

頭を押さえ、震えながらゴブリンスレイヤーは訊いた。

「シユコオ……シユコオ……」

オマエさんオマエさん マジでホントに大丈夫ゴブか?

オイラたちはどこからどう見ても 「ゴブリン」 に決まってるゴブ 生まれてこのかた「ゴブリン」だし 死んでこのかた「ゴブリン」ゴブ

「ゴブ、リン……だつと!?!」

その「名」に、ゴブリンスレイヤーは言いようのない「執着」を感じた。

言い知れぬ感情が溢れてくる。恨み、嫉妬、執念、後悔、悲しみ、虚しさ、恐怖、そして歓喜……それでも記憶は蘇ってこない。俺は「ゴブリン」に何らかの「執着」がある。だがそれが、何なのかが思い出せない。

「お、俺は……いったい……」

狼狽する様子のゴブリンスレイヤーに、ゴブリンたちは心配そうに声をかける。

「シユコオ……シユコオ……」

オマエさんオマエさん さつきから大丈夫ゴブか? なんだか震えていて 苦しそうゴブ どこか痛いところでもあるのか? 体調は? 気分は悪くないゴブか?」

「……分からない……俺は、俺は……誰だ?」

「もしかしてひよつとして オマエさん 自分が誰か分からないゴブ

せめて「ゴブスレニクス」だったり「ゴブスレオクス」だったりしたらマシなのになあ、と思うゴブリンたち。外ゴブリンの命名法則は、見た目と同じように一風変わっているようだった。

そんなことを思われているとは露知らず、ワナワナと震えるゴブリンスレイヤー。

「お、俺は……ゴブリンだった？　俺は、ゴブリンなのか？　ゴブリンだったのか？」

うわ言のように繰り返す。

まるで信じ難い話だが、これが事実であると示すかのように、ゴブリンスレイヤーの周りにいるのは誰も彼も「ゴブリン」ばかりだった。彼もゴブリン、彼女もゴブリン、貴方もゴブリン……ならば「俺」も「ゴブリン」なのではないだろうか？　徐々にそう思い始めてしまうゴブリンスレイヤー。

ゴブリンスレイヤーは「ゴブリン」というワードに、異状なまでの「執着」を感じていた。それは、自分自身の種族が「ゴブリン」だからなのだろうか？　自らの種族に執着を持つことは、別に不思議なことではない。ゴブリンスレイヤーは歪む意識の中でそう思った。

さつきから様子のおかしいゴブリンスレイヤーに、ゴブリンたちは困惑する。せつかく出会うことのできた外ゴブリンだというのに、なんだかさつきから悶え苦しんでいる様子。明らかに異常アリの兆候だった。

もしかしてひよつとするとこれは……。

「シユコオ……シユコオ……」

もしかしてもしかしてオマエさん「記憶喪失」ゴブか？

大事な大事なオマエさんの「過去」なくしてしまったゴブか!？」

記憶喪失というものはそんなに簡単に起きるものではない。相当過酷な環境に長時間晒され、大きなショックを頭部に受けるか、深刻な酸素不足に陥るか、ヘンな薬品を大量に摂取しない限り、滅多に起きるものではなかった。そしてゴブリンスレイヤーはその全て当て嵌まっていた。

いったいこの外ゴブリンの身に何が起きたというの？　事情を知

らぬゴブリンたちがそう心配する。ゴブリンスレイヤーはまだ俯いて震えていた。

「シユココオ……シユココオ……」

どうやらこうやらこの外ゴブリンさん　なんだか記憶喪失みたいゴブ」

「えーっ！　それはとてとて可哀想！」

「なんたることか一大事！」

「『過去』をなくしては「今」も「未来」も見えはしない」

「どうにかこうにかなんとかしてやらねば！」

「そうゴブ　そうゴブ！　記憶を失くした外ゴブリン　助けてやらねばゴブリンの名が廃る」

「然り然りその通り！」

「さあみんなで救おう外ゴブリン　よそ者だとしても変わらない　ゴブリンならば関係ない　ダサイ名前でも問題ない　みんなで救おうゴブリンスレイヤー！」

ゴブリンたちはやいのやいの言つて、ゴブリンスレイヤーを助け起こした。

ゴブリンスレイヤーは平均的なゴブリンよりも大分体格が大きく、さらには体重も重かったが、パワードスーツ的な機能も持っている防護服のお蔭でチョチョイのチョイだった。

ゴブリンたちに助けられ、なんとかかんとか立ち上がるゴブリンスレイヤー。まだフラフラとしているが、しっかりと二の足で立って、ゴブリンたちにお礼を言った。

「……すまない」

素直にそう言うゴブリンスレイヤー。

「気にすることないないゴブ　困った時はお互い様ゴブからな！」
「……そうか」

ゴブリンたちは立ち上がったゴブリンスレイヤーを、改めて上から下までまじまじと見つめた。

平均的なゴブリンよりも三周り以上も大きいその体格は、ゴルダナルのゴブリンたちの中では頭六つ以上も抜けていて、非常に目立つ。

子供ゴブリンと大人ゴブリンよりも体格に差があった。

外のゴブリンは育ちが良いゴブねくつと呑気に思うゴブリンたち。みすばらしいがよくよく見ればかなり使い込まれたであろう「マスク」と、薄汚いが見たこともないデザインの「防護服」をしているゴブリンスレイヤー。うーん、これはどこからどう見ても完全にゴブリン！

最初見た時は古臭くてダサイと思ったが、改めて見るとこれはこれで味があって悪くなかった。

「シユココオ……シユココオ……」

さてさてゴブリンスレイヤー……うーむ やっぱりこの「名」はいいだけないゴブ

ゴブリンスレイヤーという「名」では 美男も美女も分からぬゴブ

「……そうなのか？」

「そうなのゴブ そうなのゴブ！」

美男美女が分からねば ゴブリンスレイヤー 全くもってモテないゴブ！ 全くモテないブサゴブリンゴブ それはイヤイヤ 嫌でしょう？」

ゴブリンスレイヤーは思った。別にモテモテになりたいわけでは——しかし、口下手な上に記憶喪失になっていたゴブリンスレイヤーには、咄嗟に否定することはできなかった。

「シユココオ……シユココオ……」

そうだそうダイイこと思い付いた

いつその事 これを機会に「改名」するのはどうゴブか？

我ががゴルダナルの文化ゴブリン イイこと 新しいこと 記念すべきこと ステキなことあると 「改名」する習わしがあるゴブ

「ウムウム それはナイスアイデアゴブ

外から来たゴブリンスレイヤー これを機に「改名」してみるみるゴブ！」

「……改名？ どんな「名」が良いんだ？」

根は真面目なゴブリンスレイヤーは、ついうっかりそんなことを訊いてしまった。

ゴブリンスレイヤーの台詞に、ゴ布林たちは大いに盛り上がる。名付けはゴ布林にとって最高に名誉なことであり、最高に楽しい娯楽だったのだ。

ゴ布林たちは口々にゴブリンスレイヤーの新たな「名」を考える。記憶を失くしたから「アムネシクス」。風来坊ぽいから「サマヨエリクス」。眠りこけていたから「スリーピクス」。森の外のから来たので「アウトサイクス」。

色々なアイディアが飛び出してきたが、結局、最後に選ばれたのは「旧名」を大事にして、単純にもじった「ゴブスレニクス」だった。

「シユコオ……シユコオ……」

今日からこれからオマエさんは「ゴブリンスレイヤー」改め「ゴブスレニクス」ゴブ！ ゴブリンスレイヤーイクスを略して ゴブスレニクスゴブウウ!!」

ゴ布林たちが大歓声をあげる。

「俺の名は……ゴブスレニクス……」

噛みしめるようにそう言うゴブリンスレイヤー改めゴブスレニクス。

「早速気に入って貰えたようで ゴブたちも満足ゴブ！

さてさてすっかりイケメンになったゴブスレニクス どうやらオマエさんは「記憶喪失」の疑いがあるゴブ」

「シユコオ……シユコオ……」

でもでも安心するとイイ 同族のゴブたちが付いているゴブからな！」

「そいじゃあオマエさんは とりあえず詳しい診察を受けるために今から「マッドマツデイクス診療所」に……」

その時、胃の中が空っぽだったゴブスレニクスのお腹が、ぐうううと鳴った。それに合わせてゴ布林たちのお腹もごぶうううと鳴る。

「……その前にひとまず食事にするゴブ！ 腹が減っては仕事も趣味も 記憶を取り戻すこともできないゴブ！ それじゃあ さつさと

向かうゴブ！」

そうしてゴ布林たちはウンウンと頷くと、再びクックノックス大食堂を目指して移動し始めた。腹が減っては仕事はできぬ、趣味もできぬ、過去を思い出すこともできぬ。そんな唄を即興で歌いながら、ゴ布林たちはゾロゾロと食堂に向かうのであった。

そして、そんなカレらに連れられたゴ布林スレイヤー改め「ゴブスレニクス」も、フラフラと食堂へ移動するのである。

*

*

クックノックス大食堂では、ゴ布林たちが整然と列を作り、専用のトレーを持ってワイワイと順番を待っていた。

中には愛用の自家製トレーを持っているゴ布林もいるらしく、木製だったり、金属製だったり、なんだか良く分からない素材だったり、実に多種多様な装いだった。

そしてその最後尾に、ゴブスレニクスは並んでいた。

なぜこんなことになったのか自分でもよく分からない。流れに身を任せていたら、いつの間にかこうなっていたのだ。

一緒に連れられてきたゴ布林たちに促されるまま、用意されていたトレーを持ち、列に並ぶゴブスレニクス。瞬く間にゴブスレニクスの後ろにも、ゴ布林たちの長蛇の列ができた。

前にもゴ布林、後ろにもゴ布林、右にも左にもゴ布林ゴ布林。地面を覆い尽くさんばかりのゴ布林の群れに、ゴブスレニクスは思った。やはりこれは、俺も「ゴ布林」なのか？

ゴ布林の数は、ぱつと見ただけでも余裕で「百」は超えていた。下手をすれば「千」に届いているかもしれない。しかもそれは食堂にいるゴ布林だけの話で、普通に考えればもっといるであろうことは、容易に想像できた。

何故だか理由は不明だが、ゴブスレニクスはその事実に言い知れぬ恐怖心を抱く。なぜこんなにも「ゴ布林」たちがいることが怖いのか、さつきまでの体調不良とは違う理由で、体がブルブルと震えた。

「シユコオ……シユコオ……」

そうビツクリするもの無理ないゴブ なにせ「記憶喪失」ゴブからな

でも安心するとイイゴブ 別にここに危険はないゴブよ 美味しい食事があるだけゴブ」

それでもゴブスレニクスの震えはとまらなかつた。言いようのない複雑な感情が彼を支配する。

人知れぬ原生林の奥底で、ゴ布林たちが社会を形成し、文化を築いている。規律だった行動をし、明らかな秩序が生まれていた。あのゴ布林が文明化している。あの「ゴ布林」がだ。

ゴブスレニクスはそれが何よりも恐ろしかった。だがしかし、どうしてこんなにも恐ろしいと感じるのか、それが分からなかつた。

記憶の中が真っ白で、何もかもがフワフワとしている。そんな中でも僅かに浮かんでくる情景は、薄汚い格好をして、卑しく顔を歪めた小鬼の姿だつた。

そうだ、「ゴ布林」と呼ばれる生物は、そんな下劣で卑猥な種族だつたはずだ。「俺」の周囲にいるこの「マスクをしたゴ布林」は、本当に俺の知っている「ゴ布林」なのか？ 俺は何かどうしようもない勘違いをしているのではないか？

ゴブスレニクスは頭を押さえこんだ。「マスクをしたゴ布林」。何処かの誰かに、そんなゴ布林の話聞いた気がする。

確かそれは――

「グツ……」

頭蓋骨の奥から激痛が響き、浮上しそうだつた「記憶」が沈殿していく。どうやら「過去」を思い出すには、もう少し時間がかかるようだつた。

いつの間にかゴ布林たちの列は短くなつていて、その大群の割にはスムーズに消化されていた。気付けばもう、ゴブスレニクスの番になつている。

鼻が曲がりそうになるほどに独特な匂いがゴブスレニクスに襲いかかり、彼の嗅覚を死滅させた。なんとという匂いだろうか。とても

じやないが食欲をそそる匂いではない。独特すぎて吐き気がしそうだった。

悶絶するゴブスレニクスに、マスクの上にわざわざマスクをした給養ゴブリンが、カウンター越しに訊いてくる。

「シューココオ……シューココオ……」

ん？ オマエさん あんまり見ないマスクゴブね 新顔さんゴブか？」

「あ、ああ……ゴブスレニクスという……」

「ゴブゴブ そうかそうか 「ゴブスレニクス」ゴブか 中々イカした「名前」に「マスク」ゴブ オマエさんは体が大きいから いっぱい食べるゴブ！ さあたーんとお食べ！」

給養ゴブリンがお皿にドカツと「何か」を入れて、ゴブスレニクスに渡してきた。お皿にはドロっとしてグチャっとした粥状のモノが山盛りに盛られている。

これは食べ物なのか？ ゴブスレニクスはその摩訶不思議な不定形の物体を見て思う。

これはゴブリンたちの日常的な朝食「ゴブビール」だった。見た目も味もゴブリン好みの味付けで、ゴブリンたちにはお馴染みの料理だ。ちなみにニンゲンが食うものではない。

目眩がしつつもゴブスレニクスがさらに前に進む。

進んだ先にいたのは、これまたやっぱりマスクの上にマスクをした給養ゴブリンで、素早い手付きでゴブスレニクスのトレーに「何か」を載せてきた。

「シューココオ……シューココオ……」

オマエさんツイてるゴブな！ 大人気の「ラプトルの臭み焼き」はオマエさんで最後ゴブ この後は残念無念の「ボイルドエッグ」ゴブ！」

ええーそんなー殺生なく！ と後ろのゴブリンがショックで叫ぶ。ものスゴイ異臭を放つ肉塊が、ゴブスレニクスのトレーに載せられていた。

「……交換するか？」

ゴブスレニクスが後ろに並んでいたゴブリンに訊く。

「えっ!? ホント良いゴブか!?

いや〜オマエさんととていいゴブリンゴブな! ありがとサン
キュー愛しているゴブ!」

ゴブスレニクスはボイルドエッグを受け取って、前へ進んだ。進んだ先にいたのはやはりマスクの上にマスクをした給養ゴブリンで、ゴブスレニクスにも見覚えのあるものを配っていた。

少なくとも、見た目だけはゴブスレニクスが知っているモノだった。

「これは……チーズか?」

給養ゴブリンに訊く。

「シユココオ……シユココオ……」

その通り いう通り ご明答 これはゴブリン秘伝の「ゴブリン
チーズ」ゴブ

ステキな匂いに ステキなお味 きつとオマエさんも夢中になる
ゴブ」

しかしながらゴブスレニクスには、とてもじゃないが夢中になれ
そうな匂いはしなかった。ツンと刺激する腐臭がゴブスレニクスの鼻
を貫く。

配給はこれで終わりのようで、後は思い思いのドリンクをセルフで
選ぶだけのようだった。独特な色と匂いのお茶や、赤黒い謎の液体、
青白いボコボコした飲み物など、兎に角いっぱいある。どれもゴブス
レニクスの舌には適しそうにもない。

幸いにも「水」があつたので、ゴブスレニクスはそれを側に備えて
あつた容器に入れた。水は信じられないくらいに冷たく、容器越しで
もその冷気を感じ取れた。驚くべきことだが、飲料水は幾らでも飲め
るようだ。

食堂の席はゴブリンたちで埋め尽くされていて、ワイワイゴブゴブ
と仲睦まじげに会話を交わしている。

ゴブスレニクスは一瞬立ち止まり、空いている席を探した。

「シユココオ……シユココオ……」

「おーい おーい ゴブスレニクス！ そうだそうだ こっちだゴブ」

一緒に食堂に来ていたゴブリンたちが、そう言つて手招きしてくる。

他に空いている席もなさそうだったので、ゴブスレニクスはフラフラとカレらの元へ向かった。

ゴブスレニクスが席につくと、ゴブリンたちは思い思いに適当な祈りを捧げて、食べ始めた。ゴブスレニクスもそれを真似て、トレーに乗っている朝食らしき物体を食べ始めようとする。

「……………」

マスクが邪魔で、上手く食べることができない。無理やりマスクの隙間から食べようとする、隣のゴブリンがヤレヤレと様子で言ってきた。

「シユココオ…………シユココオ…………」

なんだなんだオマエさん その様子じゃ ゴブリン流の食べ方も知らないゴブか？」

「……………すまない、そのようだ」

「まあまあ 謝ることはない そんなことはない

オイラが教えてあげるから ちょっと真似してみるゴブ さあ！

「こうゴブ」

「こうか？」

「いやいや こうゴブ！」

「……………こうか？」

「おいしい！ こうゴブ!!」

「……………こうか？」

「おおー そうゴブ そうゴブ！ オマエさん 中々に飲み込みが早いゴブな！ それならスムーズに食べれるゴブでしょ？」

「ああ、そうだな」

そんなわけでゴブリ流食事法マスターしたゴブスレニクスは、ゴブリンほく食事を再開した。

まずは「水」——乾ききった体に、冷えきった水が染み渡る。色だ

けではなくその味までも澄み切っているようだった。非常に美味しい。こんなに美味しい水を飲んだのは初めてだったかもしれない。記憶喪失だが。

続いて「ポイルドエッグ」——普通の固茹で卵の味がした。ハードポイルドな感じがする。良質なタンパク質を摂取したからか、鋭気が戻ってくる気がした。

次に「ゴブミール」——ワナワナと震えるスプーンでそれをよそう。マジマジと見つめる。見つめて、意を決してそれを食べる。咀嚼。匂いの割には味はしなかった。無味だ。何の味もしない。

最後に「ゴ布林チーズ」——記憶はないが、自分は乳製品に少し拘りがあるようだ、とゴブスレニクスは自己分析する。鼻が曲がるほどの恐ろしい臭いだが、もはや嗅覚は麻痺していた。食堂中に匂いが充満しているのだ。ゴクリと息を呑んで食す。

「こ、これは!?!」

確かに匂いは果てしないが、その分コクが段違いだった。

思わずゴブスレニクスがガタツと立ち上がる。長身のカレが立ち上がると、食堂中のゴブリンの注目の的だった。

ゴ布林たちが何だ何だつとゴブスレニクスを見つめる。そしてゴ布林たちの視線を集めるゴブスレニクスは、そのまま何も言わずスツと座った。一瞬間があったのち、何事もなかったかのように、ゴ布林たちの食事が再開される。それくらい衝撃的な「味」がした。思ったよりもイケるものだな……ゴブスレニクスは静かにそう思う。嗜好が一致するなら、やはり俺はゴ布林か？ そんなことさえも考えてしまうゴブスレニクスであった。

「シユコオ……シユコオ……」

どうやらどうやらその様子 すっかりこつきり気に入ったみたいゴブね」

「外ゴ布林」の口に合うか心配だったゴブが 杞憂だったみたいゴブ」

黙々と平らげるゴブスレニクスを見て、ゴ布林たちはそう言った。

「その「外ゴブリン」というのは？」

「ああ オマエさんは記憶喪失だから忘れてしまってるのかもしれないが オマエさんは 森の外から来た「外ゴブリン」なのゴブよ」

「森の、外のから来た？」

「そうゴブ そうゴブ」

オマエさんは リトルシャイア初めての 「外から来たゴブリン」ゴブ 初ゴブリンゴブ」

「アンタたちとは違うのか？」

「全然そんなことはないゴブ！ 確かに見た目はちよいと違うが ゴブたち一緒のゴブリンゴブ！ みんな同じお仲間さん」

「……そうか」

ゴブスレニクスはズズツと「ゴーブミール」を啜って答えた。

「なににせよどうにせよ 腹ごしらえが終わったら 一度「診療所」に行ってみるゴブ！ きつとそこで オマエさんの「記憶喪失」をどうにかする方法も 見つかるゴブ！」

「……ああ、そうだといいな」

もう一度ゴブスレニクスは「ゴーブミール」を啜った。全く味はしなかったが、思ったよりも美味いと感じた。

ゴブリンのような人間

「これは 心因性の記憶障害ゴブね」

白衣を身にまとい、ひととき大きなモノクルサイトを、赤く、怪しく発光させているマッドマツデイクスが、ゴブスレニクスにそう下した。

さながらマッドマツデイクスの姿は、マッドサイエンティストのよ
うな風貌である。それもそのはず。かのマッドマツデイクスは、その
名が示す通り、リトルシャイアーのマッドなサイエンティストなので
ある。

「心因性？」

僅かな間があつた後、ゴブスレニクスが問う。「記憶障害」という意
味はなんとなく理解できるが、「心因性」という言葉は初耳だった。

「精神的ストレスや 心的外傷トラウマによって引き起こされる 症状全般の
ことゴブ

おそらく きつとオマエさん 相当怖い目にあつたゴブよ」

マッドマツデイクスが両手をジタバタさせて答える。何かのジェ
スチャーぽくもないが、特に意味はなようだ。ゴブリンの伝統的な会
話法である。

「治るのか？」

最も重要なことを、ゴブスレニクスが質問する。

「もちろん もちろん 治るゴブ！」

脳波に異常はないないゴブし 認知症や解離性障害の疑いもない
ゴブよ！

極度の精神的ショックによる 一時的な記憶喪失だろうゴブから
そのうち自然と治るゴブ！」

「……そうか」

そうゴブスレニクスは、吐き出すように小さく呟いた。

「シユココオ……シユココオ……」

それでも これでも いろいろと 不安でしょう 心配でしょう
それなら これなら 提案が！

やるなら やるなら 催眠療法や薬物治療 あるあるゴブが
いがゴブ？

マッドマツデイクス的には 是非とも被検体になってくれると
ハッピー嬉しい ありがたいゴブ！」

そう言われてゴブスレニクスは、さつきから部屋の片隅にさり気な
く置かれている、〃怪しげな催眠道具〃や〃ボコボコ泡出すヤバめな
薬品〃をチラ見した。

もしかしなくとも、嫌な予感がする……。

ゴブスレニクスは再びマッドマツデイクスと向き合うと、きつぱり
とした口調で言った。

「いや、それは遠慮しておこう」

「シユコオ……シユコオ……」

そうか そうか そうゴブか

上手くすれば ゴブリ医学の発展に 大きく大きく貢献できる
チャンスだったゴブが 嫌と言うなら仕方がない 残念ゴブ」

マッドマツデイクスが、心底残念そうなマスクをする。

そんな様子を見て、ゴブスレニクスは少しだけマッドマツデイクス
に悪いと思ったが、大部分のところでは、〃懸命な判断だった〃と
思っていた。

「なんにせよ 日常生活を送る分には 全く支障はないゴブから

あんまり そんなに 焦らずに 長い目で治療していくゴブ

記憶喪失になったゴブリンは とてとてレアなケースゴブしね」

マッドマツデイクスの知識欲に染まりきった赤いレンズが、ゴブス
レニクスをジツと捉える。僅かに背筋がゾツとする感覚がした。

「シユコオ……シユコオ……」

そういえば こういえば オマエさん 外から来たゴブリンだっ
たゴブね？」

「……ああ、どうやらそのようだ」

記憶があやふやな上に、自分がゴブリンであることに違和感是有り
まくりだったが、周りのゴブリンたちが言うには、どうにもそうらし
い。

「ならオマエさん リトルシャイアは初めてゴブな？」

「ここには “働かざる者食うべからず” という「法」があるゴブ 記憶喪失といえども ここで暮らしていくなら 働かないとご飯は食べれないゴブ」

悠々自適でマイペースに見えるゴ布林社会といえども、ニートは断固として許さない主義なのであった。ゴ布林社会もそこそこ世知辛いのである。

とは言えども、リトルシャイアのゴ布林たちは生来より勤勉で、集団に対する奉仕精神が本能的に高いものだったので、殆どのゴ布林たちは、全くこの「法」を意識したことはなかった。

そんな中でも、数少ないおサボリ精神を持つゴ布林でさえ、“よい良い休息法を研究しているゴブ”、などというあからさまに怪しい名目でも、ギリギリ働いている認定されるので、カレらの基準は結構ガバガバなものだった。

何にせよ、リトルシャイアで生活するには、何らかの形で “働いて”、カレらの社会に “貢献” してはならない。それがたとえ、記憶喪失中のゴ布林であっても、だ。

「シユコオ……シユコオ……」

そんなワケで こんなワケで ゴブスレニクス

オマエさん なにか好きな「仕事」や「趣味」はないゴブか？」

マッドマツデイクスの問いに、ゴブスレニクスは一瞬考え込む。しかし、考える必要などないことに直ぐ気付いた。

「ない……と思う。なにせ記憶がないものでな」

「そういえば そうだったゴブね なんとも記憶喪失つてのは 難儀なものゴブ」

まあこの際 いい機会だと思って いろいろ試して 好きなコトを見つけてみるみるゴブ

最悪 マッドマツデイクスの実験体……ゴブンゴブン ゴブが面倒みてやってもいいゴブ」

「いや、それは遠慮しておこう」

秒で断るゴブスレニクス。心底残念そうなマスクをして、マッド

マツデイクスはガツカリした。

「シュココオ……シュココオ……」

そういうことなら とりあえず 今後のことは「コイツ」に相談するといいいゴブ」

そう言うマツドマツデイクスが、おもむろにピコンつと三次元ディスプレイを起動してみせた。青白い光線が軌道を描き、空中に何か投影していく。はたして現れたのは、何処にでもいそうな至って平凡なゴブリンだった。

空間に映し出されたゴブリンが、ゴブスレニクスの目の前でクルクルと回旋している。

「彼は？」

ゴブスレニクスが仰ぎ見て訊いた。

「その名も この名も カレの名は “アルデニクス” というやつゴブ！」

「アルデニクス？」

「何かとゴブたちの世話を焼く まあ一種の相談役みたいなやつゴブ 大抵の困りごとは コイツに丸投げ……任せるのが この流儀ゴブ

きつと力になってくれるでゴブよ！」

投影されていた立体映像が、マツドマツデイクスの「丸投げ」という言葉に反応したのか、「えっ!？」というリアクションをした。まるでこの場にいるかのようにリアルな反応だ。

「……そうか、わかった」

ビツクリする3Dアルデニクスを華麗にスルーして、ゴブスレニクスは頷く。

「シュココオ……シュココオ……」

それじゃあ マツドマツデイクスは “ムキムキマツチョになる新薬開発” とかで忙しいゴブから お大事にゴブ」

*

*

リトルシャイアの実質的な指導者リーダーと言っても過言ではないはずのアルデニクスは、今日もとてとて何処かで発生した厄介事を解決したり、ゴブリンたちに悩み事を相談されたりして、いそいそ忙しくしていた。

さながら、アルデニクスが憧れる「光の戦士」のような仕事ぶりだ。かの「光の戦士」にまつわる様々な逸話は——正に八面六臂に大活躍な、スーパールトラな逸話だ——話に聞くだけでは「スゴい」とか「立派だ」としか思えないものであったが、こうして我が身になって体験してみると、中々どうして大変である。

あつちでゴソゴソこつちでゴロゴロ、そつちもこつちもシツチャカメツチャカ、いそいそせわせわ忙しない。しかし、それでもアルデニクスは気にしない。大変だからって気にしない。憧れの光の戦士だつて、きつとそう思ったに違いない。

そんなアルデニクスのところによって来ましたは、何を隠そうゴブスレニクス。無口いえども無駄に存在感溢れるゴブスレニクスの気配に、素早く気づいたアルデニクスは、その姿を見るなり衝撃を受けた。

どどどどうしてこんなところにニンゲンさんが!? これはビツクリたまげたな!

そう、それなりに世間に詳しいアルデニクスは、ゴブスレニクスの正体を、見事に一発で見破ってみせたのだ!

実はゴブスレニクスの正体は、ゴブリンではなく「人間」だったのだ! いわゆる、ゴブリンのような人間ってヤツである。エオルゼアを西へ東へ旅をして、“外”の世界をよく知るアルデニクスにしてみれば、ゴブスレニクスの正体を見破ることなど、朝メシ前だったのであった。もつとも、もう朝メシは食べてしまっていたので、朝メシ前ではないのだが……。

アルデニクスのところに来たゴブスレニクスは、どこからどう見ても鎧を着た「ヒューラン♂」だった。確かに着込んでいる装備は標準的なゴブリン装備に似てなくもないが、明らかに骨格が人間の“ソレ”である。一体全体、いつの間に紛れ込んでしまったのか。

「シユコオ……シユコオ……」

オマエさん オマエさん このこのアルデニクスに ナニナニ何か 用ゴブか？」

とはいえ決して慌てることなく、慎重に言葉を選んでアルデニクスは問いかける。ニンゲンさんが紛れ込んでしまったのは由々しき事態だが、まだ慌てるような事態ではないし、時間ではないのだ。

「俺は、ゴブスレニクス……マッドマツディクスに、ここに行けと言われて来た。ここでアルデニクスというゴブリンに相談しろ、とな。ア
ンタがアルデニクスで合っているか？」

「……そうゴブ そうゴブ そうゴブよ！」

ゴブがアルデニクスで合ってるゴブよ！

さてさて ならなら ゴブゴブゴブ アルデニクスに相談とは

いったい全体なんの相談ゴブ？」

ゴブスレニクスの見た目はどう見てもヒューラン♂だったが、見た目がヒューラン♂だからといって、アルデニクスは特に鼻屑はしないゴブリンだった。

世界はとてとて広く、ゴブリン以外の種族もとてとていっぱいいる。むしろ全体から見れば、ゴブリン族はまだまだとてとて少数派だろう。そのことを、世界中を旅してきたアルデニクスは、良く良く理解していた。

だから、どう見ても人間であるゴブスレニクスにも、いつもと変わらぬ姿勢で対応する。

ゴブスレニクスがなにゆえここまで迷い込んでしまったのかは、まだ分からない。しかし、どうやらお手製のゴブリン装備を身にまとっているようだし、名前の雰囲気もゴブリンぽかったから、きつと志を共にする「同志」なのだろう、とアルデニクスはこっそり得心した。

彼の地——リトルシャイアのモデルにもなった——「イディルシャイア」でも、こういったことは良く良くある話だったし、まあギリセーフだろう。

「どうやら俺は、記憶喪失らしい」

突然の衝撃発言に、アルデニクスはびつくらこいたりアクションを

した。まさかまさかの初手爆弾発言である。

「あれま それは 一大事！ いったいナゼナゼそんなことに!？」

「分からない。マッドマツディクスには、〃心因性の記憶障害〃と言われたが……」

そう言われただけで、エオルゼアの冒険者でもあるアルデニクスは、大体のことをまるっと察した。エオルゼアでの冒険者稼業において、察しが良いことは必須技能である。察しが良くなければ、到底生き残ることはできない。ましてや、何かと言葉を省きがちなゴブリン族なら、なおさらである。

「なるほど なるほど そうゴブか

それなら これなら 分かったゴブ

このアルデニクスが オマエさんの力になるなるゴブよ！」

そう言つてアルデニクスが力強く手足をバタバタさせた。その頼もし気な発言に、ゴブスレニクスといえども少しばかりは勇気付けられたし、ほっと一安心したのもまた事実だった。

あやふやな過去に拭いきれぬ違和感。ゴブリンたちが矢鱈と親切で友好的だったお蔭でパニックになることはなかったが、不安なものは不安で仕方なかったのが正直なところなのである。

「俺は、森の外から来た……ようだ」

「ほうほう ほうほう そうゴブか」

納得といった感じで頷くアルデニクス。

森の〃外〃から来たならまだしも、森の〃中〃から来たとしたら、それはとてとてえらいこつちやな事態である。危うくネオ・ファウストの防衛アルゴリズムが、大改修に迫られるところだった。

ゴブスレニクスの話は続く。

「……どうやら俺は記憶喪失らしい」

「さつきも聞いたゴブが そのようゴブね 大変ゴブ」

「……それで、記憶を取り戻したいと思っている」

「それはそれは 当然の成り行きゴブな」

「だがマッドマツディクスに抛れば、記憶は時間が経てば自然に戻るそうだ」

「おお それは良かったゴブ！ とてな朗報ゴブな！」

我がことのように喜ぶアルデニクスを見て、ゴブスレニクスは静かに頷いた。

「……それで、記憶が戻るまでの間、どうすればいいのか、身の振り方を教えてほしい」

「そうか そうか そういうことゴブか」

さてさて オマエさん 「名」は ゴブスレニクスでよかったゴブな？」

「そうだ、俺はゴ布林スレイ……いや、ゴブスレニクスだ」

何を言いかけたゴブ？ とアルデニクスは内心想ったが、空気を読んで野暮なツツコミは止めておいた。空気を読むことも冒険者の必須技能であるし、特に、アルデニクスは空気の読めるゴ布林を自称していた。

「それなら これなら ゴブスレニクス オマエさんに いくつか質問ゴブ」

オマエさん ここで暫く リトルシャイアで暮らしてみるゴブ？」
首を傾げて訊くアルデニクス。短期でも長期でも相応の “仕事” はあるが、確認しておくことに越したことはない。

「できればそうしたいと思っている。行く宛ても、今のところはないからな……」

「なるほど なるほど それは これは 大歓迎ゴブ！」

リトルシャイアにも良い刺激になるゴブから！ ゴブスレニクス
大歓迎ゴブ！」

「そ、そうか」

何やら大歓迎な様子アルデニクスを見て、ゴブスレニクスはなんだか不思議な気持ちになった。嬉しいような恥ずかしいような……もしかすると、これまで碌に歓迎されない人生……いやゴブ生を送ってきたのかもしれない。

さてさてそんなことはお構いなしに、アルデニクスはジタバタと話を続ける。

「それなら これなら ゴブスレニクス」

オマエさん 「好きなこと」や「得意なこと」はあるあるゴブか？」
マツドマツデイクスにも訊かれたが、改めて言われてゴブスレニクスは考えた。腕を組んで考えた。霞んだ記憶の中を模索して、「何が好き」で、「何が得意」だったのかを、今一度思い出そうとした。

しかし――

「……分からない」

答えはさっぱり浮かんでこない。ゴブスレニクスの記憶の中は、いまだ空っぽのままだった。

「……そうゴブか」

少しだけ悲しそうなマスクをしたゴブスレニクスを見て、アルデニクスがそう慰めるように言う。

「けれども それでも 心配するな！

分からないなら見つければいい！ 見つからないなら探せばいい！ 空っぽなら埋めればいい！

今はなんにもなくても いつか分かるさ “大切なモノ”！

アルデニクスの励ましに、ゴブスレニクスは勇気付けられのか力強く頷いた。

「ああ、そうだな」

「シユコオ……シユコオ……」

そういう こういうわけだから ゴブスレニクス ここで色々体験してみるゴブ！

そうすりやそのうち “好きなこと”も “得意なこと”も分かる

ゴブ！ そうすりやきつと 記憶も思い出も キレイさっぱり元通りゴブ！

斯くして、記憶喪失のゴブスレニクスによる、楽しい楽しいゴブリン職場体験が、始まることとなった。

*

*

ゴブスレニクスは寡黙だが誠実な性格だったようで、どんな仕事でも真面目にこなし、どんな趣味でも興味を示して、とてとて良く働い

た。

ゴブスレニクスの「防護服」の性能はそれなりで、ハッキリ言ってしまうえばイマイチだったが、その標準よりも遥かに大きすぎる体格を十分に活かして、運搬作業や採掘作業などの力仕事も、難なくこなしてみせた。

そんな精力的に働くゴブスレニクスのことを、ゴ布林たちは微笑ましく見守り、幾ばくもしない内に、ゴブスレニクスはリトルシャイアに受け入れられていった。

そんな新参ゴブリンのゴブスレニクスに、リトルシャイアのゴ布林たちは良く世話を焼いた。特に真っ先に世話を焼かれたのは、ゴブスレニクスの「防護服」である。

素材も性能も貧弱すぎるゴブスレニクスの「防護服」は、ゴ布林たちからしてみれば危なっかしいの一言で、何をするにしてもゴ布林たちをどぎまぎさせた。

それなので、ゴ布林たちは「ゴブたちでゴブスレニクスの「防護服」をなんとかかんとかしてあげるゴブ！」ということになって、そんなこんなでゴブスレニクスの「防護服」は、ゴ布林たちによって魔改造が図られることになったのである。

「シユコオ……シユコオ……」

というわけゴブから　ゴブスレニクス

何か何か　リクエスト　あるあるゴブか？」

「このまま、という選択肢は——」

「ないないゴブよー！」

「……そうか」

ゴブスレニクスは謙虚なのか、あるいは自身の装備に無頓着過ぎるのか、どういうワケかゴ布林たちの提案を頑なに拒否しようとしたが、やる気その気元気になったゴ布林たちの暴走を止められるほどではなく、最終的には折れる形になった。

あれも、これも、それも、どれも……終いにはドンドン悪ノリし始めて、そのあまりにもアレな性能に、ゴブスレニクスは「敵に奪われた場合の危険性について云々カンヌン」と力説を述べて改めて固辞

しようしたが、「生体認証システムにおける盗難防止機能」とかいう意味不明な説明を受けて、見事に轟沈した。

斯くして、ゴブスレニクスの「防護服」は、見た目こそ全く変化はないが、もはや別の「何か」に変態した。

「シユコオ……シユコオ……」

——そんなワケで 以上で「真・防護服」の機能説明を終わるゴブが 何か質問あるあるゴブか？」

「……いや、ない」

とはいえ、それをゴブスレニクスが使いこなせるかどうかは、別問題である。

リトルシャイアのゴ布林たちには、各々に「個室」が与えられていて、もちろんゴブスレニクスにも「個室」があてがわれていた。

ゴ布林たちの「個室」には、生体認証で入る扉以外には、出入口と呼べるものは全くなく、容易に中の様子は窺えないようになってきている。それは、「素顔」に関して強烈な忌避感を持つ、ゴ布林族ならではの風習からであり、「個室」は、嚴重なまでにセキュリティが敷かれ、プライバシーが確保されていた。

新参ゴ布林であり、数少ない外ゴ布林だと思われるゴブスレニクスは、想像以上に注目の的であり、さらには防護服の一件で、それなりに人気者になっていたためか、ゴブスレニクスが一人になれるのは、その「個室」に入っている時だけだった。

ゴブスレニクスにとって、一人になれる時間が少ないのは、なんともむず痒く、複雑な気分させるものだったが、決して悪いモノとも感じなかった。

記憶は掠れてしまっていて、まだ思い出すことはできないが、ゴブスレニクスはずっと一人ぼっちでいた気がする。

僅かに浮かんでくる思い出の中に友達はなく、もちろん、その中に仲間と呼べる者もない。それは、ただ単に記憶喪失のせいなのかもしれないが、それだけが原因ではない、とゴブスレニクスは感じていた。

それに対してここリトルシャイアでは、共に働くゴ布林たちに溢

れ、仲間も多く、友達も、もしかしたら出来たのかもしれない。四六時中一緒にいるカレらは、こんな風に言うのは気恥ずかしいが、もしかするとこれが、家族と呼べるものなのかもしれない、とゴブスレニクスは思うようにまでになっていた。

ゴ布林たちは仲間意識が高いながらも、プライバシーというものを大切にしていた。厳重なセキュリティを誇る「個室」の存在もそうだが、決して「素顔」というものを詮索しようとはしないという部分に、それが良く現れているだろう。

ゴブスレニクスにとってそれは、とても新鮮な感覚だった。

“前にいた場所”では、ゴブスレニクスのマスクは何かにつけて脱がされそうになるモノで、「素顔」は常に危機に晒されているものだった。みんながみんなゴブスレニクスの素顔が気になって、ことあるごとに覗き見しようとしていたのだ。

ゴブスレニクスがそのことをゴ布林たちに話すと、カレらは口々に「なんて鬼畜な所業なんだゴブ！」と憤った。ゴ布林たちにとって、素顔を探ろうとするのは、万死に値する極罪なのだ。

別にゴブスレニクスにとっては、素顔を詮索されることは、そこまでする嫌なことだとは思っていないが、ゴ布林たちの反応ももつともだと思っていて、そしてどちらかといえば、下手な詮索をしないゴ布林たちの方が、より好ましいとさえ感じていた。

リトルシャイアの生活は、ゴブスレニクスにとって充実したモノで、心地よいものであった。夜、安心してぐっすり眠れたのは、とても久々なことだった気がする。

ここにはやるべき“仕事”がいくらでもあり、興味深い“趣味”がいくらでもあった。前いた場所では、やるべき事は“一つ”しかなかった。いや、やらなくてはいけない事だったかもしれない。

またゴ布林たちは、“学び教える”ということに至上の喜びを見出しており、新入りゴ布林であるゴブスレニクスに対しても、積極的に教育を行ってくれた。

医学、薬学、農学、錬鉄術、数学、物理学、機工学、ゴブリ科学などに代表される一般学問から、錬金術、魔術、魔法、魔科学などの神

秘学、音楽、美術、文学などのゴブリ芸術……多くの場合は、ゴブスレニクスには高度すぎて、一朝一夕では理解できない内容ばかりだったが、実践的な部分に関しては、ゴブスレニクスはよく学び、よく習得した。

ゴブリ火薬の調合や使用法、「青燐水」という燃える水、そしてその利用法、ゴブリタンクなどの乗り物の操縦法などが主な「ソレ」だ。

現在リトルシャイアでは、中心部にある古代遺跡である「リトルシャイア城」の改修工事が急ピッチで進められており、それゆえゴブスレニクスの成長はとてとてみんなに歓迎された。働き盛りのゴブリンは、いくらでも必要だったのだ。

リトルシャイア城の改修工事には、働きゴブリンも趣味ゴブリンも一丸となって作業に参加していて、これまでにない一大事業となっていた。

リトルシャイア城は古い建物でもあるせいか、「城」というよりは小さな「塔」のようにしか見えないショボイものだったが、ゴルダナルのゴブリンたちにとってこの城は、「最初の家」であり「文明発祥の地」でもあったので、とてとて大切にされて親しまれていたのだ。

リトルシャイアの住民の一員として、ゴブスレニクスもこの名誉ある仕事に率先して参加し、とてとて真摯に作業した。

そうしてこうして、リトルシャイアでの日々は過ぎ去っていき、空っぽだったゴブスレニクスにも、「好きなもの」や「得意なもの」ができていった。いやもしかすると、ただ単に思い出してきただけなのかもしれないが……。

ゴブスレニクスは主に力仕事や農作業など、体を使う仕事を良く好んだ。また、研究者基質なのか知識の習得に貪欲で、良くベテランのゴブリンたちに質問したり、自ら実験を行ったりもしていた。趣味に關しても、どうやら「謎かけ」に關心があるらしく、良くゴブリンたちに謎かけを出して四苦八苦させていた。

だが、その中でも特に積極的だったのは、「ミートイートミート」に棲む家畜たちの世話で、もう滅多に外敵など出なくなつたというのに、毎日律儀に夜明けとともに牧場の見回りをして、破損した柵がな

いか調べたり、外敵の足跡がないか探すなど、まるで生来の仕事であつたかのように、熱心に取り組んだ。

「こうして牧場の仕事をしていると、なぜだか心が落ち着く……」
ちようど様子を見に来ていたアルデニクスに、ゴブスレニクスはそう吐露した。

そんなゴブスレニクスをマジマジと見て、アルデニクスが言う。

「シユコオ……シユコオ……」

もしかするとオマエさん 外の世界では 牧場とかで 働いていたのかもしれないゴブ

とてとて手付きが 慣れてるゴブ」

「そうか？」

「そうゴブ そうゴブ！」

筆頭管理ゴブリンのシエパーラポクスも えらく褒めてたゴブ！

「ゴブスレニクスは 生まれつきの畜産家ゴブな”って！」

「……そうか」

言葉は濁したが、言われて悪い気持ちはしなかった。

穏やかな風が吹き、木々が揺れる。実に長閑な雰囲気だった。どこか懐かしい、不思議な気持ちがある。

もしかすると本当に、ゴブスレニクスはかつて牧場で働いていたのかもしれない。もしくは牧場に住んでいたか……。

「それにしても、ここには「牛」はいないのだな」

牧場を眺めながら、ゴブスレニクスはふとそう言った。

ゴブリンたちの牧場には、山羊や羊、豚、兔、鶏、養蜂、はてはウルフやラプトルなどの魔獣も飼われていたが、唯一「牛」だけはいなかった。

「シユコオ……シユコオ……」

ゴルダナル大森林 色々な獣 色々な魔物 いっぱいたくさん棲んでたゴブが

けれども けれども モーモー 牛だけは見つからなかったゴブ
残念無念また来世ゴブ

ゴブスレニクスは 牛のコト 知ってるゴブか？」

「ああ、良く世話をしていた……と思う」

ゴブスレニクスにとって「牛」は、とてとて慣れ親しんだ家畜だったようだ。牛の乳で作ったチーズとシチュー……思い出の中にある、とても優しく懐かしい味。ゴブスレニクスはそれが大好物だった。

「シユココオ……シユココオ……」

それならこれなら 今度クックノックスに頼んで 作ってもらおう
といいゴブ

牛の乳はないけれど 他の乳でいいのなら レシピさえあれば
クックノックスなら作ってくれるゴブ」

「そうか？ では、期待しておこう」

ゴブリンたちの料理は、多くのものが無味乾燥で味気ないものや、独特すぎて得体の知れないものが多かったが、乳製品に関しては、ゴブスレニクスの口にまあまあ合っていた。中でもゴ布林チーズなどは、時折、禁断症状が出てしまうほどに大ヒットである。

しかし、そうは言ってもその他の食品に関しては、残念過ぎる場合が殆どで、ただのゴ布林にとってはそうでもなかったが、ゴブスレニクスにとってみれば要改善事項であった。あまり食事に頓着しないゴブスレニクスであっても、だ。

そういったワケで、早速アルデニクスのアドバイスを実行に移したゴブスレニクスは、なんとか思い出したレシピをクックノックスに伝えると、少しだけヴァリエーション豊かな食事が出されるようになった。

ゴブスレニクスの食事情が、多少なりとも改善された瞬間である。

このように、ゴブスレニクスがゴ布林たちの知識を吸収する傍ら、ゴブスレニクスの持つ知識も、少しずつではあるがリトルシャイアの中に浸透していった。外の世界に興味津々なゴ布林たちは、よくよくゴブスレニクスの言葉に耳を傾け、積極的に自らの文化に吸収していったのだ。

ゴブスレニクスの持つ知識は、多くの場合、既存のものであることが多かったが、「古きを知り 新しきを知る」を合言葉に、ゴ布林た

ちは決して無碍にはしなかった。

そうやって新たに取り入れられた知識や技術は、「外界風」とか「ゴブスレ流」などとも呼ばれ、リトルシャイアのゴ布林たちに慣れ親しまれていった。

ゴブゴブ言わない「外界風」の喋り言葉や、あまり派手でない古風な見た目のマスクと防護服——ゴブ並外れた身長や、ゴ布林らしからぬ寡黙な性格も相まって——ゴブスレニクスは一躍リトルシャイアの人気者に躍り出ることとなる。

リトルシャイアのゴ布林たちは、どうにかこうにか「ゴブゴブ」言わない喋り方をマスターしようとしたり（しかし、当然ながらどう頑張ってもゴブゴブ言ってしまうサガだった）、わざわざ見た目を古風なマスクと防護服に換装したり、若者ゴ布林たちを中心に、ゴ布林たちはこぞってゴブスレニクスの真似をしようといった。

なんやかんやで、ゴブスレ流の一大ブームの幕開けである。

渦中のゴ布林であるゴブスレニクスは、当然ながら、空前の人気者となり、少しばかり口数が少な目のゴブスレニクスであっても、そんなことはお構いなしに、ゴ布林たちは良く良く話しかけた。

あれこれ、それこれ、どここれ、そここれ……主に訊かれたのは、やっぱりゴブスレニクスの「記憶」に関することで、外の世界に並々ならぬ関心を持つゴ布林は、ゴブがゴブがと我先に話を聞いた。

少しだけ思い出してきた記憶を頼りに、ゴブスレニクスは静かに語った。

「……多分俺は、牧場に住んでいた。そこには多くの牛がいて、毎日の食事はその牛の乳や肉を食べていた」

「ほえええ 外の世界もゴブたちと あんまりそんなに 変わらんゴブのね」

「ゴブゴブ 外の世界の牧場はどんなだったゴブか？」

「やっぱり完全自動式で ライン工のごとく管理されてたゴブか？」
「いや、ここよりももっと古くて、昔ながらと言わなければならないと思う。視界の果てまで牧場が広がっていて、木でできた柵があり、その中に家畜がいて、牧草を食べる。俺は主に、その修理保全を行って

た……と思う」

ゴブスレニクスの話に、ゴブリンは盛りに盛り上がった。

「ゴブウウ そうなのか そうなのか

それなら これなら 牧場は オマエさんだけで 管理していた
ゴブか？」

「……分からない。ただ、このようにハーベストドールの手を借り
ていたワケではないと思う」

ハーベストドールとは、パンツアードールを農作業用に改良した、
非戦闘用機械人形のことだ。

「シユココオオ……」

そこらへんは ちよつとちよつと 遅れているゴブのかね」

「シユココオ……シユココオ……」

それは それは 当然のことゴブ！

なにせ なにせ 外の世界とは あの「見習い冒険者」級が跋扈す
る 混沌の地ゴブよ！

きつとゴブたちみたい な テクノロジーに頼らなくても やつて
いけるんだゴブ！

な！ ゴブスレニクス！」

「……すまん、どうだったのかは、よく思い出せない」

少なくとも、ハーベストドールのような機械人形はなかったと思われ
る。

ゴブスレニクスは、更に記憶を探った。

「……確か、俺以外にも誰かがいたはずだ……赤い髪をした……「誰
か」……そして、それと一緒にいる、「誰か」が……」

だがその顔も名前も、日差しに照らされた「影」のようになってい
て、思い出すことができない。とても大切な誰かだったはずなのに、
忘れてはいけない大切なヒトだったはずなのに、思い出すことができ
ない。

「シユココオ……シユココオ……」

ここにきて そこにきて まさかの「赤毛」とは

きつとゴブスレニクスは その鬼のような赤毛に こき使われて

いたに違いないゴブ！」

ゴブリンたちにとつて、「赤毛」は鬼門だった。「赤毛」は色々な意味で不吉の象徴だ。良いことにしろ、悪いことにしろ、碌なもんじやない。

「……そうなのか？」

ゴブスレニクスは首を傾げた。

ゴブリンに「赤毛」が忌み嫌われていたとは、初耳だ。ゴブスレニクス的には、「赤毛」には良い印象しかなかった。とても優しい、安らく印象だ。

「きつと そうゴブ！ そうゴブ！」

きつと きつと ゴブスレニクスは

そこで受けてた ヒドいヒドい仕打ちに もうマヂ無理 耐えきれず

どうにか こうにか 命からがら 飛び出して 自由奔放 出奔

逃奔！

ほうほう体で逃げ落ちた その先 この先 あの先が

ここそこ そこここ リトルシャイアだったゴブ！

記憶を失ってしまったのは きつと その悪しき過去を忘れ去るため そして 安堵感からゴブな！」

「……そう、なのか？」

熱弁するゴブリンの気迫に若干引きつつも、ゴブスレニクスは真面目に受け答えた。

「シュココ……シュココ……」

そんな冗談はさておいて 消えてしまった記憶の片隅にいるということは

きつと きつと ゴブスレニクスにとって “大切なヒト” だつたに違いないゴブ！」

同席していたアルデニクスが、“大切なヒト” という部分をさり気なく強調して、おもむろに言った。上手いこと誘導して、ゴブスレニクスが記憶を思い出すのを手助けをしてあげようという、アルデニクスなりのゴブ心からだつた。

「大切な……か」

「それなら これなら もしかすると

その赤毛は ゴブスレニクスの番つがいだったゴブかもな！」

若者ゴブリンが、茶化すように言う。

「番？」

「恋人とか 結婚相手とか そんなステキな相手のことだゴブ

ゴブスレニクス オマエさん ニンゲンを番にするだなんて 命

知らずというか 隅に置けないやつゴブね！」

他の若者ゴブリンが、そう鼻息荒く付け加えた。

「赤毛を番とか パネエゴブ！」

「ゴブスレニクス パネエやつゴブ！」

ジタバタと興奮した様子で言うゴブリンたち。

「モテモテ ゴブスレニクス 羨まけしからんゴブ

ちよつとや そつとくらい ゴブたち非モテゴブリンにも 分け

てほしいゴブ」

一躍時のゴブリンとなっていたゴブスレニクスは、その個性的な見た目も相まって、中々にモテモテのゴブリンだった。なんでも、物静かでクールな感じが、今どきのゴブリン娘にウケウケらしい。ちなみに、クールなゴブリンも物静かなゴブリンも、本来なら存在しえない。

「別に俺はモテたいわけでは……」

「カーッ！ やっぱりモテるゴブリンは 言うことが違うゴブね!？」

嫉妬に憤怒する若者ゴブリンたち。とはいえ本気で言っているワケでもなく、一通り愚痴をこぼし終えると、誰ともなくゴブゴブと笑い出した。

ゴブスレニクスに番がいるらしいということ、まだまだ一人身の独身ゴブリン♂には朗報だったし、密かにゴブスレニクスに想いを寄せていた独身ゴブリン♀には悲報だった。

ちなみにアルデニクスは未だに独身ゴブリン♂の筆頭ゴブリンだった。なぜだ……リトルシャイアでも最古参のゴブリンだということに……。

ゴブリンたちが笑い合う中、ふとゴブスレニクスは物思いに耽つ

た。

記憶の片隅にいる「誰か」

今にも泣き出しそうな顔をした「誰か」

赤い色の、長い髪の「キミ」

大切な「ヒト」

もしかするとソレを思い出せば、自分が何者だったのか、思い出せるかもしれない。

*

*

リトルシャイアに来て、ゴブスレニクスは優しさを知った。温もりを知った。安らぎを知った。

リトルシャイアのゴ布林たちは、気の良いヤツらだった。少なくとも、「今」のゴブスレニクスにはそう感じられた。

こんなにも多くの「誰か」と食事を共にし、こんなにも多くの「誰か」と一緒に働いたのは、初めてのことだった。

霞む記憶の中では確証はないが、それでも確かにそうだった。

彼らゴ布林たちは、口下手なゴブスレニクスにも気軽に声をかけてくれた。

打算や下心ない親切。いや、そもそも彼らは親切だとも思っていない。極々自然に、まるで十年來の親友であるのように、ゴブスレニクスに接してくれた。

それが嬉しかった。

ゴブスレニクスはずっと孤独だった。

誰かの優しさに触れたとか、誰かの温もりに包まれたとかいうのは、記憶喪失以前に皆無だった。

ずっと一人ぼっちで生きてきた。

孤独こそがカレの生き方だった。

いや、本当にそうだったか？

本当に一人ぼっちだったのか？

ゴブ——はずっと一人だったのか？
いや、決してそんなことはなかったはずだ。

記憶の片隅にいる「誰か」

そして、それよりもずっとずっと昔にいた、とつても優しかった「あのヒト」

誰よりも優しく、誰よりも偉大だったあのヒト。

ゴブスレニクスが一番好きだったあのヒト。

もうどこにもいないあのヒト。

だってもう、あの人は「ヤツら」に——あの醜くて、薄汚くて、卑猥で、憎たらしい「ヤツら」に……

あの「小鬼」に——

そこで、目を覚ました。

警鐘が鳴り響き、遠くの方から炸裂音が聞こえる。

ゴブリンたちが騒がしい。嫌な予感がする。

「なにがあった!?!」

個室を飛び出て、近くを通りかかったゴブリンに問う。

「シユココオ！ シユココオ！」

なにもなにも 緊急事態ゴブ！ 緊急事態ゴブ！

「緊急事態?！」

「そう！ ヤツの来襲ゴブ！ 見習い冒険者のお出ましゴブ！」

行きて帰りしゴブリン

突如としてリトルシャイアにやって来た見習い冒険者たち。彼女たちは襲いかかる武装ゴブリンや防衛兵器たちを、千切っては投げ、千切っては投げ……無駄に高すぎる実力そのままに、破竹の勢いで侵攻していった。

人間離れした見習い冒険者たちの前に、あわれ、爆発四散するしかないゴブリンたち。ご自慢のネオ・ファウストもまさかの足止め程度にしかならず、ゴブリンたちは、よもやの劣勢を強いられていた。

「しかし、本当にこのゴブリンたちが、あの『行方不明になった冒険者』に関わっているのでしょうか？」

長剣を腰に携えた凛々しい顔の女性が、そう問いかける。

「んん、分つかないけど、多分無関係じゃないと思うんだよね！」

「根拠は？」

「もちろん、直感です！」

「はあああ、全くあなたたつて人は……」

クソでかいたため息をつく女性。

彼女は、ヒトの間では「剣聖」とか呼ばれている凄腕冒険者だが、ゴブリンたちの間では、「見習い剣士」という名で通っていた。

「でも、勇者の直感は良く当たる。そうでなくとも、件の冒険者はゴブリンのエキスパートらしいから、ここにいる可能性は高い」

もう一人のパーティーメンバーである白フードの女性が、そう付け加える。

彼女も世間では、「賢者」とかいう称号を持ったためっちゃすごい冒険者なのだが、やはりと言うかなんというか、ゴブリンたちには「見習い魔法使い」として認識されていた。

「しかし、よりにもよって『ここ』とは……私にとって『ここ』は、並大抵の覚悟で来れる場所ではないのですが……」

「それは私も。勇者にとつては最高の遊び場かもしれないけど、私達にとつてみれば、魔王の本拠地に单身潜り込むに等しい。逐一付き合う身にもなつて欲しい」

「えええ、そこまでなの!? でもでも、あんな悲しそうな目をした子、放つてはおけないじゃん!」

そう声を上げつつ、「勇者」と呼ばれた「見習い冒険者」は、たまたま立ち寄った「辺境の街」で偶然出会った、「悲しそうな目をした女性」のことを思い出していた。

年頃は、おそらく二つか三つほど上。同じ赤毛だが、見習い冒険者とは違って出るとこ出て、女性らしい体つき。正直言って羨ましい。そんな、「素敵なお姉さん」といった印象の女性が、この世の終わりのような顔をして俯いていれば、きつと「勇者」でなくとも手を差し伸べたくなるものだろう。

聞けば、幼馴染の冒険者が、もう何週間ものあいだ行方不明らしい。いつものようにギルドに行き、いつものように冒険に出て、そしてそのまま、といった具合に……。

本音を言えば、こんなことよくある話だと思った。こんなご時世、冒険者が冒険に出たまま帰ることなく……なんてことは、そこら中に溢れている。特段、珍しい話じゃない。何もかもが、この世界では日常茶飯事な、よくある話だった。

ただ、彼女の場合、少しだけ事情が違うようだった。

なんとその行方不明になった冒険者というのは、まさかまさかの「ゴブリン専門」の冒険者だということではないか!

「それだけでもう、「ピン」っときちやいましたよね!」

「いつもいつも思うのですが、どうしてそれだけで「ピン」っとくるんですか?」

「世界三大勇者の謎。ここのゴブリンたちと同じ」

「あははーいやあ、照れるなあ!」

「いや別に褒めてないですからね?」

鋭いツツコミが見習い冒険者を襲う。

「まあ何にせよ、ゴブリンのことならゴブリンに……ってね! 最悪、ここじゃないにしても、ここの子たちなら何か知ってるでしょ! 多分」

「そんなこと言って、実際のところカレらの新兵器を楽しんでません

？」

「まつ、それはそれ、これはこれってね！　せつかくの久しぶりの「冒険」なんだし、目一杯楽しまなくちゃ！」

そう明るくはにかんで、見習い冒険者にはこやかに笑った。

そんな感じで談笑していると、ウーウーつとけたたましいサイレンが鳴り響き、ゴブリンたちの襲撃が再開される。

「——つと、そろそろ前に進まないと！　今回はちよつとシリアスな感じだから、マジ顔キメて行くよッ！」

状況は全然シリアスどころかシリアルな感じだったが、見習い冒険者に言われたとおり、彼女たちはマジ顔をキメた。

瞬間——陰が射す。

恐る恐る見上げると、そこには身の丈10mはあろうかという巨大ゴブリンが、フンスフンスつと鼻息荒く立ち塞がっていた。

「シユゴオオオオオオオ!!　テンションMAXゴブウウウウウウ!!」

彼女たちのキメ顔は、5秒と持たなかった……。

*

*

騒乱に包まれるリトルシャイアを、ゴブスレニクスは懸命に駆けていた。

何故こんなにも必死なのか、自分でもよく分からない。だが、ゴブスレニクスにとつて、住処を外敵に襲われるのは、どうしようもない程にトラウマだったようだ。

森の遠くの方から、轟音とともに地震のような振動が伝わってくる。見れば、新開発のビックビックリゴブリン薬（通称BBGエキス）をキメたマッドマツデイクスが、巨神の如く巨大化していた。

正に「マツチョコサイエンティスト」といった風体だ。あまりにも巨大になりすぎて、木々の上に頭が突き出ている。

そんなジャイアントマッドマツデイクス相手に、まるで小さな羽虫のように飛び回り、戦いを挑んでいる者たちがいた。あれがきつと、

噂の「見習い冒険者たち」なのだろう。遠目にだが、ヒトの姿をしているのが見て取れた。

その中でも一際強い「光」を放つ存在に、どういう訳かゴブスレニクスは目が釘付けになる。

「……赤色の髪？ グツ、頭がツツツ!?!」

突然、激しい頭痛に見舞われるゴブスレニクス。

頭の奥底から、「何か」が浮かび上がって来そうになる。

記憶の片隅にいる「誰か」

今にも泣き出しそうな顔をした「誰か」

赤い色の、長い髪の「キミ」

大切な「ヒト」

思い出したい記憶。

思い出すべき思い出。

でも思い出せば、何かがコワレテシマイソウで、それが怖くて、ゴブスレニクスは頭を振り払って再び駆けた。

目指す場所は改修中の「リトルシャイア城」——緊急事態の時には、ここに集まるよう言われている。

「シユココオ……シユココオ……」

おお！ おお！ ゴブスレニクス！ いいところにキタキタゴブ
！

リトルシャイア城に辿り着くやいなや、そう呼び止められるゴブスレニクス。

見渡せば、数名のゴブリンとともに、アルデニクスが手を振っていた。

僅かな安堵の後、そちらへ駆け寄るゴブスレニクス。奇妙なことに、その場にいるゴブリンたちの何名かは、普段とは違うカラフルな防護服に身を包んでいるようだった。

赤色マスクのレッドゴブリン、緑色マスクのグリーンゴブリン、黄色マスクのイエローゴブリン、青色マスクのブルーゴブリン、そしていつもどおりのアルデニクス……。

「……オマエは普通なのだな」

「シュココオ……シュココオ……」

今回アルデニクスは 司令官ポジゴブから 仕方がないゴブ！
なんのこつちや、と首を傾げるゴブスレニクス。

「シュココオ……シュココオ……」

それよりこれよりゴブスレニクス さつきも言ったが いいところに来たゴブ

ちようど ゴブ手不足で ゴブゴブ困っていたところゴブ！

でもでもこれで 頭数は揃ったゴブ！ 準備はいいゴブか？ 今こそ出撃の時ゴブ!!」

「うおおお！ テンション上がってきたゴブウウ!!」

「オツシヤアアア！ ヤツたるぜゴブウウウウ!!」

「けちよんけちよんに してやるゴブよオオオオ!!」

「待つてろゴブよ！ 見習い冒険者ゴブウウウウ!!」

「オ、オイ待てツツ！ ワケが分からんぞツツツ!?!」

状況が読めず、困惑するしかないゴブスレニクス。

でもでもそんなことはお構いなしに、テンションアゲアゲMAX中のアルデニクスたちは、あらほれさつきとゴブスレニクスを捕まえ、エイヤと高く持ち上げた。

「ささ、いいから何も言わず “これ” に乗り込むゴブ！」

嫌だと言つても、その見た目によらず実力者なアルデニクスの前には、抵抗は無意味だろう。

されるがまま、ゴブスレニクスはあれよあれよという間に、アルデニクスの言う “これ” に放り込まれてしまった。

「プシュウー” つという音と共にコックピットの扉が閉まり、ディスプレイがチカつと点灯する。画面には『ジャステイスシステム律動開始』と表示されていた。

『ピピピッ！ ジャステイスシステム律動開始……コンバットシステムダウンロード……戦闘データインストール中……火器管制システムオールグリーン……搭乗員ノ生体認証ヲ開始……スキヤン中……ピピピッ！ 認証完了！』

ヨウコソ！ コードネーム『シルバーゴブリン』 アナタヲ 当機

体ノ搭乗員二任命シマス 全システムニアクセス可能 ゴ命令ヲドウゾ！」

「なんだこれは？ なんだこれは？ なんだこれは!？」

「さあ みんな！ 「マツチヨサイエンティスト」が時間を稼いでる今がチャンスゴブよ！ 機巧戦隊ジャスティスレンジャー！ 律動発進ゴブウウウツツ!!」

「なんなんだこれうおおおおあああああああ!？」

ゴブスレニクスの悲鳴は、超高速で飛び出した“五体”の機動兵器とともに、彼方へとかき消えた。

そしてそれを、アルデニクスが白いハンカチーフを振って見送る。戦いはまだ始まったばかりだ！

* * *

リトルシャイア城を飛び出して、ミダースウェイを翔ける五つの機影！ ゆくぞ我らのジャスティスレンジャー!!

先頭行くは青の機影！ その名もこの名も「ブラスター」！ ミラージュアタック忍者兵！

次ゆく機体は黄色の機影！ その名もこの名も「プロウラー」！ ドリルバスター武装兵！

続く戦士は緑の機影！ その名もこの名も「スウィンドラー」！ ハイトカウント算術兵！

さらなる兵士は赤の機影！ その名もこの名も「ボルテッカー」！ ウルトラフラッシュ魔道兵！

それから大きく後退し、遅れて行くは謎の機影！ 防衛参謀「オンスローター」！ ちよつと拙い操縦だけど、一体どうした「オンスローター」!？」

「ゴブウウウ！ ま まいったゴブウ」

轟音を立て、崩れ落ちるジャイアントマッドマツディクス。

どうやらカレらの戦いは、見習い冒険者たちの勝利で終わったようだ。

一体どんな経緯があつたかは分からないが、いつの間にか、見習い剣士と見習い魔法使いが、野性み溢れた「ゴリラ」の姿へと変貌している。一体、ナニがあつたというのだ……。

「まさか アニマル変身システムを そんな風にご利用するだなんて 思つてもみなかったゴブ……ゴブの負けゴブ……でも ゴブを倒しても 第二 第三のゴブリンが 必ずやオマエたちを……ゴブ ブウンン!!」

ドカーン!

ありがちな捨てゼリフを吐いて爆発四散するマッドマツデイクス。そこはかとなく満足げなマスクをしていたのが、妙に憎たらしい。

乙女にあるまじきゴリ体を、現在進行形で晒している見習い剣士と見習い魔法使いだが、しかし、彼女たちに休んでいる暇などない。第二、第三のゴブリンたちは、もう直ぐそこまで迫ってきているのだ! 物凄い早さのフラグ回収である。

「シユゴオ……シユゴオ……」

よもや マツチヨサイエンティストを倒すとは やるゴブな 見習い冒険者ツ!

「しかし マツチヨサイエンティストは 我ら律動四天王の中でも 一番の小物ツ!」

「我らがジャステイスレンジャーの 敵ではないゴブわツツ!!」

「覚悟するといいいゴブ 見習い冒険者! 行くぞ ジャステイスツツ!!」

「行くぞ ジャステイスツツ!!」

ジャステイスレンジャーが決めポーズをキメると、それに合わせ、ソッケンソングスの親父譲りのトランペットが高らかに鳴り響き、道行くゴブリンたちが大合唱する! 言わずもがな、機巧戦隊ジャステイスレンジャーのテーマソングである!

バシツ カチツ クルクル グーン ヒュー ドツカン ブーン!

怖れよ 我らがジャステイスロボ!

バキツ ズンツ バチバチ バーン ビイー バツカン ズン！

赤き火花が散り 真紅の輝きが爆ぜる！

不快な奴らの足を止める！

信管外してポンツ！ 骨を抜いてブチツ！ 気圧を下げてバーンツ！

システムチェックOK 《これが説明書ゴブ？》

ああしてこうして……あつ 《あつ!?!》

なんか変なエラーが出たゴブ 《天体ノイズを発見!》

大丈夫 大丈夫 多分大丈夫 《精神錯乱の疑いナシ!》

ゴブウ なんとかならんものか 《周波数を正しく合わせて下さい!》

このボタンはなんだっけゴブ？ 《エーテルフロアが起きています!》

ええい もういつちよポチツ！ 《伝送ヲ開始シマスカ?》

七、二、三、二、三……送信ゴブ！ 《キター!》

ジャステイスレンジャー 緊急出撃要請!

全力デ以ツテ迎撃セヨ!

コンバットシステム律動……全機リンク開始…… “同調” セヨ

行けツ！ 我らがジャステイスレンジャー!

大盛り上がりの戦闘ソングだが、かくも猛き見習い冒険者の前に、ジャステイスレンジャーですらもあと一歩というところで及ばない!

乱れ飛ぶ、ブラスタアの分身の術、プロウラーのドリルミサイルバスタービーム、スウィンドラーの生命計算術、ボルテツカーのウルトラフラッシュスーパーサイクロン——その中を、見習い冒険者たちは紙一重で掻い潜る、掻い潜る、掻い潜るツ!!

その光景を、シルバーゴブリンことゴブスレニクスは、オンスローターの中で見つめていた。

人知を超えた戦い。その中でも、特に惹きつけられる姿。赤い髪の少女。目を離すことが出来ない。

揺れる機体、伝わる振動、記憶のノイズ。激しい頭痛が襲い、胃の中がグチャグチャになる。

「グツ、ガア……ガアアアアアアアアア！」

頭を押さえ叫ぶ。視界がグルグルして、上か下かも分からない。それでも、決して目を離すことのできない少女の姿。もはや自分が何者で、何をすべきなのかさえ不明だ。

「アアアアアアアアアア……頭が、頭が……」

苦痛に呻くゴブスレニクス。

戦いに夢中なゴブリンたちは、そんなカレの異常に気付くことができない。

防衛参謀「オンスローター」の不調により、徐々に追い詰められていくジャステイスレンジャー。

しかし、恐れる必要はない！ まだカレらには「奥の手」があるのだからツ!!

「シュココオ……シュココオ……」

なかなかやるゴブな 見習い冒険者！ こうなったら 奥の手ゴブ！

今こそ ジャステイスロボの 「真の姿」 を見せつける時ゴブ！」

「ゴブウウウ ついに あれをやるゴブか!?!」

「ゴブゴブ！ 覚悟をキメるゴブ！ ゴブは出来てるゴブ！」

「さあ みんな！ 声を揃えて叫ぶゴブ！」

じゃあ みんな準備はいいゴブか？

イチニのサンで叫ぶゴブ！

せーのっ！

ブルート！

ジャステイス！

刹那の後——爆散。

振り返り、カッコいいポーズをキメる見習い冒険者たち。

立ち昇る爆煙。

その背後で、上空に吹き飛ばされるゴブスレニクス。

安全装置が働いているのか命に別状はなさそうだが、空高く打ち上げられ、そののち、重力に身を任せ落下し始める。

どこか懐かしい感じがした。具体的に言うなら「ここ」へ来たばかりの時に感じたあの——グシヤアア。

ゴブスレニクスは頭から地面に激突し、そして——

全てを思い出した！

*

*

ゴブスレニクスが次に目を覚ましたのは、何の変哲もないゴブリン個室だった。

無機質な天井がゴブスレニクスを静かに迎える。

「むっ？・ 目覚めたようだな……」

横から女の声がした。身に覚えのない声だ。ゴブスレニクスは僅かに訝しめる。

体を起こし視線を向けると、そこには長髪の女がいた。やはり身に覚えのない女だった。

「……オマエは、誰だ？」

「起きて早々その質問とは……まあ、その様子じゃあ、特別問題はなさそうだな。私の名は……あー「見習い剣士」だ。『ここ』では、そういうことになっている」

「その見習い剣士サマが、俺になんの様だ？」

「初対面の人間に対して、随分なご挨拶だな。気絶したオマエをここまで運び、看病してやったのは誰だと思っている？」

「ゴブリン共だ」

間髪入れずゴブスレニクスは答えた。

見習い剣士は僅かに驚きの顔をして、小さな声で意外そうに「まあ、そうなんだが……」つとと言う。

「それで、アンタはどうして『ここ』にいる？」

ゴブリンの個室は、基本的に持ち主以外は立入禁止だ。たとえ看病のためだとしても、人間の女がこの部屋にいるのは有り得ない。何か相当な理由が無い限りは……。

「まあなんだ……こちらにも、少しばかり事情があつてな。今回は特別に許可してもらつた」

それから見習い剣士は神妙な面持ちをして続ける。

「本来なら勇しゃ……いや、ここでは「見習い冒険者」だつたな。その見習い冒険者から言うのが筋なのだろうが……今は彼女も立て込んでいてな。特にこういった事情の場合、ストレート過ぎる彼女では混乱を招きかねないので……」

「そういうアンタは相当回りくどいようだ。言いたいことがあるなら、さっさと言うがいい」

ゴブスレニクスのおんまりな言い様に、渋い顔を浮かべる見習い剣士。

ややあつてから、彼女は語り始めた。

「……いいか、落ち着いて聞いて欲しい。オマエは自分のことをゴブリンだと思つているのかもしれないが、本当は——」

「ゴブリンではないのだろうか？」

あつさりとその答えるゴブスレニクス。

「驚いたな、気付いていたのか？」

「ああ、正確には『思い出した』だが、アンタたちとの戦いで吹き飛ばされた時、全てを思い出した……」

自分が何者だったのか、その記憶も、その思い出も、そして本当の「名」も、何もかもを思い出した。

「俺はゴブリンを狩る者——ゴブリンスレイヤー」

本当の「名」を取り戻したゴブリンスレイヤーはそう呟くと、そのまま立ち上がり、迷うことなく部屋を出ていこうとする。

そんなゴブリンスレイヤーの背中に、見習い剣士は言葉を投げかけ

る。

「……私たちは、オマエの捜索依頼を受けた冒険者だ。だから、オマエの経歴や事情は多少なりとも知っている。オマエが過去、ゴ布林たちに応じた仕打ちを受けたのか。オマエが今、どんな生業で生計を立てているのか、多少なりともな……」

「……それで？」

足を止め、背中越しにゴ布林スレイヤーが問う。

「気持ちは理解できなくてもないが、忠告しておこう。止めておけ。カレラ」はオマエの悲劇とは無関係だし、何よりも——」

「知ったことか」

ゴ布林スレイヤーが遮って言った。

「そんなこと、知ったことか。俺はゴ布林スレイヤー。ゴ布林を殺す者。たとえどんな「モノ」であろうとも、ゴ布林は許すことはできない。ゴ布林は殺す。何であろうとも……」

「それが、「家族」や「友人」であつてもか？」

「……」

何も言わず出て行くゴ布林スレイヤー。

残された見習い剣士は、そんな彼を見送ると、平静な声で言った。

「……何も言わずじまいか。さて、どうなることやら」

少なくとも、僅かに歩を止めたことを、見習い剣士は見逃さなかった。

*

*

リトルシャイアのレンドロン広場では、今、盛大な「宴」が行われていた。

時刻は夜——星々の煌めきが広場を照らし、月の光が降り注いでいる。外界とは隔絶された、神秘的な雰囲気醸し出されていた。

レンドロン広場中央に設置されているゴルダナル大石碑の前では、巨大な焚き火が燃え上がり、その周囲では、豪勢な食事や飲み物が配られ、参加者たちの空腹を満たしている。

その中心にいるのは、見習い冒険者と、そのお供である見習い魔法使いだ。見習い剣士の姿はここにはないが、なにやら大事な用事があるようで、ゴ布林たちはあまり気にしていなかった。まあ、そんなこと、よくある話である。

ゴ布林たちと見習い冒険者たちの戦いは、見習い冒険者たちが勝つところとして宴が執り行われ、ゴ布林たちが勝つところとして宴が執り行われる決まりになっていた。

つまりどちらが勝っても宴が行われるのだ。

お互いがお互いの健闘を称え、お互いがお互いの勝利を讃える。何時の頃からそうなったのか忘れてしまったが、いつの間にか、そういうことになっていた。

ワイワイ、キャハキャハ、ゴブゴブ、シユコオシユコオ……かつては独特すぎたゴ布林料理の味付けも、暫く来ないうちに人間好みの味付けになっていて、見習い冒険者たちも上機嫌。宴はかつてないほど盛り上がり、最高潮に達する。

そんな中、闇夜に紛れ、ゆつくりと歩を進める者がいた。ゴ布林スレイヤーだ。

ゴ布林スレイヤーの心の中では、いま、戸惑いと葛藤が渦巻いていた。

ゴ布林たちに恨みはある。消えかけていた怨嗟の炎は、再び彼の中で業火の如く燃え上がり始めていた。ゴ布林死すべし慈悲はない。

だがその反面、カレらと共に過ごし、カレらと共に暮らした思い出も、確かに彼の中で生き続けていた。ほんの僅かな束の間の安息。それはとても儂いものだったが、確かにあったものだ。

両者とも、そう簡単に捨て去れるものではない。

恨み、憎しみ、苦しみ。

安らぎ、いたわり、慈しみ。

感情の天秤が激しく揺れ動き、ゴ布林スレイヤーを惑わせる。こんな思いは初めてだった。どうすればいいのか迷っていた。ゴブリンの事だというのに。

だからこそ、ゴブリンスレイヤーは「カレ」のところへと向かった。他でもない、ゴ布林たちのリーダー、アルデニクスの下へ。

ゴ布林を殺す者が迷いあぐねた挙げ句、ゴ布林の下に向かうとは、なんとという皮肉だろうか。皮肉すぎて、頭が可笑しくなりそうだった。ゴブリンスレイヤーは兜の奥で、自分自身を嘲笑した。

だがそれも仕方のないことだ。困った時に「カレ」に相談するのだが、「ここ」のやり方なのだから……。

炎の影から姿を現すゴブリンスレイヤー。そんなゴブリンスレイヤーを、アルデニクスは驚きもせず迎えた。

「シユコオ……シユコオ……」

そんなところで なになにしてる ゴブスレニクス？ 寝ててなくて 大丈夫ゴブか？」

返答せず押し黙るゴブリンスレイヤー。

様子のおかしいゴブスレニクスを見て、アルデニクスは大体のことを察した。

「……ああ そうゴブか……思い出したゴブか」

ゴブリンスレイヤーは頷いて答える。

「ああ」

それから沈黙が暫く続いた。

宴の喧騒が、どこか遠くに聞こえる。

月と星に雲がかかり、暗闇が差す。炎に揺らめく一人のニンゲンと、一匹のゴ布林。両者の影はどこか似ていたが、結局、一度も交わることはなかった。

「……アルデニクス。俺はアンタに話があつて来た」

その声色から、気楽な返答ができる内容ではないことを、アルデニクスは素早く理解した。

だからアルデニクスは真剣なマスクをして、真摯な口調で答えた。

「シユコオ……シユコオ……」

そうゴブか きつときつと 大切なお話ゴブね」

アルデニクスが盛りに盛り上がる宴の中心地に視線を泳がせる。

「ならなら少し 場所を移すゴブか……」

ゴブリンスレイヤーも同じ方向を見て「ああ、そうだな」と応えた。

*

*

アルデニクスとゴブリンスレイヤーはゴブ気のない場所に移動すると、小さな焚き火をつけ、それを境にするようにお互い向き合い座った。

「シユココオ……シユココオ……」

それでこれで　ゴブスレニクス　お話って　ナニナニゴブ？」

長い長い沈黙があつてから、ゴブリンスレイヤーが静かに語りだす。

「俺はゴブリンスレイヤー。ゴブリンを殺す者。俺はゴ布林ではない。俺は……人間だ」

衝撃の告白——そう思われたが、当のアルデニクスはそれを当然のことのように受け入れた。

「驚かないのか？」

「シユココオ……シユココオ……」

実は実は　アルデニクス　“それ”　知ってたゴブ

オマエさんがニンゲンだつてコト　分かってたゴブ」

「……なぜ、黙っていた？」

重々しく問い詰めるゴブリンスレイヤー。

「アルデニクス　遠い遠い場所の　遠い遠い世界のゴ布林ゴブ

そこでは　ニンゲンいっぱいいたくさん　ニンゲン以外もたくさん
いっぱい

だから　ゴブスレニクスのことも　ひと目でわかったゴブ

無用な混乱を避けるためだったゴブが　これまでずっと黙ってて
ごめんなさいゴブ」

ペコリと頭を下げるアルデニクス。その様子はまるで隙だらけで、
ともすれば、この場でマスクごと斬り落とすこともできそうなほど
だった。

だが、ゴブリンスレイヤーはそうはしなかった。

それが気の迷いだということとは理解していたし、正直な話、この程度の奇襲でこのゴブリンを倒せるとは到底思えなかったからだ。

パキツという薪の焼き切れる音が、暗闇の中で響く。アルデニクスとゴブリンスレイヤーの会話は続いていた。

「アンタは俺を人間だと知っていて、俺を受け入れていたのか？ なぜだ？」

「なぜもなにも オマエさんは記憶を失っていたし

それに ニンゲンだからといって 見捨てるわけにはいかなかったゴブ」

「情けをかけたつもりか？ ゴブリンのクセに？」

「そう 情けをかけたつもりゴブ ゴブリンのクセに」

これは上手いこと言った、とゴブゴブ笑うアルデニクス。

まるでゴブリンらしからぬ言い草だ、とゴブリンスレイヤーは思った。だが同時に、実に「カレ」らしい言い草だとも感じていた。

記憶が駆け巡る。リトルシャイアでのゴブリンたちとの思い出。ゴルダナルのゴブリンたちは、ゴブリンスレイヤーの知るどのゴブリンとも違っていた。

知性を持ち、言語を解し、文字を使い、文明を築く——まるで人間のように暮らすゴブリンたち。マスクをしたゴブリンたち。善良なゴブリン。

「オマエたちは、本当にゴブリンなのか？」

核心を突く質問。そう、本来ゴブリンスレイヤーは、それを知るために「ここ」に来たのだった。修道女が語った「善良なるゴブリン」という有り得ない存在を確認するために。

もしほんとうにそんなモノが実在するならば……。

「シユコオ……シユコオ……」

もちろん そちろん ゴブたちは 正真正銘のゴブリンゴブ
生まれてこの方ゴブリンで これから死ぬまでゴブリンゴブ」
あっさり肯定してみるアルデニクス。

そう、どうして否定することができようか。ヒトがヒトであることに誇りを持つように、ゴブリンもまた、自らがゴブリンであることに

誇りを持つのだ。何があろうとも、それを否定することはできない。

ゴブリンスレイヤーは大きく息を吐いた。まるで溜め込んだ「迷い」を吐き出すかのように、大きく大きく息を吐いた。

炎を見つめたまま、ゴブリンスレイヤーは言った。

「俺はゴブリンスレイヤーだ……」

ゴブリンスレイヤーはゴブリンが憎かった。

「これまで何千、何万というゴブリンを、この手で葬ってきた……」

ヤツらは姉を殺した。おじを、おばを、村人を串刺しにし、家を焼き払った。ゴブリンスレイヤーの故郷を奪ったのだ。

「ゴブリンを殺すことだけを考えてこれまで生きていた。ゴブリンを殺すことだけが生き甲斐で、ゴブリンを殺すことでしか、人生に意味を見いだせなかった……」

ヤツらにいいように喰い物にされ、陵辱されるサマをずっと見ていた。恐怖と寒さに震えながら、鼻水を垂らしずっと「そこ」で見っていた。物置部屋の隙間から、姉が姉でなくなるのをずっと見ていた。

「それを後悔したことはない。それを疑ったこともない。何時か必ずそうしてやると、他でもない自分自身に誓ったからだ……」

何もできなかった。何もしようとすらしなかった。ただヤツらが飽きて去っていくのを、怯えながら震えて待っていることしかできなかった。

「だから教えてくれ……」

断じて許せるはずがない。許されていいはずがない。ゴブリン共は皆殺しだ。みな須らく絶滅すべき存在だ。

だというのに……。

「俺はオマエたちを殺すべきか？」

ゴブリンを殺す者からの、殺される者への問いかけ。なんと矛盾を孕む、滑稽な質問だろうか。

それでも問われたアルデニクスは、暫し押し黙り、電子回路に電流が流れるように高速で思考を巡らせた。これがとても重要な問答だと理解したからだ。

アルデニクスは、この世界のゴブリンが、元々どういう性質を持つ

ていたか理解していた。

下品で、不潔で、下劣な、知性の欠片もない原始的で野蛮な生命。概念的に同族であったアルデニクスだからこそ、ここまで通じ合えることができ、ここまで文明化させることができたのだろうが、ただのヒトであれば、ゴブリンの存在は害悪以外の何者でもないだろう。

この世界のゴブリンの有り様は、まるで人類に仇なすためだけに生み出された、邪悪なる「駒」だ。それがアルデニクスは悲しくて、苦しめて、悔しかった。

「シユコオ……シユコオ……」

もし オマエさんが 本気でゴブたちを殺したいなら ゴブはそうするべきだと 思うゴブ」

様々な思いを巡らせ、アルデニクスはそう答えた。否定しようがないのだ。アルデニクスがゴブリンであることを否定できないように、ゴブリンスレイヤーが「ゴブリンを殺す者」だということを、否定することはできない。

「オマエさんの気持ちは分かるゴブ……と 気安く言うことはできないゴブ

オマエさんの過去に何があって ゴブリンとの間に何があつたのか ゴブには分からないし 分かることもできないゴブ でも 分からないからこそ オマエさんの在り方も 有り様も 否定することはできないゴブ」

でもだからといって、滅びを甘んじて受け入れるつもりは断じてないゴブ、ともアルデニクスは付け加える。リトルシャイアのゴブリンたちは、平和主義者だが無抵抗主義者ではないのだ。やる時はやるのだ。

「ゴブたちは 平穏を享受するためには 時に戦う必要があることを 重々理解しているゴブ」

だからこそ、武器を持ち、武装を固め、兵器を造り、武力を高めてきたのだ。

「平穏を脅かすモノなら たとえそれが “同族” であっても それは 変わらないゴブ」

ゴルダナル大森林は、その豊富な資源ゆえに、度々他の勢力から危険に晒されてきた。混沌の軍勢、深淵の亡者ども、ダークエルフ……当然その中に、ゴブリンがいないはずがない。

「分かり合えるゴブリンもいれば、分かり合えぬゴブリンもいたゴブリン」

多くの場合、分かり合えぬゴブリンばかりであった。何かしらの勢力に属するゴブリンは、どうやっても説得することが出来なかったのだ。捕まえて無理やりマスクを被せても無駄だった。持ち主のないマスクが保存されるばかりである。

「だから オマエさんに “その覚悟” があるならば ゴブたちは受けて立つゴブリン」

アルデニクスの言葉に迷いはなかった。それがゴブスレニクスの “やりたい事” であるならば、受け入れる道以外にないのだ。ゴルダナルのゴブリンたちは、いつだってそうやって生きていたのだから。アルデニクスの言葉に迷いはなかった、だがその中に、多くの躊躇いがあった。だからこそ、最後の最後に小さく、こう付け加える。

「でも できることならば オマエさんとは これからも “家族” になりたいゴブリン」

ゴブリンスレイヤーはアルデニクスの言葉を噛みしめる。

ゴブリンスレイヤーはアルデニクスのことを見ず、ずっと揺らめく炎を見つめていた。炎を通してカレを見ようとしていたのだ。焚き火の向こうにいるのは、ゴブリンスレイヤーがこれまで知り得なかった、 “善良なるゴブリン” だった。

こんなコトを言つてのけるゴブリンがこの世に存在するとは、 “ここ” に来るまで考えもしなかった。文明化したゴブリン。言葉を解し、文字を得て、技術を磨く異形のモノ。

有り得ないことではなかった、と今更ながらに思う。ヤツらは馬鹿だが間抜けではない。道具を与え、使い方を学び、技術を教えてやれば、ヤツらは驚くほど吸収する。だからこそ、 “その可能性” は無くはなかった。

もしかすると、心の片隅で、何処かそう願っていた部分があったか

もしれない。この世に「善良なるゴブリン」が存在するという、その馬鹿げた可能性を……。

このリトルシャイアのゴブリンたちは、ある意味ではゴブリンスレイヤーが最も危惧していた存在だった。いや、もっと悪い存在なのかもしれない。だが、またある意味では、最も待ち望んでいた存在でもあった。

知性を持ったゴブリン。それも、悪性でなく善性をもった。

これまでゴブリンスレイヤーは、決して自ら進んでゴブリンを狩ってこなかった。もし本当にゴブリンを絶滅させたいのであれば、手当たり次第、無作為にゴブリンを殺して回った方が有意義なはずなのに、彼は決してそうしようとはしてこなかった。それが意識的にしろ無意識的にしろ、「依頼のないゴブリンの討伐」を、意図的に避けてきたのである。その可能性を狭めないために。

彼のゴブリン退治に対する姿勢は、常に「受け身」であった。彼のゴブリン殺しは、「依頼」があつて初めて成立する。

それが、どんな理由からだったのか自分でもずっと分からなかったが、ここに来て、ようやくわかった気がした。

「俺はゴブリンスレイヤーだ」

噛みしめるように言う。それはまるで、自分自身に向けて言っているようで、一種の確認作業のようなものだった。

「俺はゴブリンを殺す者だ。これまで何千というゴブリンをこの手で殺してきた」

「ゴブたちとて　ゴブリンをその手にかけてきたのは　一度や二度じゃないゴブ」

もしかすると、積み上げてきた死体の数ならば、アルデニクスたちの方が多いかもしれない。いや、もしかしなくとも、多いだろう。

「今日も、明日も、明後日も、俺はゴブリンを殺し続けるだろう」

「少なくとも　昨日」はそんなことはなかったし　今日も　そんなことはさせないゴブ」

売り言葉に買い言葉と言わんばかりのアルデニクス。

「……俺はゴブリンを殺す。殺し続ける。いつかこの身が朽ち果てる

か、ゴブリンどもを殺し尽くすまで、俺は戦い続ける」

「それならゴブは オマエさんがゴブリンを殺し尽くす前に みーんなみーんな文明化させて みーんなみーんな仲間にしちゃうゴブ そしたら流石のオマエさんでも 手出しはさせないゴブよ！」

そこでようやくゴブリンスレイヤーは、焚き火越しではなく、正面からアルデニクスを見た。相手はマスクをしていて表情は読めないが、きつと自信たっぷりな顔をしていることだろう。きつと、そうに違いない。

「……まるで “究極の幻想” だな」

呟くようにゴブリンスレイヤー。兜の下の彼は、その途方もない幻想に “笑み” を浮かべていた。

「オマエさんのだって まるで実現出来そうにもない “究極の幻想” “ゴブ”

でもだからこそ、語る価値のある夢物語だ。人の夢は儂い、と誰かが言ったが、理想を追い求めなくては、ヒトもゴブリンも生きては行けないのだ。理想を語らずして、前には進めない。だからこそ、どんなに馬鹿らしい幻想でも、バカみたいに語る必要がある。

「……俺はゴブリンを殺す。それはこれからも変わらない。俺はずっとゴブリンどもを殺し続けるだろう」

変転し続けるこの世界において、決して変わらないものがあると信じ込んでいた。

「だが、一っだけ約束しよう」

相も変わらず蔓延り、溢れかえる小鬼ども。殺しても殺しても次の日には殺した以上に増えいて、腐肉を貪り、不浄を撒き散らす。どんなに繰り返し返しても果てがない。

ゴブリンどもは変わらない。でも、それこそがある種の幻想だったのだ。

「オマエたちが、今のような善良なゴブリンである限り」

自分がやっていることが、無駄な足掻きではないのかと思うこともあった。意味の無い挑戦をしているのではないのかと疑うことさえもあった。

「俺は善良なゴブリンは殺さない」

でもそんなことはないと言い聞かせ、たとえばそうであっても良いと信じ込ませ、誰かがやらなくてはいけないコトだと己に課して、これまでずっと戦ってきた。

「オマエたちのようなゴブリンは殺さない」

その日々が無駄だったとは思わない。だが意味があつたとも思えない。ただひたすらに、ゴブリンを殺すことだけを考えて、ゴブリンを殺すことに全霊を懸けてきた。

「だがいつか、俺の幻想が実現するまで、俺はゴブリンどもを殺し続ける」

それはこれからも変わらないだろう。変えようとも思わないだろう。結局の所、ゴブリンスレイヤーは変わらない。変えてはならない。昔誓った祈りをそのままに、ゴブリンども絶滅させるまでは、ゴブリンスレイヤーは変わらない。

たとえ「カレら」の存在を知ったとしても、たとえ善良なるゴブリンがいたとしても、ゴブリンスレイヤーには何ら影響を及ぼさない。変転し続けるこの四方世界において、それは変わらぬ一つの理だ。

だが……

「それならば一刻も早く、ゴブたちの幻想を実現しなくちゃゴブなオマエさんがゴブリンを狩り尽くすその前に、ゴブたちがゴブリンたちを文明化させてみせるゴブ」

だが、それでも……

「そうか」

少しだけ……ほんの少しだけだが……

「なら精々頑張るといい」

肩の荷が軽くなった……

そんな気がした……

「おうともゴブ！」

だから オマエさんも 頑張るゴブよ！」

ゴブリンスレイヤーは空を見上げた。

「……ああ」

その小さな呟きは、リトルシャイアの夜空へと消えた。

*

*

次の日の早朝、まだ朝の爆発が鳴るよりも前に、ゴブリンスレイヤーはリトルシャイアを去った。

何も言わず、誰とも会わずに出ていこうとしたが、当然のことのように、ゴブリンたちは総出で彼を見送った。

ゴブリンスレイヤーはゴブリンではなくヒトであったが、だからといって、彼がゴブスレニクスとして共に暮らしたことが消えるわけではないのだ。

だから、ゴブリンたちはこれまでに無いほどに、盛大にゴブリンスレイヤーを見送った。なにせ彼は、リトルシャイアから巣立っていき、記念すべき最初の「家族」なのだから。

ゴブリンスレイヤーは少し困惑したが、このゴブリンたちはそういうものだと、妙に納得する部分もあった。

恥ずかしげもなく言うのであれば、多くのゴブリンはゴブリンスレイヤーとの別れを惜しんだが、何名かのゴブリンは密かに喜んでいった。その大部分が、独身街道まっしぐらなゴブリン（♂）だったのは、ご愛嬌だろう。でも決して、邪な考えがあつてのことではないということだけは、ここに明記しておこう。決して邪な考えなどないのだ。

恋のライバルがいなくなったとか。

ゴ布林たちはゴ布林スレイヤーの門出に際し、多くのご馳走や、数々の便利アイテムなどの手土産を用意したが、その殆どをゴ布林スレイヤーは辞退した。

もう持ちきれない程の「モノ」を既に貰っていたからだ。それは物や形で残るようなものではなかったが、ゴ布林たちの持つ知識や知恵、経験、技術、そして何よりも、ほんのちよっぴりの「友情」を、ゴ布林スレイヤーは決してそれを口にしようとはしなかったが、カレらから貰っていた。

これ以上のモノが必要だろうか？

ゴ布林スレイヤーは、最後にゴ布林たちと一言二言会話を交わすと、それ以上は何も言わず、リトルシャイアを去った。

ゴ布林スレイヤーは振り返ることも、手を振ることもしなかったが、ゴ布林たちは彼の姿が見えなくなるまで、手を振って見送った。きっと彼なりのケジメの付け方だったのだろう。

「シュコオ……シュコオ……」

行ってしまうゴブか……」

こうしてひよんなことからやって来たゴブスレニクスというゴ布林は、ゴ布林スレイヤーという「名」を取り戻して、ヒトとしてリトルシャイアを去った。少しだけ、ぽっかりと胸に穴が空いたように、リトルシャイアがちよっぴり寂しい感じがした。

「けれども けれども 悲しんでいる暇はないゴブよ！

ゴブスレニクスに負けないように ゴブたちも 急ピッチで作業を進めるゴブ！」

リトルシャイアの中央にそびえ立つ「城」を眺め、アルデニクスはそう言った。

カレらの「計画」が天を動かすのも、そう遠くはないだろう。

*

*

それからゴ布林スレイヤーは「辺境の街」に戻り、幼馴染の牛飼

娘と再会した。

再会した彼女は、まるで幽霊を見たような顔してゴ布林スレイヤーを見ると、程なくして目から涙を流しゴ布林スレイヤーに抱きついた。

ゴ布林スレイヤーは「悪かった」だとか「心配かけたな」とか、ありきたりなコトしか言うことができず、ただただ泣きつく彼女のされるがままとなった。

どんなに心配していたか、どんなに寂しい思いをしたが、どんなに眠れぬ夜を過ごしたか、どんなに涙を流したか、どんな思いで彼女がいたのか、ゴ布林スレイヤーは彼女が満足するまでとことん聞いた。

相当な心配をかけた自覚はあったのだ。自覚はあったからこそ、彼女が何かを言うたびに、「悪かった」と言うしかなかった。この時ばかりは、ゴ布林スレイヤーも自身の語彙力の無さを呪った。

結局ゴ布林スレイヤーは、泣きじやくる彼女に対し、何処かに行くときは必ず行き先と期間を教えること、長期間になる場合は必ず旅先で手紙を送ること、決して無茶をしないこと、必ず生きて帰って来ること、たまには牧場の手伝いもすること、を約束させられ、更には二週間の謹慎処分を言い渡された後に許された。

ゴ布林スレイヤーはそれを甘んじて受け入れた。それほどの迷惑をかけた自覚があったからだ。今回ばかりは全面的にゴ布林スレイヤーが悪い。

素直に受け入れてくれたゴ布林スレイヤーに、牛飼娘は微笑んだ。

それから束の間のあいだ——具体的には謹慎中の二週間——ゴ布林スレイヤーは牛飼娘とともに牧場の手伝いに没頭し、暫しの安息を過ごした。

作業をしていると、あの森で過ごした日々のが思い出される。そんなゴ布林スレイヤーに対し、牛飼娘は、暫くもない間に手付きが上手くなったねと密かに思った。

どういうワケか少しばかりの嫉妬心が浮かんできたが、それをゴブ

リンスレイヤーに話すことはしなかった。こうして無事に彼は帰ってきたのだ。それ以上のことは望むべきではない。少なくとも「今は。」

二週間の謹慎処分を終えて、ゴブリンスレイヤーは再び冒険者稼業に戻っていた。

牛飼娘もその叔父も、このまま牧場の手伝いで生計を立てていかないかと言ったが、ゴブリンスレイヤーにとってそれは考慮するべきことではなかった。

彼にはやるべきことがあるのだ。カレらとの約束を違えぬためにも、ゴブリンスレイヤーを殺す者としてやるべきことが。

ゴブリンスレイヤーが久方ぶりに冒険者ギルドに行くと、多くの者は驚いた顔をした。チラホラと小声だが、「死んだと思っていた」だとか「生きていたのか」とかいう声が聞こえる。中には「クソツ、生きていやがったか、賭けに負けちまったじゃねえか」という台詞も聞こえた。

「耳」が良くなりすぎるのも考えものだなとゴブリンスレイヤーは思う。

「生きていたかゴブリンスレイヤー。お互い、悪運だけは強いみたいだな」

馴れ馴れしい態度の男に声をかけられた。顔馴染みの男だ。確か、同時期に冒険者になった男のはずだ。名前は覚えていない。

「ああ、運がいいことにな」

男は、ゴブリンスレイヤーが答えるとは思っていなかったようだ。呆気にとられた後、意外そうな顔を浮かべて、フツと笑った。

「ああ、運がいいことにな」

男はそれだけ言っ去って行ったが、どこか、満足気な顔をしていった。

何がそんなに嬉しかったのかと、ゴブリンスレイヤーは訝しんだが、程なくしてそんな考えは頭から消えた。仕事の時間だ。

いつものように受付に行き、ゴ布林退治の依頼はないか問う。対応したのは、やはり顔馴染みの受付嬢だった。

ゴブリンスレイヤーの顔を見ると、受付嬢は口をあぐりと開けて我が目を疑うような顔を見ると、瞳を真っ赤に充血させて、しどろもどろに言葉を発しながら、依頼を何件か紹介してくれた。

「寝不足か？」

ゴブリンスレイヤーにはそうとしか思えなかった。明らかに呂律が回っていないし、目が赤く腫れている。睡眠不足の初期症状だった。

「寝不足はパフォーマンスを低下させる。養生した方がいい」

全くゴブリンスレイヤーらしからぬ助言。現にゴブリンスレイヤー自身も、らしくないと思った。だからこそ、言われた受付嬢は、もっと意外に思ったに違いない。

まるで心外だと言わんばかりに、口をパクパクさせて硬直している。

そこまでのことだったか、とゴブリンスレイヤーは首を傾げたが、あまり深くは追及しなかった。だかららしくない事はするもんじやないのだ。

何時までも停止する受付嬢を余所に、ゴブリンスレイヤーは紹介された依頼を全て受け、ギルドを出た。

辺境の街の、先のそのまた先の先にある、辺鄙などころの森に住むゴブリンたちのことは、ゴブリンスレイヤーはギルドには黙っていた。

何よりもそれをカレらは望んでいたし、そうした方がいいとゴブリンスレイヤー自身が判断したからだ。カレらは平穩を望んでいる。カレらが人目を避けて暮らしている限り、干渉するべきではない。

同情……と呼べる感情があるのは否定しきれないだろう。だが、真実のところ、藪をつついて蛇を出すにはいかなないという冷静な判断があった。最悪「蛇」ならまだいいだろう。だが、カレらは「蛇」などというレベルでは決していない。

ゴブリンスレイヤーは肩慣らしとばかりに引き受けた依頼を完璧にこなし、鮮やかに解決してみせた。

驚いたことに、ゴブリン殺しに対する忌避感は全く無かった。ごく

当たり前のように、ゴブリンを殺せた。自分でも少し意外だった。だが、やはり自分は根っからのゴブリンゴブリンスレイヤーを殺す者なのだと、再認識することができた。

なるほど「ヤツら」は「カレら」とは違うのだ。もはや別種族と言ってもいいかもしれない。精神的な部分もそうだが、外見的な部分に関して、「カレら」と「ヤツら」では一目で分かる差異がある。一抹の不安が拭い去られた瞬間だった。

ゴブリンスレイヤーは手早く仕事を終えた。

一仕事終えて、ゴブリンスレイヤーは思った。思った以上に爽快感がない。そして充実感もない。ただただ坦々としていた。

どういった心境の変化だろうか、ゴブリンスレイヤーの中にあるゴブリンへの憎しみは、前と比べて少しばかり薄れてしまっていたようだ。だがしかし、この仕事に対する意欲は少しも衰えてはいなかった。どうということか？

ゴブリンスレイヤーは疑問に思ったが、納得できる答えは出せそうにもなかった。ただ、復讐心ばかりに囚われていた彼の人生に、何か違う「感情」が芽生えつつあるようであった。ゴブリンスレイヤーにはそれを言語化するの難しかったが、あえて言うなればそれは、「義務感」や「使命感」と呼ばれるものであったのかもしれない。

誰かがやらなくてはいけない仕事を、彼がやるのだ。復讐心からではなく「仕事」として。

予想していたよりも早く仕事が片付いたので、ゴブリンスレイヤーはちようどギルドで小耳に挟んでいた、とある「依頼」の様子を見に行くことにした。断片的な情報でしかないが、どうやら、新米ばかりの一派パーティーが受けた「依頼」らしい。

長らくゴブリンたちに囲まれていて、すっかり察しの良くなったゴブリンスレイヤーは、直ぐ様、彼らのその後の展開を、おおよそ察した。

なんてことない、よくある話だ。

新米の冒険者たちが、初めての冒険としてゴブリン退治に赴く、なんてことは。

それがゴブリンによって追い詰められ、全滅してしまう、なんてことも。

まあ、よくある話だ。

だからゴブリンスレイヤーは、件の洞窟へと向かった。それもまた、よくある話だった。

*

*

洞窟自体はよくあるゴブリンの巣穴で、ゴブリンスレイヤーにしてみれば、なんてことない棲家だった。

暗闇の中を、ゴブリンスレイヤーは松明も持たず進んでいく。その足取りに、幾ばくも迷いはない。

つくづく便利なものだ、とゴブリンスレイヤーは兜の奥で思った。明かりのない暗闇だというに、まるで昼間のように辺りが鮮明に「見える」のだから……。

暗視バイザーとかいったか……その他にも、ゴブリンスレイヤーの「鎧」と「兜」は様々な機能を搭載していた。赤外線スキャンだとか、生命探知機だとか、音波集積装置とかが「ソレ」だ。他にも、多分、ゴブリンスレイヤーですら把握していない機能が多数あるのだろう。血生臭い、鼻が曲がりそうなゴブリンの臭いすらも気にならない。だが、それを正確に知覚することはできていない。

先に来ていた新米たちは、それなりに腕に覚えがある者たちだったらしく、まだゴブリンの襲撃はない。

だが暫く歩いていると、生命反応があつた。大きい人間サイズのもの二つと、小さなゴブリンサイズの反応が二つだ。程なくして、直視でもそれを確認することができた。

迷いなく、手に持つ短剣を投擲——流星のように放たれたそれは、吸い込まれるようにゴブリンの頭部に直撃し、そのまま一緒にいたもう一匹のゴブリンの心の臓までも貫いた。

暗闇でも正確無比だというのに、これだけ視界が良好であればさもありませんという結果だ。ゴブリンスレイヤーは何の感慨もなく「二

つ」と言った。

だが、そんなことわざわざ言う必要はなかったかもしれない。なぜなら彼の視界の隅の方には、ご丁寧にも「2」というカウントが表示されていたからだ。

「駆け出しか」

聞かなくても知ってるだろうに、ゴブリンスレイヤーはそう言った。見たところ、「神官」と「魔術師」のようだ。どちらも女性。ゴブリンの巣穴ではあまり歓迎できない面子。ゴブリンスレイヤーは彼女たちの様子をチラリと窺う。

神官の方は……まあ、問題なさそうだった。だが、魔術師の方は問題がある。状況からして「毒」にやられているのだろう。

数瞬遅れて、ゴブリンスレイヤーの判断を後押しするかのようになり、バイタルスキャンが彼女の異常を知らせてきた。思っていた通り、「ゴブリンの毒」にやられているようだ。よくある毒だが、言うまでもなく、ゴブリンさながらに面倒な毒である。

運が良い——誰に言うわけでもなく、ゴブリンスレイヤーは呟いた。

「あ、う……か、彼女を……た、助け」

「ああ」

それだけ言って、ゴブリンスレイヤーは鮮やかな手際で彼女に応急処置を施した。

ゴブリンの毒は厄介だ。喰らうと息が詰まり、舌が震え、全身が痙攣し、熱が出て、最期には死に至る。それにどうやら毒はもう全身に廻りきっているようで、傍目には手遅れのように見えた。だがそれは、かつてのゴブリンスレイヤーだったらの話だ。

「飲め」

腰のベルトポーチから、薄気味悪い色をした液体の詰まった小瓶を取り出し、魔術師に強引に飲ませる。

「死ぬほど不味いだろうが、死にたくなければ死ぬ気で飲め」

霞んだ意識の中で、魔術師は言われたとおり最後の死力を振り絞ってソレを飲んだ。

何度も噎せ返り、この世のものとは思えないほど不味かったが、なんとかソレを飲み干すと、程なくして、動悸や目眩、全身の痙攣が収まり、安堵感からか、あるいは薬の副作用からか、魔術師は意識を失った。

「立てるか？」

ゴブリンスレイヤーは神官の方を見もせず訊いた。別に見ても構わなかったが、彼女の名誉のためにも、まあ、それくらいの配慮は必要だろうという、ゴブリンスレイヤーなりの心遣いからだった。

最初、女神官は自分が言われたのだと気づかなかったようで、暫し呆然としていたが、すぐに我に返って言った。

「は、はいー！」

それだけ元気に言えれば問題ないだろう、と判断しゴブリンスレイヤーはそのまま先に進もうとする。

「俺はあの横穴から行く。オマエはここで待っている」

「で、でも……」

「死にかけの仲間を放って置くつもりか？」

「そ、それは……」

そう言われてしまえば、何も言い返すことはできない。

それでも、女神官はどうしようもなく怖かった。この暗闇が、この臭いが、この地面の感触が、そして何よりも「ゴブリン」が恐ろしかった。この目の前の男は得体が知れなかったが、少なくとも「ゴブリン」ではない。そばを離れなくなかった。

あつて間もない知り合い以下の同僚と、自らの保身、どちらが大切かは考えるまでもないだろう。こんな窮地に於いては、どんなに清廉潔白な人間でも、保身に走るに違いない。それを非難することは誰にもできない。だがそれをあえて口にするのは、女神官は聖職者ゆえに憚れた。

そんな女神官の複雑な葛藤を読み取ったゴブリンスレイヤーは、あからさまに深々とため息をつく。

「魔術師はオマエが持て、足手まといになるな、自分の身は自分で守れ、余計な手出しはするな、それが守れるなら、黙ってついてこい」

らしくないと自分でも思う。だがそれも悪くない、とも思うゴブリンスレイヤーだった。

ゴブリンスレイヤーはそのまま、女神官を待つことなく横穴に踏み込んだ。後ろの方では、慌てた様子で女神官が支度をしている。それを逐一モニタリングしてくる「鎧」の機能が、少しばかり煩わしかった。まるで自分の深層心理を読み取られているようだ……。

横穴を進んだ先には、おそらく元人間であったであろう肉塊が、ゴブリンの死体と共に放置されており、ゴブリンスレイヤーの胸クソをより一層悪くした。

だが反面、安心した部分もあった。罪悪感など塵ほどもないが、やはり殺すなら、これくらい分かりやすい方がいい。

「つ、ぐ、う、ええええ……」

ゴブリンスレイヤーの背後を、おっかなびつくりついてきていたはず女神官の方から、なんとも言えない嗚咽の声と、ビチャビチャという水音がした。ツーンとした刺激臭が辺りに漂う。死体に慣れていなかったのだろう。

ゴブリンスレイヤーは後ろで何が起きたのか大体察していたが、おそらく大惨事になっているであろう彼女のことを鑑みて、あえて聞かえなかったことにした。

「……九」

その間にもゴブリンスレイヤーは坦々とゴブリンを処理していた。遭遇したゴブリンは全て、先手かつ初撃での始末だった。ヤツらの殆どは、死んだことさえ認識できなかっただろう。

本来であればヤツらのテリトリーであったはずの暗闇は、もはや、ゴブリンスレイヤーの一方的な惨殺場と化していた。

そんなゴブリンスレイヤーの足取りは、後ろを行く女神官には気づかなかつただろうが、僅かに早足だった。明らかに急いでいる足取りだった。

ゴブリンスレイヤーの生命探知機は、まだもう「一人」いることを報せていたからだ。急ぐ必要がある。ただし、焦りはしないし、慌てもしない。進む歩は着実で、油断はなく、慢心もまたない。彼はゴブ

リンスレイヤーなのだから。

そして辿り着いた。

汚らわしい小鬼どもは悦楽の笑みを浮かべていたが、どうやら間に合ったようだ。ホブが一、シャーマンが一、その他が六。ヤツらはまだゴ布林スレイヤーの存在すら気付いていない。お楽しみに夢中なようだった。

「イヤッ！ 止めて！ ヤダ、やだやだ、誰か助け——」

完全なる暗闇で奇襲を受けることなど、*「ヤツら」*は考えもししていなかったことだろう。初撃でシャーマン、返す刀でホブ、すれ違いざまに二、それから振り返って三、最後に慈悲もなく振り下ろして一。女神官が遅れてやってくる頃には、全てが終わっていた。

「何か被せてやれ」

広間を見渡し、ゴ布林スレイヤーは言った。*「三人目」*も無事だったが、まあ大方の予想していた通り、異性が見ていい格好はしていなかった。

「え？ あ、はい」

一瞬何を言われたのか理解していなかった女神官だったが、スグに理解し実行に移した。*「三人目」*は全身打撲痕に擦り傷だらけで、血に塗れていたが、なんとか正気を保っていた。泣きながら*「ありがとう」*とうわ言のように呟いている。

だがゴ布林スレイヤーはそんなことに微塵も興味はないようだった。彼が興味あるのは*「ゴ布林」*だけだ。それ以外にない。

ゴ布林スレイヤーがおもむろに歩を進めるのを、女神官は気付いた。

辺りにはゴブリンの斬殺死体が転がっている。あんなに恐怖の対象だったのに、安堵するどころか、見るも無残な光景だと哀れに感じた。気持ちが悪くなり、戻しそうになる。それを必死に堪え、彼を見つめる。これ以上何をするつもりなのか。

「……ゴブリンの、子供？」

ゴ布林スレイヤーの先にいたのは、そう、ゴ布林の子供だった。甲高い悲鳴をあげ、身を寄せ合って怯えている。

ゴブリンスレイヤーが剣を振り上げた。

「待って下さい！」

思わずそう叫んでしまった。叫んでから後悔する。止めたとして、どうするというのが。

だがゴブリンスレイヤーの動きは止まった。背中越しに女神官に問う。

「なんだ？」

「……子供も、殺すんですか？」

次いで出た台詞はそんな言葉だった。なんてありふれた言葉だろうか。ゴブリンに怯え震えていただけの女神官が言っても、少しも説得力は有りはしない。だが、それでも言わずにはいられなかったのは、彼女の生来の性格ゆえか。

彼女の言葉は、少なくとも、ゴブリンの子供たちの寿命を数秒伸ばすことには成功したようだ。

ゴブリンスレイヤーは暫し考え込むと、ややあってから当然のことのように言った。

「当たり前だ」

もしかすると、正しく導けば、正しく教育すれば、あの森に住むゴブリンのように成長するかもしれない。その可能性は十分にある。あるいは捕獲して、カレらに預ければ、正しく生まれ変わるかもしれない。マスクをした善良なゴブリンに……。

だがそうではないかもしれない。

ならそれだけで、ゴブリンスレイヤーには十分だった。

それに、その「役目」は彼にはない。彼はゴブリンスレイヤー。ゴブリンテイマーでもゴブリンファーマーでもない。ゴブリンを殺す者だ。彼の役目は、つまるところ、そういうことだった。

「生かしておく理由など一つもない」

だがあまりにも無慈悲過ぎるゴブリンスレイヤーの台詞に、神官はつい言葉を零してしまう。

「……善良なゴブリンが、いたとしても？」

言われてゴブリンスレイヤーは、心底可笑しくなった。マスクの下

で笑みを浮かべる。笑顔を作ったのは久しぶりだったかもしれない。そんな当たり前のことを言われるだなんて！

「善良なゴブリン……探せば、いるかもしれんな」
振り上げた拳に力を籠める。

ああそうさ。探せばいるだろうさ。現に「カレラ」は確かにいた。
「だが……」

でもだからこそ、違うと分かる。違っていると解っている。
だって「ヤツら」は……

「マスクをしたゴブリンだけが、良いゴブリンだ」
ゴブリンスレイヤーは躊躇なく剣を振り下ろした。
モニターのカウントは「21」になっていた。